

A photograph of a steep, rocky cliff face with a dirt path leading up to a cave entrance. The cliff is covered in patches of green moss and small plants. The path is narrow and appears to be made of dirt and small stones. The overall scene is rugged and natural.

北大構内の遺跡

昭和55年度

〔1〕



北大構内の遺跡

土師器を出土する住居址

昭和55年度

(1)

序

北大札幌キャンパスの一隅に、先住民族の住居跡の分布地帯があることは、かなりよく知られていたことで、そのあたり一帯は北大遺跡と呼ばれ、保存されて来ているのである。

ところが、昭和54年度の構内環境整備計画に基き、構内の中央を南北に縦貫する道路の舗装工事を施工中、一部に竪穴住居跡らしいものが発見され、工事は一時中断のやむなきに至った。それで判ったことは、これ迄本学には、このような埋蔵文化財が発見された場合の措置について、はっきりとした方針はきまっていなかったということである。

そこで急拠学内の専門家に御協力を願い、その指導下に、中央道路の発掘調査を進めると共に、工事予定地のすべてに亘って、埋蔵文化財の有無についての子備調査を行い、その結果に基いて、文化財保護法に定める所要の措置を講ずることとした。

この報告書には、この方針がきまった昭和55年6月以降の調査の経過及び結果が詳細に記録されている。そして、一部の遺跡からは、豊富な出土品が現れたので、これに対する綿密な科学的調査研究の結果も収録されているのである。

この調査には、吉崎昌一助教授をリーダーとするプロジェクトチームが組織され、御多忙な本務のかたわら、精力的に作業を進めていただいた。それにより、中断されていた道路工事も無事終了出来たほか、予定の工事計画もすべて順調に進めることができたのは、感謝にたえない次第である。今後はこれがよい先例となって、文化財保護の精神を生かしつつ、構内における建設計画が円滑に進められることを希望したい。

私の個人的興味は、この報告書によって、シャクシュコトニ川流域の先史時代を垣間見ることにある。最後にその期待を付記して、この小文を結ぶとしよう。 昭和56年3月30日

北海道大学学長

今村成和

目 次

序	(i)
例言	(iv)
第一章 北海道大学構内遺跡の調査まで	1
I 調査の実施まで	
II 予備調査地点の概要	
III 昭和54年度に埋蔵文化財の包蔵が確定していた地点について	
IV 昭和55年度に発掘した地点について	
V プロジェクトチーム	
第二章 中央道路関係の調査	5
I クラーク銅像脇	6
II 中央食堂前	7
III 応用電気研究所前	7
IV 中央道路関係調査小括	9
第三章 課外活動共用施設建設予定地の調査	11
I 調査の目的、方法と経過	12
II 遺構	12
III 土器	14
IV 石器と礫	26
V 竪穴の窪地利用について	29
VI 花粉について	31
VII 総括	34
挿図	
挿図—1 クラーク銅像脇落ちみ土層断面図	6
挿図—2 応用電気研究所前竪穴住居平面・土層断面図	8
挿図—3 応用電気研究所前竪穴住居埋土出土の須恵器・擦文土器片	10
挿図—4 土器の組成	14
挿図—5 坏形土器の計測基準と各部位毎の相関図など	22
挿図—6 甕（下左、●印）、壺（下右、▲印）の各部位相関図などと計測基準の図	24
挿図—7 甕あるいは壺形土器における底のつくり方	25
挿図—8 土鍋と思われる土器	26
挿図—9 フィッション・トラック法により得られた結果（噴出年代とウラン濃度の関係— $a \cdot L a / S m$ と $S c$ の関係— b ・報告資料の誘発核分裂飛跡— c ）	27
挿図—10 花粉分析表	32
挿図—11 竪穴別にみた遺物の重量分布	34
実測図	
第1図 遺跡の位置	39
第2図 発掘区の名称と遺構の配置	40
第3図 第1号竪穴（上）および第3号竪穴（下）の平面・断面そして土層断面図	41
第4図 第2号竪穴の平面・断面そして土層断面図	42
第5図 坏形土器	43
第6図 坏形土器（13、14）と甕形土器（15、16）	44
第7図 甕形土器	45
第8図 甕形土器	46
第9図 第1号・第2号竪穴の埋土から出土した甕形土器	47
第10図 甕形土器（37）・壺形土器（38～40）・スクレイパー（41）・砥石（42）	48
第11図 第1号竪穴埋土における土器片の分布	49
第12図 第2号竪穴埋土における土器片の分布	50
第13図 第3号竪穴埋土における土器片の分布	51
第14図 第1号竪穴埋土と第2号竪穴埋土におよぶ土器片の分布—1	52
第15図 第1号竪穴埋土と第2号竪穴埋土におよぶ土器片の分布—2	53
第16図 第1号竪穴埋土と第2号竪穴埋土におよぶ土器片の分布—3	54
第17図 第1号竪穴埋土と第2号竪穴埋土におよぶ土器片の分布—4	55

第18図	第1号竪穴埋土と第2号竪穴埋土におよぶ土器片の分布—5	56
第19図	第1号竪穴埋土と第2号竪穴埋土におよぶ土器片の分布—6	57
第20図	第1号竪穴埋土と第2号竪穴埋土におよぶ土器片の分布—7	58
第21図	第1号竪穴埋土と第2号竪穴埋土におよぶ土器片の分布—8	59
第22図	第1号竪穴埋土と第2号竪穴埋土におよぶ土器片の分布—9	60
第23図	第1号竪穴埋土と第2号竪穴埋土におよぶ土器片の分布—10	61
第24図	第1号竪穴埋土と第2号竪穴埋土におよぶ土器片の分布—11	62
第25図	第1号竪穴埋土と第2号竪穴埋土におよぶ土器片の分布—12	63
第26図	第1号竪穴埋土と第2号竪穴埋土におよぶ土器片の分布—13	64
第27図	第1号竪穴埋土と第2号竪穴埋土におよぶ土器片の分布—14	65
第28図	第1号竪穴埋土と第2号竪穴埋土における石器、礫の分布	66

図版 3

図版1	応用電気研究所前住居址	67
図版2	課外活動共用施設建設予定地の発掘	68
図版3	課外活動共用施設建設予定地の発掘	69
図版4	課外活動共用施設建設予定地の発掘	70
図版5	課外活動共用施設建設予定地の発掘	71
図版6	課外活動共用施設建設予定地出土の土師器	72
図版7	課外活動共用施設建設予定地出土の土師器	73
図版8	課外活動共用施設建設予定地出土の須恵器	74
図版9	課外活動共用施設建設予定地出土の土師器	75
図版10	課外活動共用施設建設予定地出土の土師器	76
図版11	課外活動共用施設建設予定地出土の土師器	77
図版12	課外活動共用施設建設予定地出土の土師器	78
図版13	課外活動共用施設建設予定地出土の土師器と石器	79

例 言

○ 本書は、北海道大学構内における昭和55年度埋蔵文化財調査の概要であり、第一章 北海道大学構内遺跡の調査まで、第二章 中央道路関係、第三章 課外活動共用施設建設予定地関係からなる。

○ 出土遺物および遺構・遺物などの原図・写真は、すべて北海道大学が保管している。

○ 出土遺物の整理から本書出版に至るまで、第一章に記す調査スタッフのほか、椿坂恭代・那須昭比古・田中かほるがあたった。

○ 本書の地形図・遺構図・遺物分布図の北方位は真北を示す。課外活動共用施設建設予定地のグリッドは、Y軸が真北より西偏33度を示す。

○ 遺構の実測図のなかで、カマドの拡大図は、本報告にゆずった。

○ 土器の実測図は、第5図5・8、第6図13～16、第9図31以外復原実測である。

○ 土器の実測図のなかでのドット・マークは器面の黒色処理をあらわす。

○ 土器の分布図に使用した資料は、実測図にとりあげたものを基本とした。また、石器・礫の分布図に使用した資料は、出土した資料のすべてである。

○ 土器の分布原図は、すべて完成している。したがって、必要に応じ使用できるようになっている。

○ 土器の分布図に用いた記号の大きさは、土器片10点を基準とする。したがって、同時に掲げた土器の実測図の割れ目の数とは符合しない場合もある。

○ ふたつの堅穴にまたがる土器の分布図と石器・礫の分布図は、堅穴間の距離・方向を正確に示していない（詳細は第2図参照）。また、同時に掲げた土器の実測図のうち、目のあらいドット・マークは第1号堅穴、目のこまかいドット・マークは第2号堅穴から出土した部分(破片)を示す。

○ 写真図版での遺物の大きさは、実物大を基本とする。ただし例外もいくつかある。

第 一 章

北海道大学構内遺跡の調査まで

I 調査の実施まで

北海道大学には、かつて南から北西にむけてキャンパスを貫くシャクシュコトニ川が流れていた。現在、中央ローンにある枯川と工学部横から構内西部のグラウンド脇にみられるドブ川がその名残りである。古い記録によると、この川はサケ・マス類の産卵河床をもつ清冽な流れであったという。それが、進行する都市化が原因となって、地下水位が大幅に低下、水源であった泉が失われ、昭和26年頃より川としての状況が失われてしまった。

かつては、この川を中心として構内の各所に古代の竪穴住居の残っていることが知られていた（高倉新一郎氏・犬飼哲夫氏談）。しかし、度重なる整地工事で原地形が失われ、大部分の遺跡の所在は不明になってしまった。校舎をはじめ各種施設の建設で、永久に姿を消した遺構も数多いと推定される。

昭和27年には、北方文化研究室の活動の一環として、恵庭寮脇の自然林中にのこる竪穴住居の発掘調査がおこなわれている（北大調査団 1955年）。本学構内で実施された学術上の最初の組織的発掘調査である。

昭和54年9月、たまたま構内中央道路再舗装工事の掘削作業中に竪穴住居の断面らしいものが見出され、若干の擦文土器片の採集されることが、文学部北方文化研究施設の大井晴男助教授から報告された。これを契機にして、土木工事で失われる構内遺跡の処置が問題となった。関係諸機関及び関係教官などの間で幾多の議論が重ねられ、この問題に対処する組織の一つとして北海道大学構内埋蔵文化財調査プロジェクトが関係教官の参加のもとに発足した。

このプロジェクトは、構内におけるあらゆる土木工事に対して、事前にその地区の埋蔵文化財包蔵の有無・性格などを確認調査することを最初の任務とする。これが組織されたのは昭和55年6月、その後直ちに構内各所の工事予定地に、破壊される可能性のある埋蔵文化財が認められるかどうかの予備的な調査が実施された。以下、調査各地点の概要である。

II 予備調査地点の概要

昭和55年度の工事予定について、地表形状の如何を問わず、グリッドを設定し試掘坑をあけて埋蔵文化財の有無をチェックした。表土が廃土その他で攪乱のいちじるしい時には重機を投入し作業効率を計った。このようにしてチェックされた地点は下記のとおりである。

- 1：医療短期大学北側校舎増築予定地
- 2：同上西側校舎増築予定地
- 3：工学部超高压電子顕微鏡室増築予定地
- 4：機器分析センター研究棟建設予定地
- 5：超伝導核磁気共鳴装置建設予定地
- 6：学生部課外活動共用施設建設予定地
- 7：理学部ポンプ施設増設予定地
- 8：工学部超強力X線分析装置室建設予定地

以上8地点であるが、これ以外にも埋設ケーブル、排水管などの地下掘削には現場立会を実施した。

この結果、1の医療短期大学北側校舎増築予定地からは、調査区の東壁に沿って幅1m、長さ30mにわたって浅い溝が検出された。おそらく札幌農学校開設以降の植栽に関連するものであろうと判断された。

5の超伝導核磁気共鳴装置建設予定地では、調査区域の90%がかつて掘削をうけた二次堆積層であったが、その北西端よりピエス・エスキュ状の黒耀石製石器が1点検出された。このため、調査区を予定地区より若干拡張して精査したが、一次的な文化財包含地層は見出されなかった。だが、この際にも擦文土器片6片、黒耀石片1点が採集されている。おそらく、隣接地区の工事中に遺跡の一部がこわされ、そこからの遺物が混入していたのであろう。

6の学生部課外活動共用施設建設予定地は、当初廃土捨場になっており、その除去に、重機を使用して多大の時間を費した。この作業の後にわずかに残る原地表土層を取除いて精査したところ、焼土を含む遺構らしきもの5箇所が検出された。同時に発見された15片の土器片は、14片が土師器、残りが擦文土器の特徴をもっていた。このため、プロジェクトチームから、大学及び各関係機関に文化財保護法による正規の手続きをふまえた協議をおこなう必要がある旨報告することにした。

III 昭和54年度に埋蔵文化財の包蔵が確定していた地点について

今回のプロジェクトのきっかけになったのは、学内中央道路の舗装工事に伴う掘削現場の所見であったことは前に述べた。埋蔵文化財の発見されたのは、3地点である。これらの地点については、道路のカサ上げによる保存を考える立場と、将来の状況を配慮して発掘調査にふみきる立場とに関係者の意見がわかれていた。しかし、各機関との協議の結果破壊がいちじるしいため発掘調査を実施することになった。

IV 昭和55年度に発掘した地点について

Ⅲで述べた中央道路の3地点につづき、協議の結果、学生部課外活動共用施設建設予定地が発掘調査を実施すること止むなきに至った。したがって昭和55年度の発掘調査地点は4地点にしばられた。すなわち

- (a) 札幌市北区北9条西7丁目3番地
クランク銅像脇地点
- (b) 札幌市北区北11条西8丁目3番地
応用電気研究所前
- (c) 札幌市北区北11条西8丁目3番地
中央食堂前
- (d) 札幌市北区北17条西12丁目3番地
課外活動共用施設建設予定地

(a)～(c)は54年度に発見された中央道路関連の地点,(d)は55年度に新たに確認された地点である。現地の調査は,(a)～(c)については林謙作助教授,(d)については横山英介講師が主としてあたった。報文についても同様である(第1図参照)。

V プロジェクトチーム

学内の関係教官が学長の委嘱をうけて結成した。メンバーは下記のとおりである。

理学部 助教授 吉崎昌一(プロジェクトリーダー)

〃 〃 〃 〃 岡田淳子

文学部 教授 岡田宏明

〃 〃 助教授 林 謙 作

〃 〃 〃 〃 菊池俊彦

以上の他に 非常勤講師横山英介が参加し、計6名が協力して調査研究・報文の作成にあたった。また、研究の過程で、理学部地質鉱物学教室には産出岩石の同定を、北海道開拓記念館山田悟郎氏には花粉分析をお願いした。また、札幌市教育委員会社会教育課、北海道教育委員会文化課文化財係、文化庁記念物課の各関係者には、現場における指導の他、いろいろとお世話になった。あわせてお礼を申し上げておきたい。
(吉崎昌一)

文 献

1955：北大調査団 「北大遺跡について」、北方文化研究報告 第10輯 pp. 1～26, 17 figs.
北海道大学

第 二 章

中央道路関係の調査

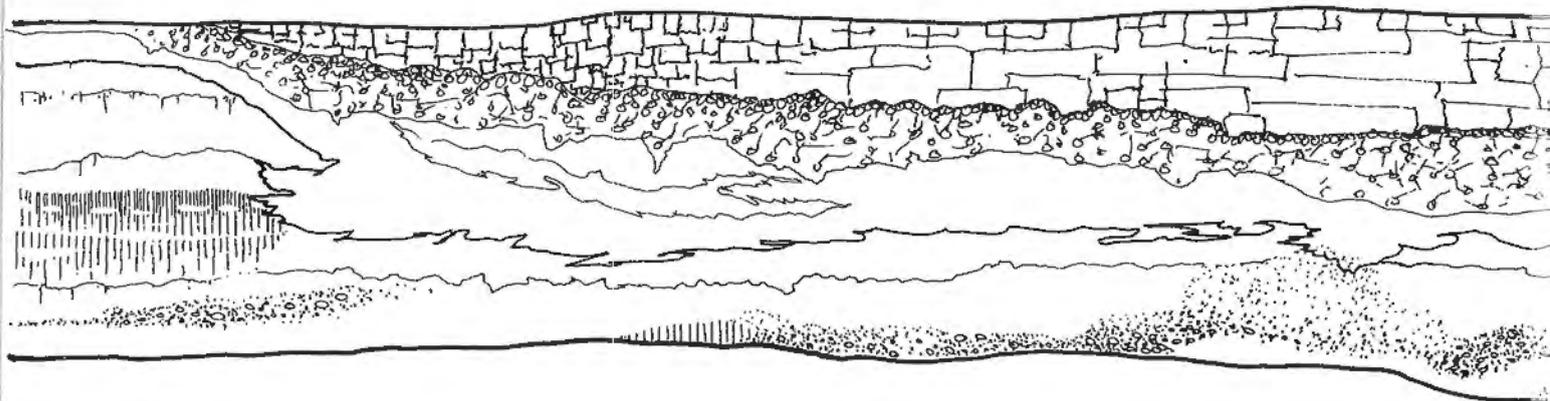
1979年秋に改修工事の開始された時点で、応用電気研究所前・中央食堂前・クラーク銅像脇の三個所で黒色ロームのおちこみが検出された。この三個所について竪穴住居址の可能性を想定し、調査に着手したが、住居址が検出されたのは、応用電気研究所前の1個所にとどまった。

I クラーク銅像脇

舗装・路床材を重機で排除し、攪乱の及んでいない層を露出して調査に着手した。道路中心線から南側はすでに掘り取られており、落ちこみの全形・規模をとらえることはできなかった。北半部に残った部分は、中心線上で測って上辺3.0m・下辺5.4m・高さ1.8mの不整台形をなしていた。落ち込みは、東側でゆるい傾斜をしめすが、西側はやや立ちあがり急になる。

土層（挿図-1）は二層に区分され、それぞれに細分される。I層は黒褐色ロームで、上・中・下に区分され、それぞれ性状が若干異なる。I層はII層のおちこみの部分に限って分布している。II層は茶褐色～淡褐色の細砂・シルトの互層で、礫・粗～中砂・シルト質粘土のラミナが認められる。シルト質粘土のラミナには鉄斑・マンガン斑の集積が顕著であり、上部のものは軽度の厚板状構造（IIa）、中部のものは中～小角塊状構造（IIb）、下部のものは小方柱状構造が認められる（IIc）。上部に黒色ロームが乗る部分は最上部は新鮮な状態での色は7.5GY4/1を呈するが、露出と同時に変色をはじめ、まもなく5Y3/2になる。

I層も上下3層位に区分される。基本的には2層位で、上半部は大方柱状構造で下底部に最大粒径15mm前後の白色パミス粒をふくむが、いちじくしく風化しており、大部分は粗砂状となって黒色ローム中位上面に流れこんだような状態をしめしている。この層位は、全体としてこのパミスに由来すると考えられる粗～中砂がみとめられる。上中位境界面から蹄鉄が出土している。きわめてしまりが良いが、道路敷となっていたためと考えられる。黒色ローム中位は上位（10R1.85/1）よりやや暗色がつよく（2.5YR1.85/1.5）、小顆粒状構造をしめす。多孔質で、長径1.5～2.5cmの玉石が少量混在するほか、擦文土器の小破片が数点見られた。土器片はいずれも若干磨滅している。下部はII層との漸移層で、新鮮な状態では7.5GY4/2であるが、放置すると変色し5Y3/1を呈する。

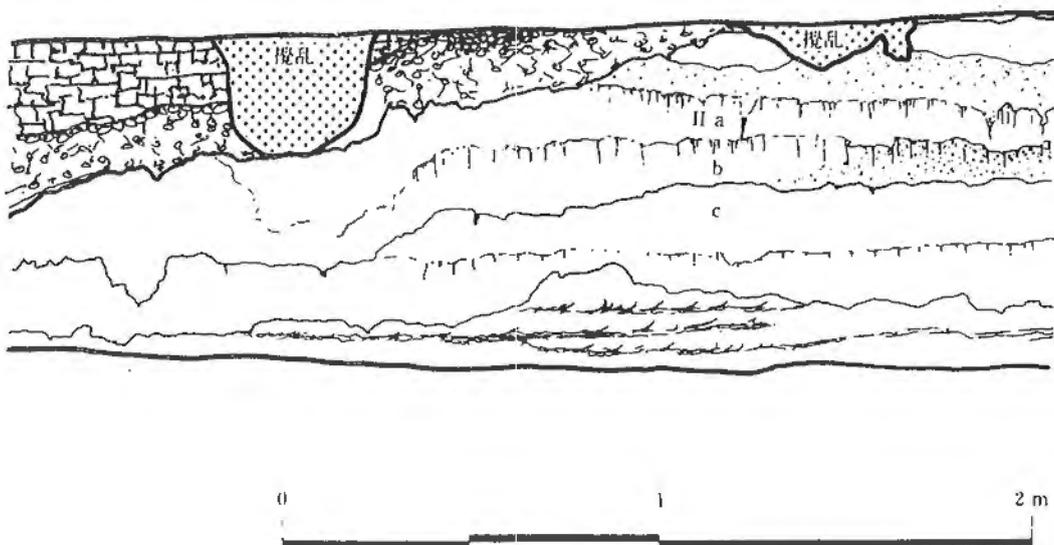


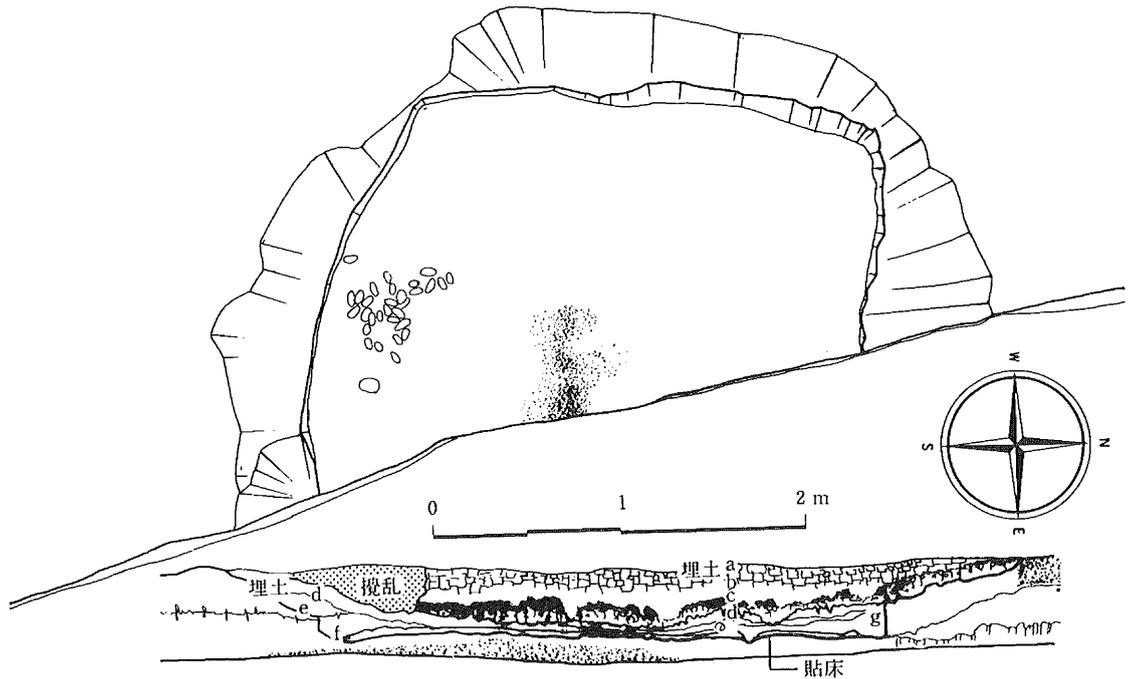
挿図-1 クラーク銅像脇落ちこみ土層断面図

Ⅱ 中央食堂前 1979年秋にみとめられた黒褐色ロームを露出し、輪郭をとらえたが、きわめて不規則な糸巻状のひろがりをしめしていた。黒褐色ロームはほとんど削りとられており、擦文土器の破片が若干出土した。しかし、黒褐色ロームを剥ぎとると褐色シルト層との漸移層があらわれるので遺構とは考えられない。なお、北にむかってシルト層を露出しながらトレンチを延長して見たが、遺構の存在を示す徴候はまったくみとめられず、遺物の出土も見られなかった。

Ⅲ 応用電気研究所前 1979年秋に、道路中軸線東側を掘削した際、竪穴住居断面と考えられる落ちこみが検出され、焼土ブロックも露出していた。旧中央道路の路床材を重機で撤去したのち、調査に着手した。褐色シルトの上面を清掃し、黒褐色ロームのひろがりを確認して、住居址の平面形をとらえようとした。しかし黒褐色ロームのひろがり是不規則で、道路中心線に露出している断面の部分ではたしかに拡大しているが、その西方にも東西1.4m、南北0.8mほどの楕円形のひろがりがあり、それと連続するような状態が見られた。そこで黒褐色ロームの削ぎとりに着手し、西方の落ちこみが皿状を呈することを確認し、そこから細い溝が走っていること、その溝は黒褐色ロームで埋まっているが、その下には褐色シルト質粘土層への漸移層があり、自然の地隙と見られることを確認した。住居址と見られる部分でも、黒褐色ローム層は皿状に落ちこんでおり、これを除去したところ、不整四辺形の輪郭がとらえられた。

住居址埋土は構造のみとめられる部分（埋土a～c）と、無構造ないしきわめて微弱な部分（d～f）に分かれる。前者を上部埋土・後者を下部埋土と呼ぶ。上部埋土最上部は極厚板状構造をしめし、灰白～黄白色浮石粒（粒径1.5～1cm）をわずかにふくむ。浮石に由来すると見られる中～細粒砂をふくむ。色調は5YR2/1。その下の部分（埋土b）はシルト質ロームとなる。この部分は構造の発達が微弱で形態は不明。この上面に焼土の流れこみが見られ、その上面に貼りついて擦文土器破片が検出された。また埋土bの上部にもぐりこんだような状態で須恵器(?)の破片が検出された。埋土bの色調は2.5YR1.7/1。埋土cは粘土質ロームで、小顆粒





挿図一 2 応用電気研究所前竪穴住居平面・土層断面図

状構造をしめす。色調は 5 Y R 1.7 / 1。

下部埋土はいずれも粘土質ロームで、構造はほとんどみとめられない。色調は 5 Y R 1 / 3 を基調としており、夾雑物によって区分される。埋土 d は粒径 2 ~ 3 mm のオレンジ色浮石 ? を少量ふくむ。埋土 e は浮石粒をふくまず、木炭粒を微量ふくむ。埋土 f は d ・ e にくらべやや赤味がつよく、黄褐色シルト質粘土小ブロック（粒径 5 ~ 10 mm）がやや目立ち、赤色の浮石 ? 細粒（粒径 1 mm 以下）が点在する（挿図一 2）。

以上に述べた埋土を除去したところ、ほぼ住居址の輪郭と床面はあらわれたが、壁の立ちあがりが見出されたのは西壁中央からやや南よりの部分にとどまった。それ以外の部分は黄褐色粘土質シルトが激しい凹凸を見せながら住居中央にむかって傾斜していた（図版 4 - 1）。この部分の土色・性状を観察して見ると、比較的堅くしまっているが、わずかに腐植によるよごれが認められた。スコップで掘りとって見ると、10 ~ 15 cm 角のブロックが観察され、芯の部分は比較的しまり・粘性は弱く、色調も新鮮であり、周辺にむかって暗色がつよくなり、しまりも増している状態が観察された。そこで、このシルト質粘土（埋土 g）はプライマリーな状態ではないものと判断して剥ぎ取ったところ、三面にわたって壁の立ちあがりを検出することができた（図版 1 - 2）。なお、この際北西隅に近い部分で、竪穴掘方を掘りこむ際のこされたと思われる土掘具の痕跡（図版 1 - 4）を検出した。幅 10 cm 弱で、床面より 1 ~ 3 cm 上に 3 列に多少重なりながら並んでいた。壁に対してほぼ直角に打ちこんだような状態であった。なお、同様な痕跡は貼床を剥ぎとった際にも検出されている。

住居址は東半を削りとられており、平面形は確認できない（挿図一 2）。遺存した部分から判断すると、南北の壁がやや外方に張り出す平行四辺形を呈していたものと推定される。西壁の現長 2.5 m、北壁・南壁の現長はそれぞれ 1.2 m ・ 2.3 m である。壁の立ちあがりは現在の東南・東北角で 19 cm 弱 ・ 21 cm 強、西南・西北角で 16 cm 強 ・ 25 cm 強である。南側の立ちあがりが低い傾向があるが、褐色粘土質シルトの上面そのものが、南北で 5 cm 前後の高低差がみとめられる。さきに

述べた埋土の状態から考えると、掘方の掘込み面は埋土cの下底部に相当するレベルにあったものと考えられる。

住居断面に接して、中央からやや南に寄った位置に薄い焼土の堆積がみとめられた。焼土層そのものの厚さは最も厚い部分で2cm前後であったが、貼床の上面が軽く熱をうけている。周溝・柱穴等の施設は検出されなかった。

出土遺物は、床面上からは南壁に接して東西1m弱・南北0.7m強の範囲に長径7cm・短径4cm前後の玉石が30個検出された。西南にやや離れた位置に8×10cmほどのやや大形の玉石があった。他のものが砂岩質であるのに対し、これだけが玄武岩質である点が注目される。

埋土bの上面に流れこんでいた焼土中から2個体分の擦文土器破片が出土している(挿図-3-2・3)。挿図-3-3は甕の口縁部破片で内外面ともに炭化物の付着がみられる。内面は黒色処理を加え、横方向のヘラミガキが入念に施されている。表面には2列一組の刺痕列が2段みとめられる。本来は3段程度の構成であったのであろう。施文具は細い割材のようなもので、刺痕断面は楔状である。施文後横方向のナデが加えられており、粘土のまくれは完全に消えている。胎土には石英・斜長石・軽石粒等火山灰起源の鉱物がやや多量に混入されているが、焼締りはよい。

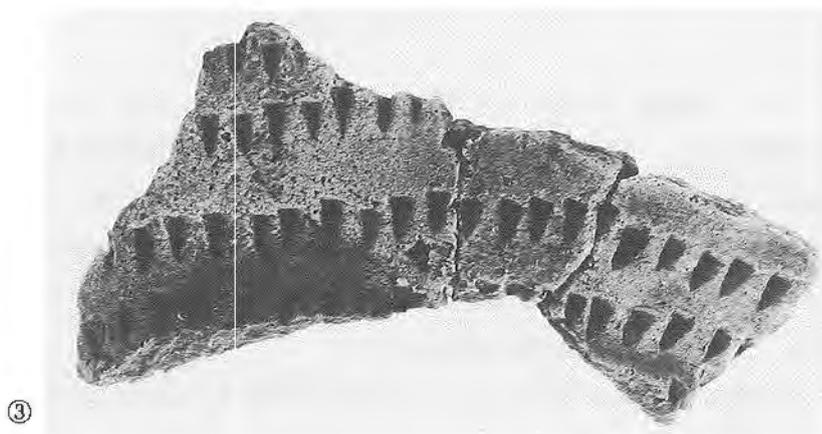
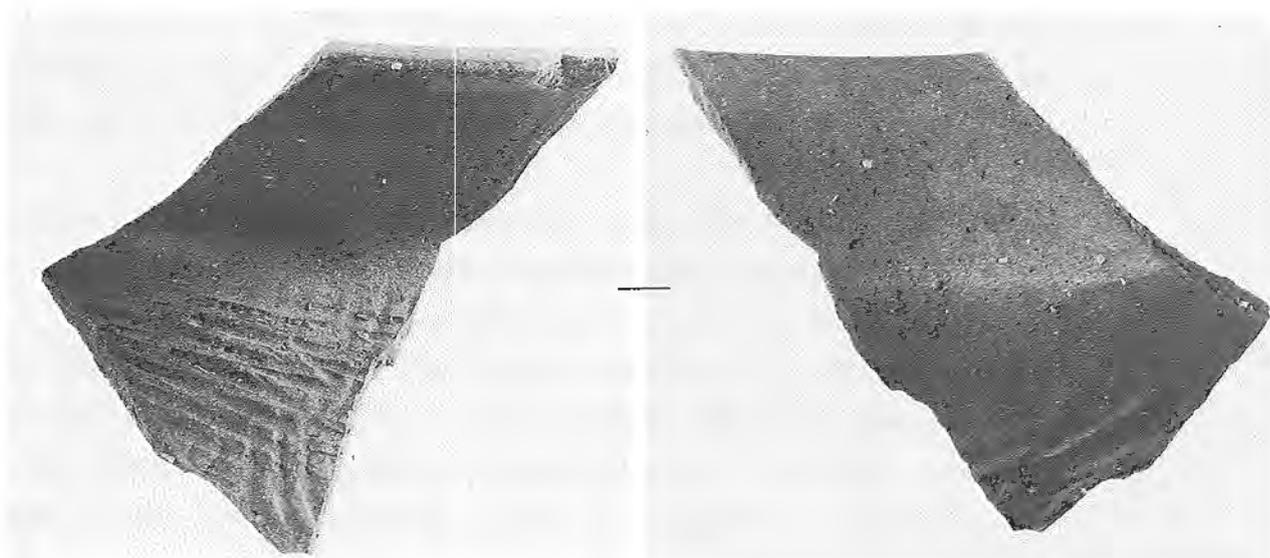
挿図-3-2も、中形甕の胴部上半の破片と考えられる。頸部への反りが見える部分に横方向の以下縦方向のヘラミガキの痕跡がみとめられる。胎土混和物の種類は挿図-3-3とはほぼ同じであるが、石綿(?)の混入がみとめられ、全体として量が多い。焼成は前者よりやや硬い。右下がり(3条)・左下がり(2条)の斜線を組みあわせて斜格子を描き、内側を刺突でふちどった意匠が表現され、その下縁に指オサエ、沈刻をくわえた不鮮明な凸帯をめぐらしている。沈線・刺突の施文具は挿図-3-3とおなじ楔状の断面をもつ割材?である。沈線の末端が凸帯の下にもぐりこんでおり、意匠の描出がおわってから、凸帯をめぐらしたことがわかる。凸帯の下は表面が剝落しているが、部分的に残った器表面から、縦位のヘラミガキが加えられ、無文となっていたことがわかる。

挿図-3-2・3のわずか下位、埋土bにもぐりこんだ形で出土したのが挿図-3-1である。胎土には斜長石・長石の粒子がやや目立つが、焼成はきわめて良好で、断面の中心部にわずかに空隙が見られる程度で、焼締りもよい。内外面は窯出しした直後のようなテリがみられる。口唇上面に横ナデ調整をくわえ、内外面に板叩き目をのこし、内面および頸部表面は横ナデ調整をくわえている。頸部にも縦位の叩きの痕跡が残っている。

IV 中央道路関係 調査小括

クラーク銅像脇・中央食堂前の黒色ロームの落ちこみは、以上のべたところによって、人為的な遺構ではなく、自然地形と考えるべきである。その成因は不明であるが、落ちこみが褐色粘土質ロームの上面に形成されていることから考えれば、ジャクシュコトニ川の運積作用、あるいはその後の陸化の過程と関係するものと思われる。現在も理学部脇の芝生の間に、ほぼ同形・同大のくぼみが点在している。これらのクボミが形成されてまもなく擦文土器破片が流入し、明治期に入って埋りきったものと考えられる。

応用電気研究所前の住居址の年代・規模は不明である。カマドの有無も決定できない。ただ床面中央に近い位置に火炉を設けていること、埋土b上面から出土した須恵器も12世紀前半には位置づけられる等の点から判断すれば、12世紀頃に比定しておきたい。(林 謙作)



挿図—3 応用電気研究所前盛穴住居埋土出土の須恵器(1) 捺文土器片(2, 3)

第 三 章

課外活動共用施設建設予定地の調査

I 調査の目的, 方法と経過

- 1 調査の目的 予備調査の結果この地点が土師器を出土する集落遺跡である可能性がきわめて強いことがわかった。そして、工事区域の変更はほとんど不可能であったため本調査が企画された。それで調査の実施にあたっては、つぎのような方法に留意することにした。
- ① 調査の対象を工事面積全域とし、集落の全容を把握すること
 - ② 出土遺物の取り上げは、全点実測を基本とし、遺構の性格などの把握に活用できるようにすること
 - ③ 遺物のセット関係を把握し、北海道における土師器の在り方の一端を明確にすること。
 - ④ 各遺構の埋土と床面などの土壌を採取し、その分析を行うこと
- 2 グリッドの設定 (第2図) 予備調査によって遺構と考えられる部分が5箇所あったため、各々の観察などに最も効率が良いようにグリッドを配した(第2図)。
- グリッドは、4m×4mを単位とした。原点を敷地内の南隅に設け、北西方向をY軸、これに直交する北東方向をX軸とした。4m×4mの区画はこの軸に沿って設定し、グリッド名は、原点に近い角のX、Y座標をもって示す。つまり、原点からX軸方向へ4m、Y軸方向へ4mのグリッドは「00グリッド」、同様にX軸方向へ16m、Y軸方向へ36mのグリッドは「49グリッド」となる。この遺跡においては、「49グリッド」までが調査範囲として設定された。
- さらに、4m×4mを、1m×1mに小区分した。基本的には4m×4mグリッド同様、その小区画を含む4m×4mグリッドの原点寄りの角を基準として、X、Y軸座標を「-」のつぎに示すこととした。例えば、00グリッド内で最も原点寄りの1m区画は、「00-00グリッド」、反対の角の区画は「00-33グリッド」となる。
- 3 調査の経過 予備調査の所見をもとに7月25日より本調査に着手した。すでに遺構の位置や数がほぼ確認されていたので、グリッド設定や若干の精査に3日間ついやした。その結果最終的に遺構は3基の堅穴と6箇所の焼土堆積しかないことが判明した。また、遺物は堅穴の埋土内に集中して埋没しているらしいことも同時に確認できた。こうして、第4日目から遺構の発掘調査に着手したわけだが、発掘区域の最も北西部よりにある遺構は、壁面の立ち上りもあまり明瞭ではなく、形も小さかったので8月11日には、すべての作業が終了できた。遺跡の中央部分に検出された遺構は、埋土中から比較的多くの遺物が出土したので若干手間取り、8月21日に調査終了。3基の堅穴のなかで遺物が最も多く出土した南側の遺構は、8月23日まで作業が続けられた。最後に調査の最終チェックなどを行って、8月26日に全域の調査を終了、延べ日数は23日間であった。

II 遺 構

- 1 遺構の配置と焼土の分布(第2図) 本調査においては3基の堅穴と、6箇所の焼土のみられる地点が確認され、調査された。発掘区の最も南側に検出された堅穴を「第1号堅穴」とよぶ。グリッドでいえば12、13にまた

がって存在していることになる。それより北側へ約8m隔たって検出された竪穴を「第2号竪穴」とよぶ。グリッドでいえば34, 35, 44, 45にまたがっていることになる。この竪穴からは北西へ約9m隔たって検出された竪穴を「第3号竪穴」とよぶ。グリッドでいえば28と38にまたがっていることになる。

6個所の焼土は、第3号竪穴の南側にまとまって検出された。グリッドでいえば17と27にまたがっており、その径は約4mである。それぞれの焼土は、最小で約0.5m、最大で約1mの径をもち、円形あるいは楕円形である。間隔は、0.4m～2mである。

- 2 第1号竪穴 (第3図上, 図版3) 位置: 12と13にまたがる。発掘区の最も南側である。埋土: 竪穴の輪郭が明らかになってから、その床面まで7層に細分できる。埋土のほぼ中間部に堆積する黒色の粘土層(埋土c)を中心に上下に大別される。上部はクラック帯が入る粘土で遺物、炭などを含む。下部にはそれらが認められない。規模・構造: 長辺3.6m, 短辺3.1mではほぼ東西に長い。床面積は約9.6m²である。形は隅丸の不整四辺形。床は灰色の硬い粘土。ほぼ平坦だが南コーナー寄りでなだらかに落ち込む。壁は、なだらかに立ち上る。柱穴は、西コーナー付近(20×30cm)と東コーナー付近(20×30cm)にそれぞれ1個確認されているが、他は確認が困難であった。付設遺構として、南コーナー付近にピット状の落ち込みがみられた。壁は、竪穴の床面から連続している。開口部での最大径は、約70cmである。また、南コーナー寄りに焼土と灰の集積とその下部に部分的な貼床(厚さ約1cm)とがみられた。焼土と灰の径は約30×20cmでカマドの焚口部に相当するようだが、ソデや煙道など確認できなかった。竪穴に伴う遺物: 存在していない。

- 3 第2号竪穴 (第4図, 図版4) 位置: 34・35・44・45の4グリッドにまたがる。発掘区の東部で第1号および第3号竪穴の中間にあたる。埋土: 竪穴の輪郭が明らかになってから、その床面まで7層に細分できる。埋土のほぼ中間部に堆積する黒色の粘土層(d層)を中心に上下に大別される。上部はクラック帯の入る粘土で遺物、炭などを含む。下部にはそれらが顕著ではない。規模・構造: 大きさは東西5.1m, 南北5.0m, 床面積は約23m²である。形は、隅丸方形である。床は灰色の粘土で硬くしまっており、ほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上る。柱穴は、各コーナー付近に1個ずつ計4個検出されている。特に、カマド側の2個は掘り方が明瞭である。カマドは東南壁でやや南コーナー寄りにある。ソデの外側での幅は、約1.1m, 壁から約0.4～0.5m内側に入る。しかし、くずれがひどく原形を留めない。つくり方は、粘土と砂を混合して固定するもので、右ソデにはほぼ完形の甕形土器(ほぼ完形の第6図16, 図版11—30)を巻き込んでいる。煙道の長さは、焚口部から約2.2m, 壁から約1.6m屋外へ伸びている。つくり方は、壁の一部を含め屋外へ幅約0.9m, 長さ約1.9m, 確認面から深さ約0.2mの掘方をつくり粘土を巻いたものである。煙道の傾斜は、約7度で煙出し穴へ通じる。なお、煙道・煙出し穴・焚口が各2つ認められたことからみると、このカマドは、すくなくとも1回つくりかえられていたことがわかる。(ひとつの焚口は、右ソデの下にあることから、この方が古い)。焚口は、加熱のため床が硬くしまり多量の炭・灰がみられた。遺物: 竪穴に伴う遺物は、甕形土器(第6図16, 図版11—30)1個体である。

- 4 第3号竪穴 (第3図下, 図版5) 位置: 28と38の2グリッドにまたがる。発掘区の最も北西部にあたる。埋土: 竪穴の輪郭が明らかになってから、その床面まで5層に細分できる。埋土のほぼ中間部に堆積する黒色の粘土層

(埋土d)を中心に上下に大別される。上部はクラック帯の入る粘土で遺物や炭などを含む。下部にはそれらが顕著でない。規模・構造：大きさは、東西2.6m、南北2.4mで、東西にやや長い。床面積は、約5.8㎡である。形は、ほぼ隅丸方形である。床は、ほぼ平坦で堅くしまっている。壁は東南壁の一部が不明瞭であるが、ややなだらかに立ち上る。柱穴は、北・西コーナー付近に1個ずつ検出されたが、他はよくわからない。カマドは東南壁で南コーナー寄りにある。煙道は、竪穴の外に約1.5m出る。狭口には、多量の灰や炭がみられる。遺物：竪穴に伴う遺物はない。

III 土 器

1 器種と組成

II-2~4においても述べたように、遺構に伴う土器は、第2号竪穴出土の甕形土器(第6図16, 図版 11-30) 1個体のみであり、ほとんどすべてが各遺構の埋土から出土したものである。

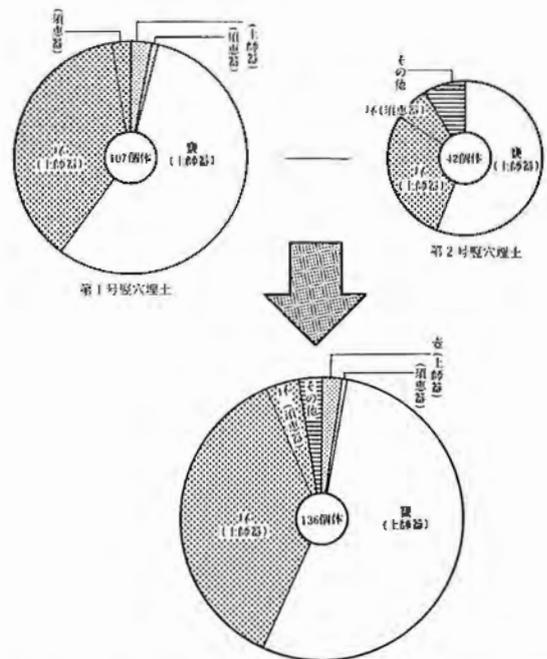
(1) 器種

器種は、坏形土器・甕形土器・壺形土器とその他不明のもの4種類ある。なお、同定できなかった破片は、199点である。

(2) 個体数

個体数および破片数について挿図-4に示してある。このうち、個体数の合計に不足がみられるが、それは、第1号および第2号竪穴の埋土間で14個体(坏形土器3個体—うち土師器2・須恵器1, 甕形土器11個体)が接合したためである。

第1号, 第2号竪穴別にみた器種別の組成比は、挿図-4に示してある。それによると、第1号竪穴の埋土では、個体が識別された総数107個体。うち坏形土器43個体・40.2%(土師器 40



出土地	器種	坏形土器		甕形土器		壺形土器		その他	小計	個体不明破片(数)
		土師器	須恵器	土師器	須恵器	土師器	須恵器			
第1号竪穴	床	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	埋土	40(0)	3(0)	60(22)	0	3(2)	1	0	107(24)	122
第2号竪穴	床	0	0	1(0)	0	0	0	0	1	0
	埋土	12(0)	3(0)	23(7)	0	0(2)	0	4(0)	42(9)	77
第3号竪穴	床	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	埋土	0	0	4	0	0	0	0	4	0
合計		50	5	78(29)	0	3(4)	1	4	154 141(33)	199

注 ()内は不確定個体数

挿図-4 土器の組成

壺形土器 37.4%・須恵器 3個体 2.8%)、甕形土器 60個体 57.0% (土師器 60個体) 壺形土器 4個体 2.8% (土師器 3個体, 須恵器 1個体) である。また、帰属の明らかでない例が、甕形土器22個体、壺形土器 2個体で計24個体分ある。

第2号竪穴の埋土では、個体が識別された総数 42個体。うち坏形土器 15個体34.9%、(土師器 12個体 27.9%・須恵器 3個体 7.0%)、甕形土器 23個体 55.8% (いずれも土師器)、壺形土器 0個体 0%、その他器種不明 4個体 9.3%である。また帰属の明らかでない例が、甕形土器 7個体、壺形土器 2個体で計9個体分ある。

第3号竪穴の埋土からは、総数4個体分の甕形土器(土師器)が出土している。

以上のように、各竪穴の埋土から出土した土器で個体数が識別されたものの総数は、140個体である。さらに、帰属の明らかでない33個体分を加えると、173個体となる。第1、第2号竪穴埋土で確定した136個体分の内訳をみると、坏形土器40.5%、甕形土器54.3%、壺形土器2.2%、その他2.9%ということになる。

(3) 個体識別ができなかった土器片

土器の破片を便宜的に次の4段階にわけて説明する。

A：直径2cm以内の破片 B：直径2～4cmの破片 C：直径4～8cmの破片 D：直径8.1cm以上の破片。下表のように、直径8cm以下で、特に4cm以上の破片が大半を占めている。

	A	B	C	D	計
第1号竪穴埋土	16 片 13.1%	71 片 58.2%	34 片 27.9%	1 片 0.8%	122片
第2号竪穴埋土	19 片 24.7%	38 片 49.5%	20 片 26.0%	0 片 0%	77片
	35 片 17.5%	109片 54.8%	54 片 27.1%	1 片 0.5%	199片

2 個体別資料の 総個体数141のうち、特に第1号竪穴埋土から20個体、第2号竪穴埋土から7個体、第1号竪穴埋土と第2号竪穴埋土との接合・同一個体14個体を選び、その特徴・分布状況について述べる。

(1) 第1号竪穴埋土出土の資料

資料№1 (第10図-39, 第11図-右上,) : 器種と特徴 土師器・壺形土器の胴部上半。破片数18片。頸部と胴部の境に横走沈線が2本めぐり、粘土材は、幅約1cmで内傾する。口唇部外側はヘラ削りもしくはヘラミガキ。頸部は、右下りのハケ目がほぼ時計回りに施される。後に部分的にヨコナデ。胴部は器面の保存が良くない。部分的にハケ目。内面はヨコナデ。部分的にヘラ削りもみられる。口径約15.6cm, 頸径約13.4cm。出土位置12-13~23にまとまる。

※ 粘土材とは、土器を製作する際に用いられる粘土の原材をさす。通常0.5~1.5cmの幅をもつ紐状の粘土で、粘土紐とか粘土帯とよばれる。しかし、文様などに貼付するものととの区別がわずらわしいなどの理由からこうよぶこととする。

資料№.2 (第7図-20, 第11図右上) : 器種と特徴 土師器・甕形土器の口縁部。破片数2片。口縁下に横走沈線が1本めぐり。粘土材は幅約1.5—2cmで外傾する。口唇部の外面は、幅6mmのヨコナデ。沈線を境に上半はミガキ、下半は右下りのハケ目。内面はヨコミガキとヘラ削り、粘土材の接合部が明らかな部分もある。口径20.4cm。出土位置 12—33と13—20に各11片。

資料№.3 : 器種と特徴 土師器・甕形土器。口縁部から胴部下半。破片数58点。口唇部は平坦で頸部が外反し、胴長の形態を呈する。頸部と胴部の境に横走する2—3本の沈線がめぐり。粘土材の幅は約1.5cmで内傾する。外面は、口縁部がヨコナデ、胴部がタテ方向のハケ目調整。内面は、口縁部がヨコナデ、胴部がヨコ、ナナメのハケ目調整が施される。口径21.6cm、頸径17.6cm。出土位置 12—23を中心に22, 33にまとまりがみられる。23, 03, 13—10, 20に点在。

資料№.6 (第7図-21) : 器種と特徴 土師器・甕形土器。胴部下半が欠損している。破片数16点。頸と胴との境に浅い沈線がめぐり。粘土材の幅は約1cmで、頸部からは外傾、以下は内傾する。内外両面ともヨコナデが見られる。胴部は器面の保存が良くない。口径19.8cm、肩径19.0cm。

資料№.7 (第7図-23, 第11図右上) : 器種と特徴 土師器・甕形土器の口縁部破片数1片。口縁部にはナデが加えられ、浅くくぼんでいる。外面は、上半ヨコナデ、下半ハケ目。内面は、ヨコナデ。口径23.0cm。出土位置 南コーナー、12—12。

資料№.8 (第8図27, 第11図右上) : 器種と特徴 土師器・甕形土器の胴部より上。破片数11片。口縁部と、頸部と胴部の境に3—4本の横走沈線がめぐり。粘土材の幅は約1cmで内傾する。頸部外面、胴部上半にヘラミガキ。胴部以下ハケ目調整(右下り)。内面は、ヨコナデ又は、ヘラ削り。口径24.6cm、頸径17.2cm、肩径18.8cm。出土位置 12—13, 23に集中する傾向がみられ、12, 22に点在する。

資料№.9 (第6図15, 第11図右上, 図版10—29) : 器種と特徴 土師器・甕形土器、口縁部から底部までほぼ完形に復原される。口縁に最大径をもち、口唇は外反する。鉢状を呈する。頸部と胴部の境に浅い沈線が1本めぐり。破片数は、11片。粘土材の幅は、約1cmで内傾する。底部は、粘土の円板の上に紐状の粘土材を順次重ねてつくる。外面は、頸部がナナメ、胴部上半がヨコ、下半がタテから右下りのハケ目調整。つぎに全体をヘラミガキしている。内面は、あらいハケ目調整が施される。口径15.4cm、頸径12.7cm、肩部の最大径12.8cm、底径7.2cm、器高11.2cm。出土位置 12—22—23, 特に22にまとまり(20×30cm)がある。

資料№.10 (第10図40, 第11図左下) : 器種と特徴 土師器・壺形土器、口縁部から底部までほぼ完形に復原される。破片数31片。口縁部と頸部下半とに2—3本の横走沈線。頸部が短く、胴上部が大きくふくらむ。粘土材の幅は約1cmで内傾する。外面は、丹念にミガキが施されており、胴上半ではヨコ、下半ではナナメのハケ目調整もみられる。内面はハケ目調整が施されるが、粘土材の接合部が特に肩部に明瞭に残されている(第10図40—d)。口径8.8cm、頸径8.4cm、器高18.0cm(推定)。出土位置 12—12, 13, 22, 23と13—20。

資料№.12(第7図22, 第11図左上) : 器種と特徴 土師器・甕形土器の口縁部。破片数5点。粘土材の幅は約1cmで内傾する。外面は、口唇部がヨコナデで浅く沈線化、頸部は右ナナメ下りのハケ目調整。幅約1cmである。後にヨコナデされる。内面は器面の保存が良くない。粘土材の

接合部が部分的に残る。口径20.8cm, 頸径17.0cm。 出土位置 12—02と23の2個所。

資料№18(第8図26, 第11図左下) : 器種と特徴 土師器・甕形土器の口縁部～胴部下半まで。破片数27点。頸部は外反する。粘土材は幅約1cmで内傾する。内外面ともに接合部がみられる。外面は、口縁部から頸部まではヨコナデ、胴部上半がヨコ、中下半が右下りのハケ目調整である。内面は、頸部までヨコナデ、胴部ではヨコ、ナナメのハケ目調整。工具幅は、約1cmである。口径21.4cm, 頸径15.8cm, 肩径16.4cm。出土位置 12—03, 12に集中して発見された。

資料№22(第5図3, 第11図左上) : 器種と特徴 土師器・坏形土器で全体の約 $\frac{1}{3}$ が残存する。破片数3点。内外両面に横走沈線が各1本めぐり。粘土材の幅は約1cmで内傾する。両面共ヘラミガキが顕著である。内面黒色処理。口径11.8cm, 器高4.9cm。 出土位置 13—10に1個所。

資料№23(第5図4, 第11図左上) : 器種と特徴 土師器・坏形土器で全体の約 $\frac{1}{3}$ が残存する。破片数3点。内外両面に横走沈線が各1本めぐり。粘土材は幅約0.5～1.2cmで内傾する。両面ともヘラミガキが顕著である。内面黒色処理。口径11.6cm, 器高5.2cm。 出土位置 12—22～23に1個所。

資料№26(第5図7, 第11図左上, 図版7—20～22) : 器種と特徴 土師器・坏形土器で全体の約 $\frac{1}{2}$ が残存する。破片数8点。内外両面に横走する沈線が各1本めぐり。粘土材は、幅約1cmで内傾する。両面ともヘラミガキが顕著である。内面黒色処理、ただし、破片のなかには脱色しているものもある(図版7—22)。底外面に沈刻による葉脈文が施される。口径18.0cm, 器高6.3cm。 出土位置 7点が12—23に集中し、1点だけ12—13にある。

資料№42(第7図18, 第11図左上) : 器種と特徴 土師器・甕形土器で口縁部から胴上半部まで。破片数12点。粘土材は幅約5mmで外傾する。外面は、口唇部から頸部までヨコナデ、頸部には右下りのハケ目調整も施されている。胴部はハケ目調整で上半がヨコ、以下タテ、ナナメの方向をとる。内面は、ヨコ方向のハケ目調整である。内面は、炭化物の付着が著しい。口径17.2cm, 頸径12.4cm, 肩径12.6cm。出土位置 12—23の1個所に集中する。

資料№45(第7図19, 第11図右下) : 器種と特徴 土師器・甕形土器、口縁部から胴部上半まで復原。破片数2点。頸部と胴部の境に浅い1本の沈線がめぐり。粘土材の幅は約1cmで外傾する。外面は、口縁部がヨコナデ、胴部上半にはヨコ、以下右下りのハケ目調整が施される。内面はヨコ方向のハケ目調整が施される。部分的に粘土材の接合部が残存する。口径15.0cm, 頸径13.0cm, 肩径13.8cm。 出土位置 12—23の1個所。

資料№48(第8図25, 第11図右下) : 器種と特徴 土師器・甕形土器で、口縁部から胴部上半まで復原。破片数3点。頸部と胴部との境に浅い沈線が1本めぐり。粘土材の幅は約1cmで外傾する。外面は口縁部がヨコナデ、胴部はヨコ方向のハケ目調整、内面は頸部の中程までヨコナデ、以下ヨコ方向のハケ目調整のが施される。口径21.4cm, 頸径17.6cm, 肩径20.0cm。 出土位置 12—12と03の2個所。

資料№55(第7図17, 第11図右下) : 器種と特徴 土師器・小形甕形土器の頸部から上。破片数2点。粘土材の幅は約1cmで内傾する。内面はヘラミガキが顕著である。粘土材の接合部もみられる。口径12.2cm, 頸径10.0cm。 出土位置 12—13の1個所。

資料№76(第5図1, 第11図右下): 器種と特徴 土師器・坏形土器, 底部は残存しない。破片数2点。外面に段, 内面に横走沈線が1本めぐる。粘土材は内傾する。内外両面ともヘラミガキが施される。口径10.2cm。 出土位置 12-12と03の2箇所。

資料№77(第5図6, 第11図右下, 図版7-19): 器種と特徴 土師器・坏形土器, 体部から底部にかけて残存。破片数2点。内面に横走沈線が1本めぐる。粘土材は内傾する。底は幅約1cmの粘土材を貼付したもの。内外面ともミガキが顕著である。内面黒色処理。底径6.2cm。 出土位置 12-13~13-10にかけての1箇所。

資料№82(挿図-7のc, 第11図右下): 器種と特徴 土師器・甕形土器の底部。破片数1点。底は粘土板(挿図ではドットのマーク)の外側に粘土材を巻きつけていくやり方。外面の胴下半部はヘラミガキ。底径6.2cm, 底厚0.9cm。 出土位置 12-12にある。

(2) 第2号竪穴床面と埋土出土の資料

資料№9(第4図, 第6図16, 図版11): 器種と特徴 土師器・甕形土器。ほぼ完形。口唇部は浅くくぼみ, 頸部が外反する。胴部上半にふくらみをもち, 底面は張出す。粘土材の幅は約1cmで内傾し, 頸は胴の内側で貼付される。底のつくり方は, 粘土板の周辺にそって粘土材を順次重ねていくやり方(挿図-7のa, bと同じ方法)である。外面の調整は, 口唇部から頸部上半までヨコナデ, 頸部の中央でナナメのハケ目, 胴部との境がヨコナデ, 以下胴部上半がヨコのハケ目, 底部までナナメの浅いハケ目である。内面は, 口縁部がヨコナデ, 以下胴下半までヨコないしナナメのハケ目調整である。内面の7割が炭化しており, 特に口縁部には厚さ約1mmの炭化物が付着している。口径17.5cm, 最大径18.5cm, 頸径14.6cm, 器高17.4cm, 底径8.4cm。 出土位置 竪穴に伴う唯一の資料。カマドの右ソデに埋込まれた状態で出土。

資料№4(第8図28, 第12図): 器種と特徴 土師器・甕形土器, 胴部下半から欠損。破片数21点。口唇部が平坦で頸部は外反する。粘土材は幅が約1~1.5cmで, 頸部で外傾, 胴部が内傾する。内外両面に粘土材の接合部が残存する。外面は, 口縁部がヨコナデ, 胴部上半がヨコ方向, 下半がナナメもしくはタテ方向のハケ目調整である。内面は, 口縁部がヨコナデ, 以下幅約1cmのハケ目調整がヨコ方向に施される。口縁部内側に炭化物が付着している。口径19.2cm, 頸径16.0cm, 胴径19.6cm。 出土位置 34-12~13, 22~23に多く, 45-10, 45-02に各1点。

資料№6(第7図24, 第12図): 器種と特徴 土師器・甕形土器。破片数2点。口唇部がくぼみ, 頸部が外反する。粘土材の幅は約1.8cmで内傾する。底は, 粘土の円板の周辺にそって粘土材を順次重ねていくやり方(挿図-7のa, bと同じ)。内外面とも口縁部はヨコナデ。胴部は外面でタテもしくはナナメ, 内面でヨコ方向のハケ目調整が施される。内面には炭化物が付着している。底面には広葉樹の葉の圧痕(?)がみられる。口径11.6cm, 底径7.0cm, 肩径9.4cm。 出土位置 34-23と44-13に1点ずつ。

資料№11(第6図14, 第12図, 図版10-28): 器種と特徴 土師器・坏形土器。破片数2点。内外両面に横走沈線が各1本めぐる。粘土材の幅は約0.5cmで内傾する。両面ともヘラミガキが顕著である。内面黒色処理。口径9.7cm, 器高2.9cm。 出土位置 45-03の1箇所。

資料№12(第5図11, 第12図, 図版8-23): 器種と特徴 須恵器・坏形土器。破片数3点。

全体の約 $\frac{1}{2}$ が残存する。ヘラ切りの後ナデ調整が施される。口径12.8cm，器高3.5cm。出土位置 45-02，45-10，44-13に各1片ずつ。

資料№31(第5図10,第12図)：器種と特徴 土師器・坏形土器。口縁部のみ残存している。破片数14点。粘土材は内傾する。両面ともヘラミガキが顕著である。内面黒色処理。口径13.1cm。出土位置 44-02~03に1個所。

資料№32(第5図9,第12図)：器種と特徴 土師器・坏形土器。体部下半から底部にかけ欠損。破片数2点。外面は段，内面は横走沈線1本がめぐり。粘土材の幅は約1cmで内傾する。内外両面ともヘラミガキが顕著で，口縁部はヨコナデされる。口径10.9cm。出土位置 44-13に1個所。

(3) 第3号堅穴埋土出土の資料

資料№1(第13図)：器種と特徴 土師器・甕形土器。口縁部から胴部にかけての破損品である。破片数24点。横走沈線が口縁部と肩部にそれぞれ1条あるいは2~3条めぐり。頸部は外反する。外面は，口縁部で右下り，肩部でヨコ，胴部で右下りもしくはタテ方向のハケ目調整。内面も同様。出土位置 カマドの左右のソデ付近に集中。

資料№2(第8図29,第13図)：器種と特徴 土師器・甕形土器。胴部から底部にかけてのもの。破片数28片。粘土材は外傾する。底のつくり方は，粘土板の周辺に沿って粘土材を順次重ねていくもの(挿図-7のa, bと同様)である。外面は，タテ方向のヘラミガキ。内面は，ヨコ方向，底部付近では右下りのハケ目調整が施される。肩径12.4cm，底径6.6cm。出土位置 堅穴の中央部1個所。

資料№4(第13図)：器種と特徴 土師器・甕形土器の口縁部破片(1点)。外面には，横走する3-4本の浅い沈線がめぐり。内面はヨコナデ。出土位置 東コーナー付近。

(4) 第1号堅穴埋土と第2号堅穴埋土とから出土し接合・同一個体となった資料

第1号堅穴・資料№4+第2号堅穴・資料№7(第10図37,第14図)：器種と特徴 土師器・甕形土器。胴部から底部にかけて残存している。破片数43点(第1号堅穴埋土17片，第2号堅穴埋土26点)。長胴の形態を呈する。底部はあまり張出さない。粘土材の幅は約1cmで内傾する。内外面ともハケ目調整で，外面では右下り，内面ではヨコ方向である。第1号堅穴の埋土には胴部のみ，第2号には，胴部下半から底部の破片が残存する。底径7.5cm。出土位置 第1号堅穴の場合：12-12と23の2個所。第2号堅穴の場合：45-11，34-13，34-23，44-03，35-10~11の5個所に分散している。

第1号堅穴・資料№11+第2号堅穴・資料№20(第9図34,第15図)：器種と特徴 土師器・甕形土器。胴部から底部へかけて残存している。破片数25点(第1号に20点，第2号に5点)。長胴の形態を呈する。粘土材の幅は約1cmで，内傾する。底は，粘土板の周辺にそって粘土材を順次重ねていくやり方(挿図-7のa, bと同一)である。外面はヘラミガキ，内面はハケ目調整が施される。内面には，指圧痕や粘土材の接合部が残る。第1号からは胴部と底部の一部，第2号からは胴部下半と底部の破片が出土している。

出土位置 第1号堅穴の場合：12—22～23と13—10～20に集中。12—12, 13に各々1個ずつみられる。第2号堅穴の場合：34—32, 44—12, 45—02の3個所。

第1号堅穴・資料№15+第2号堅穴・資料№5 (第10図38, 第16図)：器種と特徴 土師器・壺形土器。胴部から底部にかけて残存する。破片数27点(第1号に20点, 第2号に7点)。粘土材の幅1～1.5cmで内傾する。底は、挿図—7のc～eと同じつくりである。外面はハケ目調整の後ヘラミガキが施される。内面の保存は良くない。底部外側面には炭化物が付着する。底径9cm。第1号堅穴からは、胴部破片, 第2号堅穴からは胴部下半から底部にかけての破片が出土している。出土位置 第1号堅穴の場合：12—13と23に集中し, 12—12, 03, 13—10に散在。第2号堅穴の場合：34—23, 34—13, 35—30, 44—13と東コーナーの外側に1片。

第1号堅穴・資料№21+第2号堅穴・資料№3 (第9図31, 第17図, 図版12—32～33)：器種と特徴 土師器・甕形土器。口縁部に3本・頸部と胴部の境に1本の横走沈線。長胴で頸部は直立し口縁部で外反する。破片数43点(第1号に18点, 第2号に25点)。粘土材の幅は約1cmで内傾する。底は、挿図—7のa, bのつくり方と同じである。外面は、口縁部がヨコナデ, 頸部がハケ目とケズリ, 胴部上半がヨコ, 中～下半が右下りのハケ目調整, 底部の接合はヘラで何度も擦り付けている。内面は、口縁部から頸部中程までヨコナデ, 以下ヨコ～ナナメのハケ目調整である。底面にはクマイザサの圧痕がみられる。第1号堅穴からは、口縁部から胴部上半まで, 第2号堅穴からは、胴部から底部にかけての破片が出土している。口径23.5cm, 頸径19.8cm, 肩径20.6cm, 底径7.6cm, 器高29.0cmである。出土位置 第1号堅穴の場合：12—12と23に2個所, 計3個所に集中し, 12—02, 13—10に点在。第2号堅穴の場合：45—02～03に密集し, 44—02, 44—03に点在。

第1号堅穴・資料№25+第2号堅穴・資料№30 (第5図5, 第18図, 図版7—18)：器種と特徴 土師器・坏形土器。約号が残存する。破片数9点(第1号に4点, 第2号に5点)。内外両面に横走沈線が各1本めぐる。粘土材の幅は約0.5～1.0cmで内傾する。両面ともヘラミガキが施される。内面黒色処理。第1号堅穴からは口縁部から底部にかけての大半, 第2号堅穴からは口縁部破片のみが出土。接合はしないが同一個体である。口径12.4cm, 器高4.8cm, 底径5.6cm。

出土位置 第1号堅穴の場合：12—23に1個所。第2号堅穴の場合：44—13に1個所。

第1号堅穴・資料№41+第2号堅穴・資料№8 (第9図32, 第19図)：器種と特徴 土師器・甕形土器。部分的に欠落しているが胴部上半までが残存する。破片数21点(第1号に12点, 第2号に9点)。頸部が外反する小型品である。粘土材の幅は約1cmで内傾する。外面は、口縁部から頸部までヨコナデ, 肩部でヨコないしナナメ, 胴部でタテ方向のハケ目調整。内面は、口縁部がヨコナデ, 頸部がミガキ, そして肩部から胴部がヨコ, ナナメのハケ目調整である。両堅穴間には、ほぼ同様な部分の破片がまたがって残存する。口径11.4cm, 頸径8.6cm, 肩径9.2cm。

出土位置 第1号堅穴の場合：12—12, 13, 12—12～23の3個所と03に1片。第2号堅穴の場合：34—23, 44—13, 45—02の3個所。

第1号堅穴・資料№46+第2号堅穴・資料№14 (第9図33, 第20図, 図版12—31)：器種と特徴 土師器・甕形土器。口縁部から胴部中程までの一部が残存する。破片数6点(第1号に5点, 第2号に1点)。口縁部外側に連続する刻目をつけられる。粘土材の幅は約1cmで内傾す

る。外面の口唇部はヨコナデ，頸部はタテもしくは右下りのハケ目調整，胴部上半はヨコ，以下ナナメのハケ目調整が施される。内面の口縁部はヨコ方向のミガキ，以下ハケ目調整が施される。口縁部破片のみが第2号から出土，他は第1号出土である。口径12.4cm，頸径11.6cm，肩径12.2cm。出土位置 第1号堅穴の場合：12—23～33にかけ約50×30（cm）の範囲内に1個所。第2号堅穴の場合：45—00に1片。

第1号堅穴・資料№52+第2号堅穴・資料№18（第9図35，第21図，図版13—34）：器種と特徴 土師器・甕形土器。胴部から底部へかけての一部が残存する。破片数6点（第1号に5点，第2号に1点）。粘土材の幅は約1cmで内傾する。内外両面ともハケ目調整で，外面はナナメ，内面はナナメヨコ方向である。ただし外面の底部付近はヨコナデされる。底部外面は，ハケ目調整がみられ，後ではほぼ中央部に1条の沈線が施される。第1号堅穴からは，すべての胴部破片が，第2号堅穴からは底部（完形）のみが出土している。底径8.2cm。出土位置 第1号堅穴の場合：12—12～22にかけ約80×20（cm）の範囲に1個所。第2号堅穴の場合：35—11 1個所に底部。

第1号堅穴・資料№72+第2号堅穴・資料№38（第9図36，第22図）：器種と特徴 土師器・甕形土器。底部付近が残存している。破片数3点（第1号に2点，第2号に1点）。底部はやや張出す。胴部での粘土材は，幅約1cmで外傾する。底部は，粘土板の周辺にそって順次粘土材を重ねていくやり方（挿図—7のa，bと同一）である。胴部の外面はタテ方向のヘラミガキが顕著である。第1号堅穴からは底部，第2号堅穴外の東南角附近に胴部破片が残存し接合する。底径7.8cm。出土位置 第1号堅穴の場合：13—10と20の2個所。第2号堅穴の場合：東コーナーの外に1点。

第1号堅穴・資料№74+第2号堅穴・資料№1（第6図13，第23図，図版9—27）：器種と特徴 土師器・坏形土器。破片数15点（第1号に3点，第2号に12点）。内面に横走沈線が1条めぐる。粘土材は幅約0.5cmで内傾する。底は幅1.5cmの粘土材を巻き付けたもの。両面ともヘラミガキによる調整が施される。内面黒色処理。第1号および第2号堅穴からの破片は，接合しないが同一個体と判断できるものである。口径13.4cm，器高5.6cm，底径6.7～6.8cm。出土位置 第1号堅穴の場合：12—12と23の2個所。第2号堅穴の場合：34—32でカマドの上に1個所。

第1号堅穴・資料№75+第2号堅穴・資料№2（第5図8，第24図，図版9—26）：器種と特徴 土師器・坏形土器。底部欠損。破片数16点（第1号に1点，第2号に15点）。内外両面共段や沈線などはない。粘土材の幅は0.5～1.0cmで内傾する。特に外面には粘土材の接合部が残存する。両面ともヘラミガキが顕著である。内面黒色処理。第1号の1片は口縁部破片で，第2号と接合し同一個体となる。口径16.9cm。出土位置 第1号堅穴の場合：12—23に1個所。第2号堅穴の場合：34—13～35—10，44—02，44—13の3個所に集中し34—33，35—20には各々1片が残存する。

第1号堅穴・資料№80+第2号堅穴・資料№33（第5図2，第25図）：器種と特徴 土師器・坏形土器。口縁部から体部の一部が残存する。破片数9点（第1号に7点，第2号に2点）。内面に横走沈線が1条めぐる。粘土材は内傾する。内外両面ともヘラミガキが施される。内面黒色処理。第1号堅穴出土の口縁部破片の両側に第2号堅穴出土の破片が接合する。口径12.6cm。

出土位置 第1号堅穴の場合：12—23で40×50(cm)範囲内に集中。南コーナーの外側に1片，計2個所にみられる。第2号堅穴の場合：44—13に1個所。

第1号堅穴・資料№86+第2号堅穴・資料№37 (第9図30, 第26図)：器種と特徴 土師器・甕形土器の口縁部。破片数3点(第1号に2点, 第2号に1点)。口唇部はヨコナデで浅く沈線化している。粘土材の幅は約0.5cmで内傾する。内外面ともヘラミガキが施され、特に内面にはハケ目調整が先行する。口径15.0cm。 出土位置 第1号堅穴の場合：12—23に約40cmの距離で残存する。第2号堅穴の場合：45—10にある。

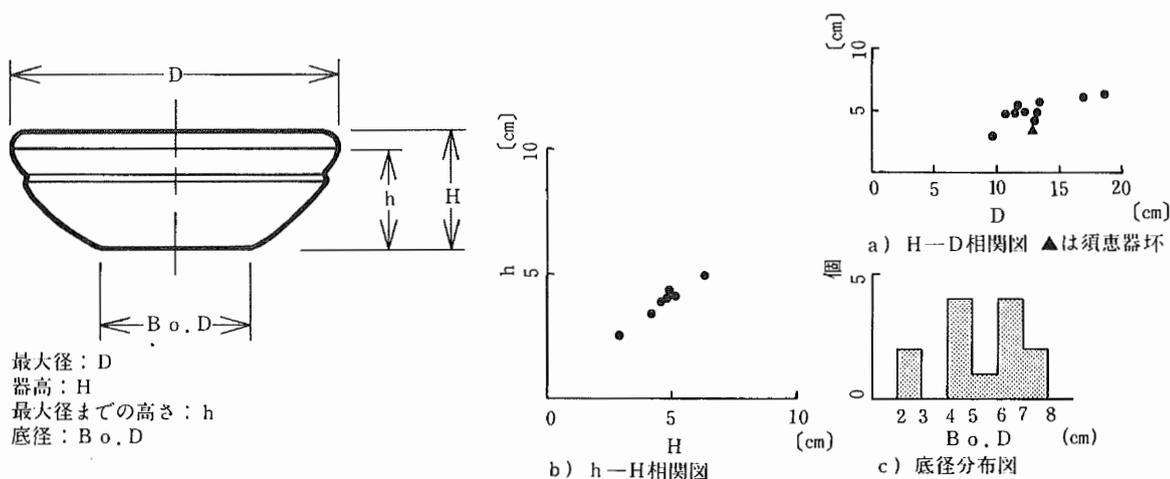
第1号堅穴・資料№87+第2号堅穴・資料№17 (第5図12, 第27図, 図版8—25)：器種と特徴 須恵器・坏形土器。口縁部から底部まで全体の約 $\frac{2}{3}$ が残存する。破片数は10点(第1号に8点, 第2号に2点)。第2号堅穴から出土した口縁部の小破片の両側に第1号堅穴出土の破片が接合する。底部はヘラ切りで後にわずかにナデ調整が施される。口径13.4cm, 器高3.4cm。

出土位置 第1号堅穴の場合：12—12, 22, 13, 23で、特に22に集中する。第2号堅穴の場合：44—13に1個所。

3 器種別にみた 1 坏形土器 (第5図・第6図) 土器の特徴

第1号堅穴埋土から43個体, 第2号堅穴埋土から15個体, 合計58個体分出土している。そのうち須恵器は5個体分を占める。

〈土師器〉



挿図—5 坏形土器の計測基準と各部位毎の相関図など

(1) 器形

器形全体がわかる例が10~11個体とすくなく, この方面の分類作業は困難である。したがって, 以下に述べることは, ひとつの見通しであって決して確定したものではない。

坏形土器の最大径と器高との関係を示したのが, 挿図—5 aである。それによると, 最大径が15~20cmをこえるものと, 10~15cm前後のものがある。前者を大形, 後者を小形と一応呼称する。

大形品は, 完形もしくはそれに近いものが2個体(第5図7・8), 小形品は, 8~9個体(第5図1~5・9・10・13・14)できわめて少ない。形は, 程度の差はあるがいずれも外膨れ

する。さらに、内外両面に横走沈線（外面は段状になるものも含む）がめぐるもの（第5図1・3・4・5・7・9・14）、それが内面にのみみられるもの（第5図2・13）、全くみられないもの（第5図8・10）のちがいがあある。口縁部の形は、内湾するもの（第5図1・2・5・9・14など）直立するもの（第5図3・4・10など）に大別され、前者が後者を上回る。底部の形は、平底かやや丸味をもつものが大半を占めるが、低い高台様平底をもつものが2個体（第5図6・第6図13、図版7—19、9—27）みられる。挿図—5cには、底径の分布を示してある。資料数はすくなく断定できないが、2～3cm、4～5cm、6～8cmの3種類がみられ、8cmをこえないようだ。

(2) 成形

体部から口縁部にかけては、幅約0.5～1.5cmの粘土材を順次重ねて接合していくやり方が観察された。観察された資料によれば、粘土材の接合部は、すべて内傾する。

底部のうち、低い高台様平底のつくり方は、幅約1cmの粘土材を底部外面にまきつけたものである。

(3) 器面調整・黒色処理

内外両面ともヘラミガキが施され、内面を黒色処理するという共通性が指摘できる。

ミガキを施す場合、外面の段・沈線の上下でヘラのあたりの幅・走向が変化する場合がある。段・沈線より上では、細かいアタリが水平に走り、以下の部分では、ヘラケズリを加えた後やや幅が広く斜めに走るヘラミガキを加える場合が多い。口縁部にナデを加えた例（第5図5）やヘラミガキに先だて放射状にハケ目調整を施す例（第6図13c）もみられるが、きわめてすくない。内面は、ミガキの方向に一定性がみられない。ただし、口縁部は、ヨコ方向である。

内面の黒色処理がみられないものもわずかだがある（第5図1・9など）。しかし、それがみられないからといって、黒色処理が施されなかったとは断言できない。資料№1—26（第5図7、図版7—19）などにみられる“色おち”の現象がしばしばあるらしいからである。

(4) 文様

底外面に葉脈を形どった沈線文をもつ例が1個体ある（第5図7b、図版7—21）

〈須恵器〉

胎土にツナギの混入量が多く硬質のもの（第5図12、図版8—25）とそれが少く軟質のもの（第5図11、図版8—23）があり、底部から口縁部にかけての厚さのうつりかわりに違いがある。前者は底部から約 $\frac{1}{2}$ の範囲が最も厚く、後者は、ほぼ平均した厚味をもつ。2例とも底部切り離しは回転ヘラ切りで、ナデによる調整を加えている。

2 甕形土器（第6図～第10図）

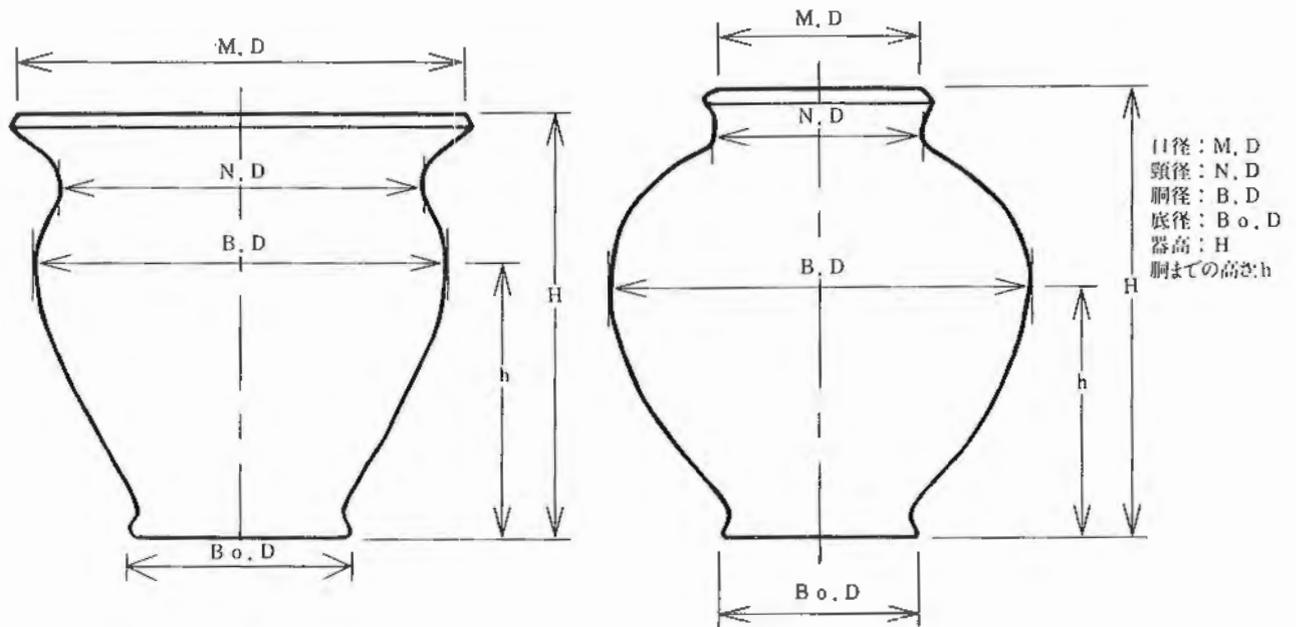
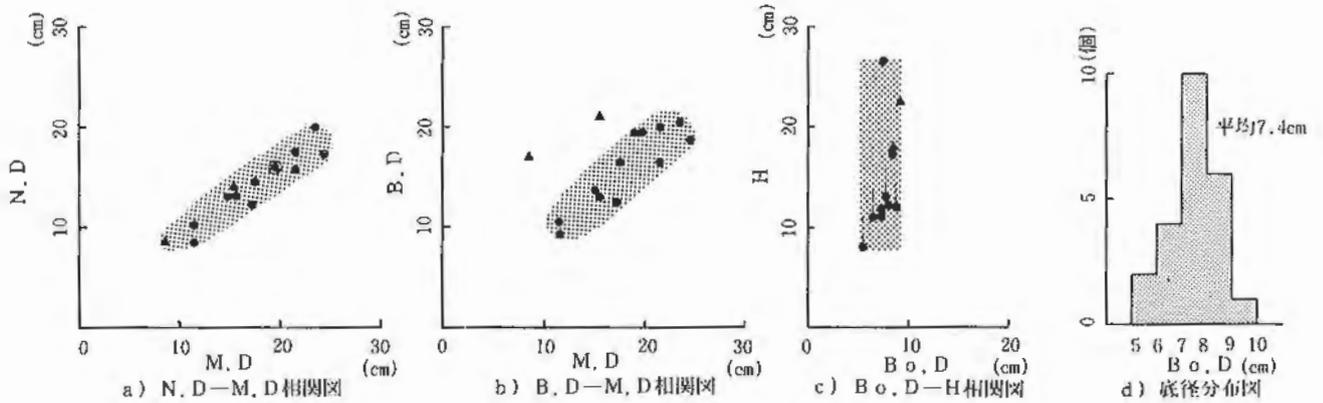
第1号竪穴埋土から60個体、第2号竪穴カマドソデから1個体、同竪穴埋土から23個体、第3号竪穴埋土から4個体、合計78個体分出土している。すべて土師器である。

(1) 器形

器形全体がわかる例が3~4個体とすくなく、この方面の分類作業は困難である。したがって、ここでは、口径の推定できるもの17例を検討の対象とし、見通しを述べるに止める。

仮りに、口径が20cmをこえるものを大甕、20cm以下のものを小甕と呼称すると、前者は、口径が高さより小さく、後者は、口径が高さより大きいものといえよう。

大甕の口唇部は、沈線によるつき出しがみられるという特徴をもつ。つき出しは、内角がつき出ることが多いが、外角がつき出るもの(第7図21・図版12-32・33, 第8図25・26), 内・外角がつき出るもの(第7図22, 第8図28)もみられる。口縁部は、いずれも外反・外折するが、肩部との間に頸部がみとめられるものが4例(第7図22, 第8図25・27, 第9図31), 極端に短いものが3例(第7図21, 第8図26・28)で、大多数はきわだった屈折をもたずに肩部へ移行する。



挿図-6 甕(下左, ●印), 壺(下右, ▲印)形土器の各部位毎の相関図などと計測基準の図

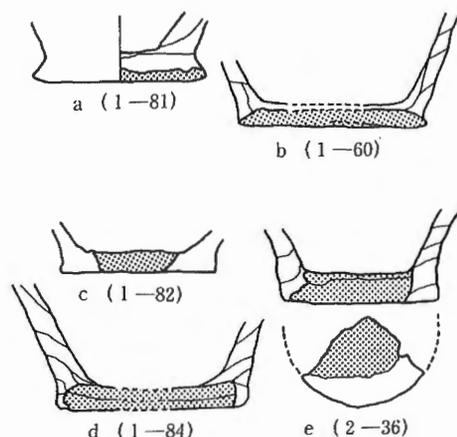
小甕は、口縁部が外反し口唇部につき出しが加えられず、自然な丸味をもつ例(第6図15, 第9図32など)を含む。

底部外面観は、屈曲がなく底面に接するもの(A)、底部周辺にたち上りが見られるもの(B)、底面が外に突出するもの(C)にわけられる。内面観は、胴部から中心に向かって曲線的に移行するもの(a)、底面が平坦なもの(b)、中央部が厚くなるもの(c)にわけられる。底部の形態の判断できる23例についてみると、C+aが多数を占め、大甕・小甕別にも特に差異が認められない。また、挿図-3 dには、底径の分布を示してあるが、5 cm—10cm内におさまり、7.4 cmが平均的大きさとなる。しかし、大小の区別はむずかしい。

(2) 成形

土器の断面などで観察された所見にもとづくなら、大部分のものが、口縁部・肩部・胴部ともに幅約1 cmの粘土材を順次重ねていく方法で、その接合部は内傾する。しかし、口縁部・肩部で外傾する例(第7図17・19・20など)、あるいは、口縁部と肩部で接合部の傾斜が反対になる例(第7図21)がある。

底面と胴部との接合の手法には、胴部に粘土円板(底部)を接着する手法-A(挿図-7 a~c)と、粘土円板(底部)の周囲にさらに粘土材を貼付する手法-B(挿図-7 d・e)と



挿図-7 甕あるいは壺形土器にうすい粘土板の周辺にそって粘土を垂ねていくやり方(a,b)と粘土板の外側に粘土を巻きつけていくやり方(c-e)の二通りあることがわかる。

がある。また、Aには外側から貼付する場合(挿図-7 a・b)と内側からはめ込む場合(挿図-7 c)とがある。手法のちがいにもかかわらず、前述したように底面は外へ突出するものが多数を占める。

(3) 器面調整

大甕・小甕とも、器表面の調整の手順にはいくつかの変化があるが、器種・タイプなどの区分とは一致しない。口唇部は、大甕ではナデ調整にもなうつき出しがみられるという特徴をもつが、小甕では少ない。口縁部のナデは肩部の上縁まで及ぶ場合(第8図25・26・28など)が多い。しかし、口縁部下端から頸部にかけてヘラミガキを加える例(第8図27)、ナデを重ねてナナメのハケ目調整を加える例(第6図15、第7図20・22・23など)などがあり一定しない。肩部ではヨコナデやヨコ方向のハケ目調整、胴部ではナナメあるいはタテのハケ目調整が多いが、ヘラミガキ(タテ方向)が施される例もわずかにみられる(第6図15、第8図29、第9図34など)。

内面胴部の調整は、ヨコもしくはナナメのハケ目(第6図16、第7図21・24など)が圧倒的に多く、連弧状にハケ目を施す場合(第6図15、第8図28など)が少数みられる。

底外面は、ミガキが一般的であるが、ハケ目1例(第9図35)、クマイザサの圧痕(第9図31)8例、葉脈文(第7図24)1例、中央部沈線文(第9図35)5例などもみられる。

(4) 文様

沈線文：口縁部に1~3本の横走沈線がめぐるもの(第7図20・23、第9図31)と口縁部と頸

部下半に3～4本ずつ横走沈線がめぐるもの(第8図27)がみられる。全資料の5%強を占める。

刻目文：口縁部にヘラ状工具により連続的に刻まれるもの(第9図33) 1例。

(5) 補修

補修孔と思われる小孔がみられる土器片が1点出土している。修復がなされていた証拠である。

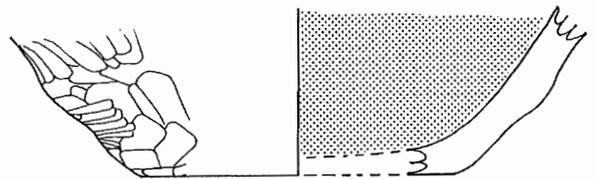
3 壺形土器(第10図)

第1号竪穴埋土から4個体分出土している。須恵器は1個体分の胴部破片である。

口縁部の残存するもの2個体で、外折するもの(第10図39)と外反するもの(第10図40)とである。前者は口縁部をヨコナデ、後者は肩部から頸部をヨコナデした後、頸部にナナメのハケ目調整を施し、さらに口唇部をヘラミガキする。挿図-3bに示したように、口径と胴径の相関は、甕形土器の一群から分離している。成形は、幅約1cmの粘土材を順次重ねていくやり方で、接合部は内傾する。特に、頸部から胴部にかけての状況は第10図40dに明瞭に示されている。

4 その他(挿図-8)

土鍋の破片と考えられる底部破片が2例含まれる。きわめて厚手のつくりで、胎土に石英・角閃石等の細粒の混和物を多量にふくむ。しかしきわめて緻密でかたい。内面は黒色処理されており、外面はヘラケズリ仕上げである



挿図-8 土鍋と思われる土器(1/2)

が光沢を帯びている。体部の厚さにくらべ、底部は中心部にむかって急激に薄くなる。底部破片のみであり、土鍋であると断定はできないが、今後注意する必要がある。

IV 石器と礫

1 石器の器種と礫 1 石器

第1号竪穴埋土から2個出土している。

スクレイパー(第10図41, 第28図, 図版13-35): 素材は黒耀石の剥片である。剥片の末端部で主剝離面へ二次加工を施したもの。4.00×3.55×1.41cm。25g。

砥石(第10図42, 第28図, 図版13-36) 泥岩製。河原礫を利用し、四面が使用され凹んでいる。破損品。7.90×5.70×2.50cm。130g。

2 礫

第1号竪穴埋土の礫: 総数24点。総重量6,245g。すべて河原礫である。石質は、安山岩、砂岩、石英岩などである。11点が破損している。

第2号竪穴埋土の礫: 総数3点。総重量4,521g。このうち34-12グリッド出土の一例は一面に炭化物質の附着が認められるもので、他例よりはるかに大きく3,560gを占める。全例とも水磨をうけた礫で安山岩質。

2 石器と礫の出土位置(第28図) 第1号竪穴埋土の場合：12-12と12-13~13-10にかけて多くみられ、12-02, 22, 23に散在する。スクレイパーは12-23に、砥石は12-12にみられる。

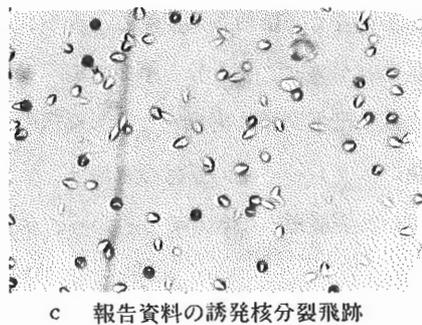
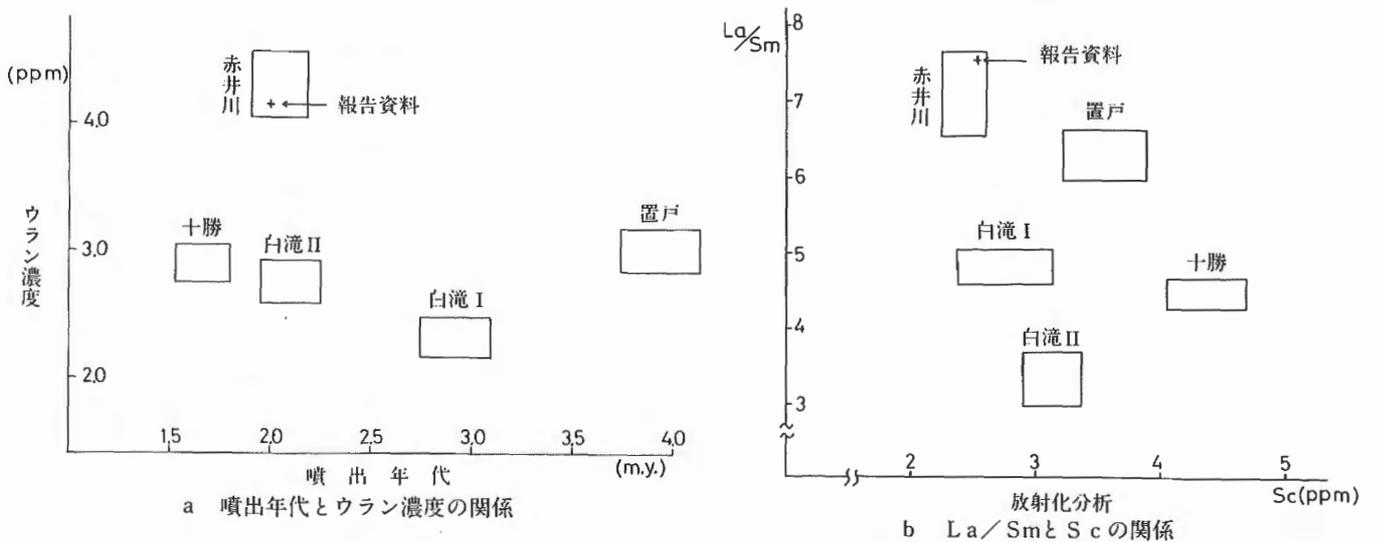
第2号竪穴埋土の場合：34-12, 44-03, 44-13に各1点ずつみられる。(横山英介)

3 黒耀石片の原産地 近年、国の内外を問わず、自然科学的手段による考古学試料の産地推定が盛んになってきた。我国でも蛍光X線分析、放射化分析、原子吸光分析、発光分光分析などの手段を使って元素を定量し、それらのパターンから産地推定を行なおうとしている。

北海道においては黒耀石の原産地として、白滝、置戸、十勝、赤井川の四カ所のみが知られている。これら原産地から、はるかに離れた石狩低地帯には新・旧時代を問わず多くの遺跡が存在し、そこから出土する黒耀石は当然に人間の手により各地から運び込まれたものと考えられる。ただし、その原産地については必ずしも明らかにされていなかった。

興水(投稿中)によると、北海道における原産地の黒耀石について、フィッシュン・トラック法により得られた噴出年代とウラン濃度から、その関係は挿図-9 aの如く識別され、さらに放射化分析法により、原産地の黒耀石について微量成分の定量を試みた結果、各原産地はLa/SmとScの関係から挿図-9 bの如く識別された。

1980年夏、北海道大学構内の遺跡調査中に発見された黒耀石片について今回原産地推定を試みたので、それについて報告する。



挿図-9 フィッシュン・トラック法により得られた結果

試料は親指大の黒耀石片1個であり、その採取地点は課外活動共用施設建設予定地である。今回の実験では、この試料を二つに分け一方はフィッシュン・トラック年代測定に、他方は放射化分析に用いた。

(a)フィッシュン・トラック年代(A)とウラン濃度(Cw)の算出

フィッシュン・トラック年代とウラン濃度は次の式で算出できる(FLEISCHER et, al.1975)。

$$A = \zeta (\rho_s / \rho_i) \rho D$$

$$C_s = k (\rho_i / \rho D)$$

(ここで標準ガラスとしてMS-1を用いたので定数kおよびζの値は、それぞれk=2.750およびζ=1.115×10⁻³となる。なお²³⁸Uの自発核分裂壊変定数はλ=7.03×10⁻¹⁷y⁻¹を採用した。)

試料及び標準ガラスのエッチングは46%HFを用い、23℃で15秒間行なった。誘発核分裂飛跡密度測定用の試料及び標準ガラスは立教大学原子炉TRIGA・Mark II回転試料棚で1時間熱中性子照射した。飛跡密度測定は光学顕微鏡下(×400)で観察した。その測定結果を挿図-9 aに示した。

(b)放射化分析法によるSm, La, Scの測定

試料及び標準試料(USGS-G-2を用いた)を同時に原子炉で18時間熱中性子照射した。照射終了から10日後にガンマ線検出器(Camberra社製Ge(Li)半導体検出器)によりSmとLaを測定し、45日後に同様にScを測定した。これらの測定結果を挿図-9 bに示した。

結局フィッシュン・トラック法及び放射化分析法のいずれの結果(挿図-9 a, b)からも今回扱った試料は、赤井川地域から運び込まれた黒耀石であることが推定される。(興水達司)

文 献

FLANAGAN, F・J・(1969) U・S・Geological Survey Standards, II. First Complication of Data for New U.S.G.S. Rocks. Geochim. Cosmochim. Acta. 33, pp.81~120.

FLEISHER, R.L., PRICE, P.B. and WALKER, R.M. (1975) Nuclear Tracks in Solids.-Principles and Applications. 605 p. University of California Press

興水達司(投稿中) 石狩低地帯に出土する黒耀石片の原産地, 地球科学

鈴木正男(1977) 考古化学とその周辺(4)-フィッシュン・トラック法による年代測定, 「化学の領域」31, pp 789~798.

4 小 括

- ① 黒耀石製のスクレイパーおよび砥石といった石器は、第1号堅穴の埋土内から出土したもので、ほぼまちがいなく土師器と共伴するとみられる。
- ② 多数発見された礫は、第1号と第2号堅穴の埋土内から出土し、土師器や石器と共伴する。
- ③ 石器や礫は土師器同様に廃棄物として堅穴の窪地に捨てられたものと考えられる。
- ④ 黒耀石製のスクレイパーの原材の産地は、フローテーション用に採取した第1号堅穴の埋土中に含まれていた黒耀石の小剥片の分析から、余市郡赤井川村であることが推定された。

これらの所見のなかで黒耀石製スクレイパーの出土が特に注目されよう。いままで調査・報告されている北海道の土師器を伴う時期には、この種の剥片石器を含め確実な石器の共伴例は知ら

れていない。また、擦文土器を伴う遺跡でも、明らかな剝片石器の製作・使用が確認されていない。

したがって、当初この種の石器の出土について混入の可能性があるのではないかと疑われていた。しかし、この遺跡は単一の時期のものであること、周囲に全く他の遺跡の存在がみられないこと、遺物の出土状況などから判断して石器だけを混入とみなすことはできないという結論に到達した。さらに、それを裏付けするほかの証拠もあがっている。親指爪大の黒耀石小片2点の検出もそれである。この資料はフローテーション用に採取した土壌中に含まれていたものである。これは、この遺跡の人々によって石器製作が行なわれていた証拠であり、より古い時期の石器を他の地域から拾い集めてきて再利用した可能性も否定される。したがって、このスクレイパーがこの遺跡において土師器と共伴したという事実はもはや動かし得ないところとなった。それは、前述した擦文土器を出土する遺跡や遺構のなかに混入の疑いを持たれている石器類についても再検討の必要を迫るものだし、むしろある種の型式のものについては共伴の可能性さえあり得るのではないだろうか。今後丹念に出土例をチェックしてゆけば相当数の共伴例が確認されることが期待される。

一方、この種の石器の伝統は、いまのところ先行する統縄文文化の末期に求めるのが常道だろう。特に、主剝離面側に二次加工を施す手法などにその技術伝統が伺い知れる。ここで問題となるのが統縄文文化の石器製作過程と技術である。統縄文文化はその当初より金属器の流入と使用がひとつの特徴であるといわれている。すくなくともこの文化の前半には、金属器が主体を占め石器が減少するという現象はみられない。しかし、その末期いわゆる後北C—D式くらいの段階になると大部分の石器が姿を消し、伴出する石器はほとんどスクレイパーのみになってしまう。今回発見されたスクレイパーは、もちろんこの統縄文文化末期のもの延長上に位置づけられるものであろう。

V 竪穴の窪地利用について

Ⅱ～Ⅳで述べたように、出土遺物のうち第2号竪穴の甕形土器1個体を除き大半の遺物は各竪穴の埋土から出土した。これは、竪穴が廃棄されて後、床面が粘土（第d又はe層）に被覆された直後から、この層を覆う黒色の粘土（第c又はd層）が堆積・発達する頃にかけて遺物が捨てられたという可能性が強い。

当初、私たちはこれらの遺物の在り方が、人間の行為によるものか、河川の氾濫など自然の営力によるものかその判断に苦慮したのだが、各竪穴の埋土における遺物の分布状況や竪穴外にはほとんど遺物がみられないことなどから判断して前者であるという結論にいたった。ここでは、識別された個体別資料の各竪穴埋土内にみられる組み合わせを中心に、竪穴の窪地利用の状況をみる。

- 1 第1号竪穴の場合
- 12—02：資料№4，同10，同12，同21の4個体分。
 - 12—12：資料№3，同4，同7，同8，同10，同11，同15，同18，同21，同41，同48，同52，同74，同76，同82，同87の16個体分と砥石，礫
 - 12—22：資料№3，同8，同9，同10，同11，同23，同52，同87の8個体分と礫

第3章 課外活動共用施設建設予定地の調査

12—03：資料№3，同15，同18，同41，同48，同76の6個体分

12—13：資料№1，同8，同10，同11，同15，同18，同41，同55，同77，同80，同87の11個体分と磔

12—23：資料№1，同2，同3，同4，同8，同9，同10，同11，同12，同15，同18，同21，同23，同25，同26，同41，同42，同45，同46，同74，同75，同80，同86，同87の24個体分とスクレイパー，磔

12—33：資料№2，同3，同46の3個体分。

13—10：資料№3，同11，同15，同18，同21，同22，同72，同77の8個体分と磔

13—20，資料№2，同3，同10，同11，同72の5個体分

以上述べたように土器の個体が最も多くみられた個所は，12—23（24個体分）であり，ついで12—12・13の順となっている。そこは，竪穴のほぼ中央から東南部にかけての位置にあたる。また，磔や石器の在り方もほぼ同様の傾向を示す。

2 第2号竪穴の場合 34—12：資料№4と磔1点

34—22：資料№4の1個体分

34—23：資料№4，同5，同6，同7，同8の5個体分

34—13：資料№2，同4，同5，同7の4個体分。

34—32：資料№6，同20の2個体分

34—33：資料№2の1個体分

35—10：資料№2，同7の2個体分

35—20：資料№2の1個体分

35—30：資料№5の1個体分

35—11：資料№7，同18の2個体分

44—02：資料№2，同31，同32の3個体分

44—12：資料№20の1個体分

44—03：資料№3，同7，同31の3個体分と磔1点

44—13：資料№2，同5，同6，同8，同12，同17，同30，同32，同33の9個体分と磔1点

45—00：資料№14の1個体分

45—10：資料№4，同2，同37の3個体分

45—11：資料№7，同12の2個体分

45—02：資料№3，同4，同8，同12，同20の5個体分

45—03：資料№3，同11の2個体分

東コーナー外：資料№5，同38の2個体分

以上述べたように，土器の個体が最も多く含まれていた部分は，44—13で9個体分である。しかし，第1号竪穴に比べ，各集中区内での土器個体の組合せが少ない。

分布個所は，34グリッド内（南コーナー付近），35グリッド内（南西壁内側），44グリッド内（東コーナーから北東壁内側にかけて），45グリッド内（北コーナー内側）の4個所である。いずれも窪地のあまり内側には入り込まず，中央から北西部にかけて特に空白となる。

- 3 第3号竪穴の場合 資料№.1がカマドの両ソデ部に2箇所みられるほか、資料№.2がほぼ中央部、資料№.4が東コーナー付近にそれぞれみられる。
(横山英介)

VI 花粉について

- 1 試料及び処理方法 ここで取扱った試料は課外活動共用施設建設予定地、第1号住居址床面直上の覆土と、発掘区内に掘りこまれた溝から採取した泥炭及び泥炭質粘土である。

尚、泥炭、泥炭質粘土は竪穴住居址の掘り込み面の下位に位置する。

又、覆土についてはフローテーションを行い、炭化種子の採取につとめた。

物理・化学処理は下記の方法に拠った。

アルカリ処理（水酸化カリウム10%溶液に一昼夜浸す）→水洗（上澄液が透明になるまで約2週間）→混酸処理（塩酸：硝酸：水の1：1：1液を加え約5分間湯煎）→水洗→アルカリ処理（5%水酸化カリウム液を加え約5分間湯煎）→水洗→比重分離（塩化亜鉛一比重2.0を加え、1000r.p.m.で約1時間遠心分離）→水洗→アセトリシス処理（氷酢酸で脱水後、濃硫酸：無水酢酸の1：9液を加え約2分間湯煎のち遠心分離し、氷酢酸で洗浄）→水洗→時計皿処理→フッ化水素酸処理（24時間）→水洗のちグリセリンゼリーで封入し、マニキュア液でシールし各3～5枚のプレパラートを作成した。

検鏡にあたっては樹木花粉が200個以上になるまでに出現した花粉・胞子を無作為に同定し計数した。

表示にあたっては樹木花粉は樹木花粉総数を基数とした百分率で、草本花粉・胞子については樹木花粉・草本花粉、胞子の総数を基数とした百分率で表示した。又、樹木花粉・草本花粉・胞子のそれぞれの出現比も表示した。

尚、覆土より採取した試料は花粉・胞子の含有率が低く、全試料を処理したが花粉・胞子総数が67個であったことから図示せず、それぞれの出現個数を別表に示した。

- 2 分析結果 樹木花粉19属1科、草本花粉3属13科、胞子3科の計22属17科の花粉・胞子が検出された。その内訳、および想定される樹木・草本・胞子は下記の通りである。

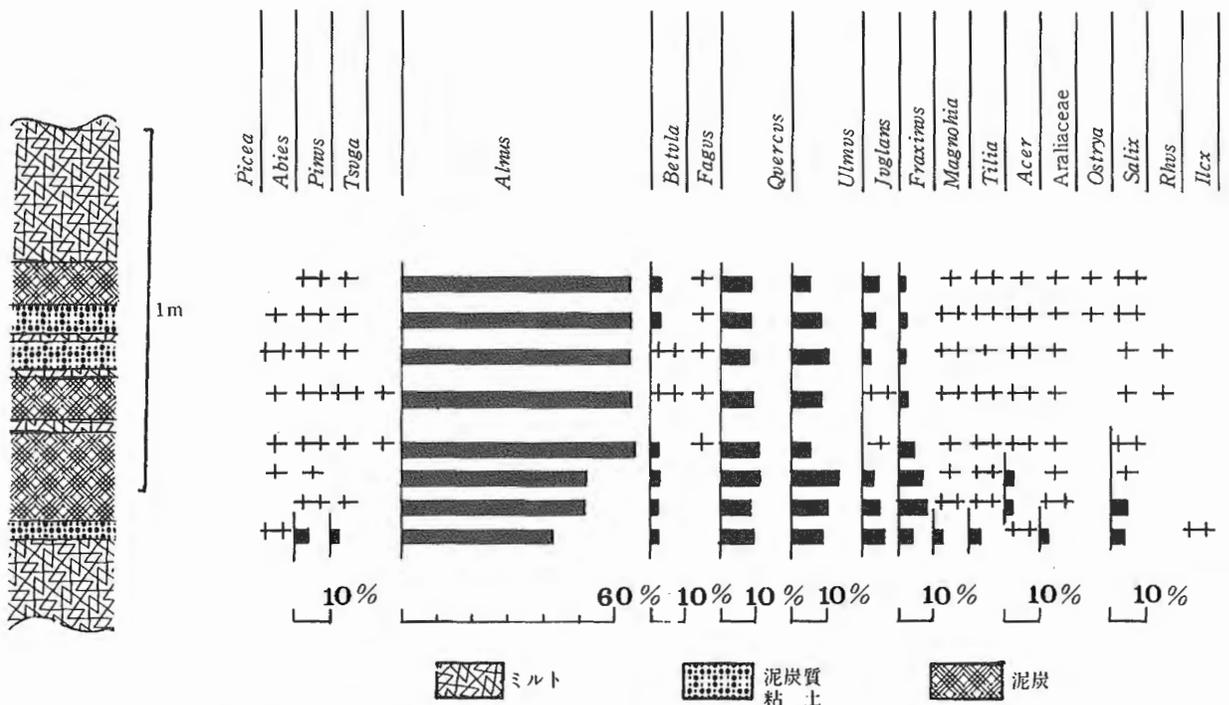
樹木：*Picea*（トウヒ属：エゾマツ、アカエゾマツ）、*Abies*（モミ属：トドマツ）、*Pinus*（マツ属：ハイマツ）、*Tsuga*（ツガ属：コマツガ）、*Alnus*（ハンノキ属：ハンノキ、ケヤマハンノキ）、*Betula*（カバノキ属：シラカンバ、ウダイカンバ等）、*Fagus*（ブナ属：ブナ）、*Quercus*（コナラ亜属：ミズナラ、カシワ）、*Ulmus*（ニレ属：ハルニレ、オヒョウニレ）、*Juglans*（オニグルミ属：オニグルミ）、*Fraxinus*（トネリコ属：ヤチダモ）、*Magnolia*（モクレン属：コブツ、ホオノキ）、*Tilia*（シナノキ属：シナノキ、オオバボダイジュ）、*Acer*（カエデ属：イタヤカエデ、ハウチワカエデ、クロビイタヤ等）、*Ostrya*（アサダ属：アサダ）、*Araliaceae*（ウコギ科：ハリギリ、コシアブラ、タラノキ）、*Salix*（ヤナギ属：カワヤナギ等）、*Rhus*（ウルシ属：ヤマウルシ、ツタウルシ等）、*Ilex*（モチノキ属：ハイイヌツゲ等）、*Hydrangea*（アジサイ属：ノリウツギ、ツルアジサイ等）

第3章 課外活動共用施設建設予定地の調査

草本：*Artemisia* (ヨモギ属：オオヨモギ，オトコヨモギ等)，*Carduoideae* (キク亜科：アキタブキ，ハンゴンソウ，チシマアザミ等)，*Ranunculaceae* (キンポウゲ科：ニリンソウ，カラマツソウ，ルイヨウショウマ等)，*Caryophyllaceae* (ナデシコ科：ミミナグサ，ウシハコベ，カワラナデシコ等)，*Polygonaceae* (タデ科：オオイタドリ，エゾノギンギン等)，*Polygonum* (タデ属：ミゾソバ，イシミカワ等)，*Umbelliferae* (セリ科：エゾニユウ，ヤブジラミ，セリ等)，*Geraniaceae* (フウロウソウ科：チシマフウロウ，ゲンノウショウコ等)，*Cruciferae* (アブラナ科：ナズナ，タネツケバナ，ヤマガラシ等)，*Lysichiton* (ミズバショウ属：ミズバショウ)，*Typhaceae* (ガマ科：ガマ) *Plantaginaceae* (オオバコ科：オオバコ)，*Gramineae* (イネ科：ヨシ，ススキ，ササ，エノコログサ等)，*Iridaceae* (アヤメ科，ハナショウブ，ヒオウギアヤメ)，*Liliaceae* (ユリ科：ユキザサ，エンレイソウ，マイズルソウ，アマドコロ，ウバユリ，タチギボウシ等)，*Cyperaceae* (カヤツリグサ科：アブラガヤ，スゲ，カヤツリグサ等)

孢子：*Osmundaceae* (ゼンマイ科：ゼンマイ，ヤマドリゼンマイ等)，*Lycopodiaceae* (ヒカゲノカズラ科：ヒカゲノカズラ等)，*Monolate type spore* (シダ類，オシダ，メシダ等)

全般的に，樹木花粉では *Alnus*, *Quercus*, *Ulmus*, *Juglans*, *Fraxinus* が多く出現し，なかでも *Alnus* が40~60%出現し優占する。*Alnus* は下位で40%であるが次第に増加し中位で60%以上の出現率を示し，以後60%強の安定した出現傾向を示す。*Quercus*, *Ulmus*, *Juglans* には大きな変化はみられず，わずかに *Fraxinus* が下位より上位にむけ減少する。又，下位では10%弱ではあるが *Magnolia*, *Tilia*, *Acer*, *Araliaceae*, *Salix* が出現するが，上位では減少し1~2%



挿図-10 花粉分析表

弱の出現率となる。

草本花粉・孢子では *Artemisia*, Ranunculaceae, Gramineae, Cyperaceae, Monolate type spore が多く出現し, *Gramineae*, *Artemisia*, *Monolate type spore* が優占する。

Artemisia, Ranunculaceae, Gramineae は下半部で多く出現するが, 中位, 上位では減少し *Artemisia*, Ranunculaceae は5%弱の出現となる。逆に, *Monolate type spore* は下位から上位に向け徐々に増加し, 上位では30%程出現する。

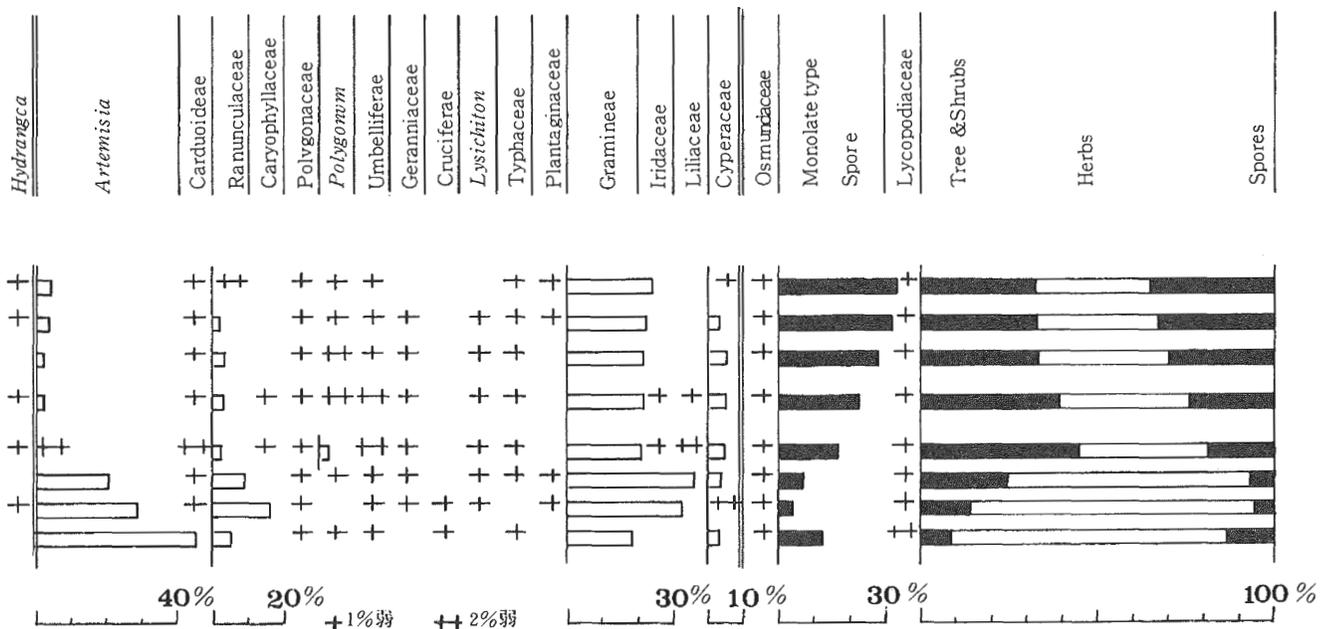
全般に樹木花粉・孢子が下位から上位にむけて増加し, 草本花粉が減少する傾向がみられる。

花粉・孢子の含有率の低い第1号住居址の覆土では, 検出数は少ないものの *Alnus*, *Quercus*, *Artemisia*, Gramineae, *Monolate type spore* が比較的多く出現する。

又, 住居址床面直上の覆土の一部のフローテーションを行ったが種子の検出はできなかった。

- 3 古植生について 覆土の試料からは第1号住居で人びとが生活していた頃の植生を十分に推定することができないが, 樹木ではハンノキ, ミズナラ, ハルニレ, 草本・孢子ではオオヨモギ, ヨシ, ススキ, シダ類が多かったと考えられる。

層序的に住居址の下位にあたる泥炭・泥炭質粘土の分析結果から, 人びとが生活を営む以前の遺跡周囲には湿地がひろがり, 湿地にはハンノキを主とした河畔湿地林のハンノキ-ヤチダモ林がひろがり, 比較的乾燥した自然堤防上にはミズナラ, ハルニレを主とし, これに, カエデ, シナノキ, ハリギリ, ホオノキ, コブシ, オニグルミが加わったミズナラ-ハルニレ林が存在していたが, 水位の上昇R 河川流路の変更等により湿地の分布域が拡大してハンノキ林がひろがり, 逆にホウノキ, キタコブシ, シナノキ, カエデ, ハリギリが減少したと考えられる。



また、トドマツ、エゾマツ等と想定される針葉樹花粉が最下位で5%弱、中上位で1~2%弱検出されるが、これらの花粉は周辺の山地から風によって供給されたもので、遺跡の周囲に針葉樹が生育していたとは考えられない。青森県の八甲田山周辺を分布の北限とするコマツガ、道南の黒松内低地帯を分布の北限とするブナ等の花粉も1%弱ではあるが確認される。これらは風で飛来してきたものであろう。

ハンノキ・ヤチダモ林の林床や湿地にはヨシ、カヤツリグサ、アブラガヤ、シダ類が繁茂し、ミズナラ・ハルニレ林の林床や林のへりの空間にはオオヨモギ、ニリンソウ、カラムツソウ、オオイトドリを主とした高茎群落が繁茂していたが、水域、湿地の拡大にともなって高茎群落の勢力が減少し、湿地の林床に生育するヨシ、シダ類の勢力が増したものと考えられる。

以上のことから、水位が上昇し湿地面積が拡大し、ハンノキ林、林床のヨシ、シダ類が増加のピークを示した頃に、自然堤防上に住居が造られ、人びとが生活していたと推定することができる。

(山田悟郎)

VII 総 括

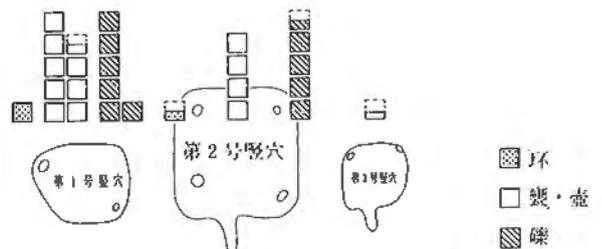
1 この遺跡で発見された遺構は、3基の竪穴と6個でひとまとまりになる焼土堆積とであり、これらはセットとなって同一時期に営まれていたと考えられる。時期は、第6図16・図版11—30の土師器・甕形土器が使用されていた頃と思われる。しかし、集落としてはこれらの遺構だけで完結されたものではなく、その一部が調査されたと考えるのが妥当である。

2 竪穴が廃棄された後の窪地は、土器・石器・礫や炭など、廃品を投棄する場として活用されていた。

3 各竪穴の窪地で最も遺物量が多いのは第1号で、ついで第2号・第3号の順であることは、Ⅲ・Ⅳに詳述した。ちなみに各窪地別にみた遺物の重量比を挿図—11に示してある。これをみても第1号のその重量が最も嵩んでおり、出土数に比例する。

4 この遺跡で出土した遺物は、第2号竪穴に伴う甕形土器1個体以外すべて、これらの窪地から出土したものであり、土師器の坏・甕・壺形土器のほか須恵器の坏・壺やスクレイパー・砥石などの石器、礫である。これらの遺物類が廃品として投棄された時期は、Ⅲで述べたように土器からみて第2号竪穴に伴う甕形土器と型的に分離することが不可能なことなどから、竪穴が廃棄されて間もない頃と考えられる。また、各窪地への投棄は、例えば第1号と第2号のそれに土器の接合・同一個体がみられることなどからほとんど同一時間内と考えて間違いない。

5 各窪地内における廃品の在り方は、Ⅴで詳述した。第1号では中央部から南東部にかけて、第2号では南・東・北の各コーナー付近と南西壁内側の4箇所、第3号では南と東のコーナー付近、南東壁内側、中央部の4箇所



挿図—11 竪穴別にみた遺物の重量分布(単位1kg)

である。

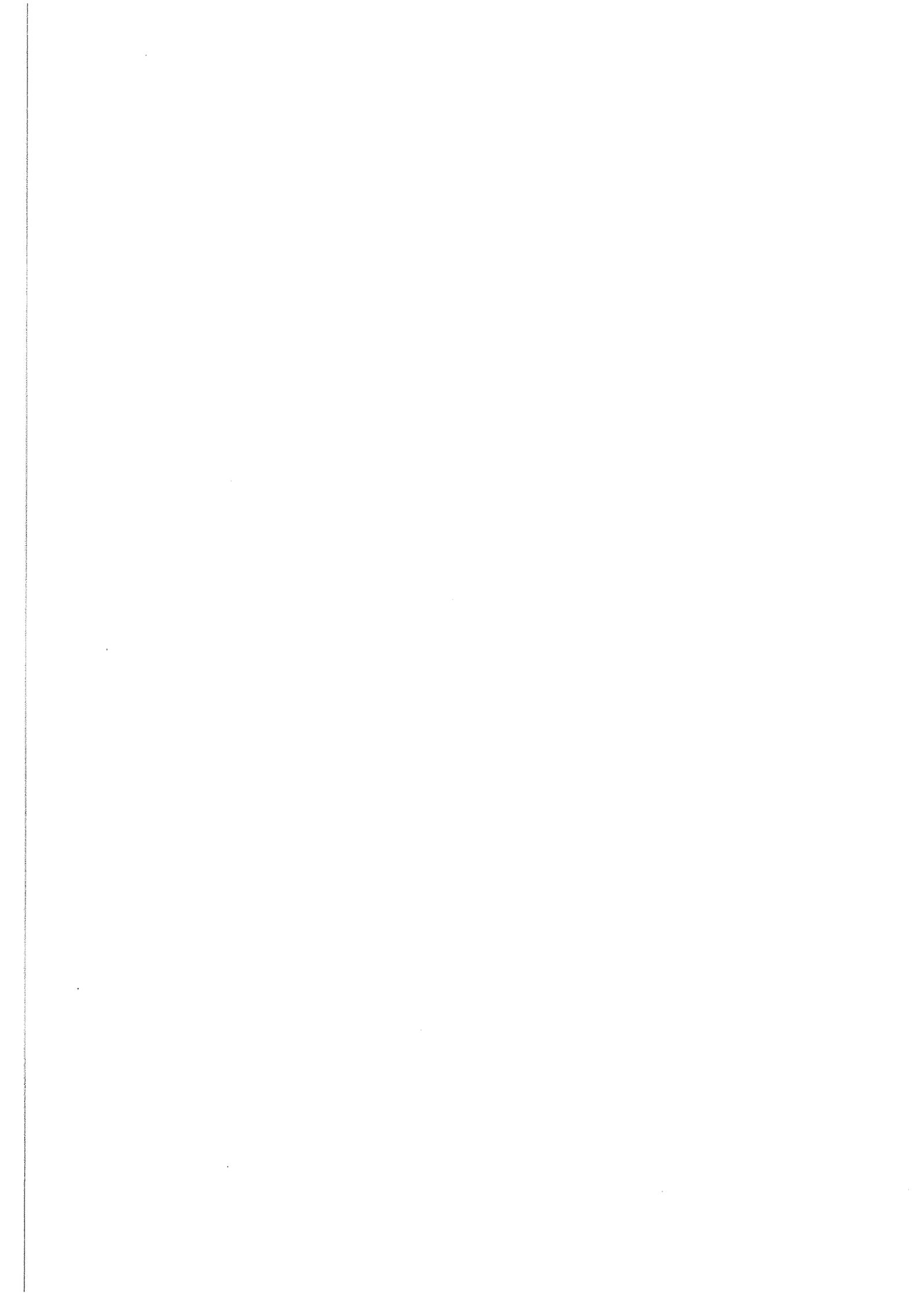
6 各堅穴の窪地内に投棄された廃品別組み合わせも、ある程度把握することができた。これについても、ⅢやⅤに詳述してある。2～3の例をあげると、第1号で出土し、ほぼ完形に復原された甕形土器（資料№9・第6図15）は、窪地の中央部分（12—23）に破片が集中して発見された。この部分には、他に23個体分の土器の破片と礫、スクレイパーが混在している。また、資料№18の一部破片は、窪地の南コーナー寄り（12—12）に長さ約50cm幅約15cmの帯状分布をしていた。これは、他に15個体分の土器の破片と礫や砥石と混在した。資料№74は、窪地の南コーナー付近（12—12）と中央部（12—23）との2個所にわかれてみられ、前者は15個体分の土器片、礫、砥石、後者は23個体分の土器片、礫、スクレイパーと混在した。資料№46は、窪地のほぼ中央部（12—22～23）に比較的まとまってみられ、他に23個体分の土器片や礫、スクレイパーと混在した。

第2号では、資料№3が窪地の北コーナー付近（45—02～03）に40×50cmの範囲で他の5個体分の土器片と混在し、また東南壁際（44—02～03）で他の4個体分の土器片と混在した。

7 堅穴の窪地から出土した土器は、すべて破損し、しかも残存状況が著しくよくない。このことは、まさにこれらの土器が廃品であったことを物語るし、さらに、この窪地が投棄の場であったことを裏付けるものであろう。

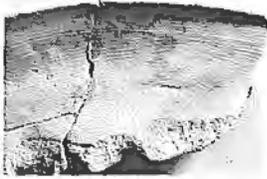
8 出土した土器は、坏・甕・壺形土器の組みあわせを基本とし、坏・甕形土器はさらに複数のタイプに分かれる。しかしタイプの区分と成形・調整の手法の区分がかならずしも一致しない点は北海道的な特徴と言える。また丸底ヘラミガキの坏、底径の大きな須恵器等、東北地方で9世紀初頭前後に位置づけられるものもふくまれる。反面、大甕の口縁部に、すべて再調整にともなうひき出しが見られる点、土鍋と思われるものを伴う点など、更に新しい要素もみとめられる。とくに土鍋は北海道では初めて注意されたものであり、従来の資料のなかでは見落された可能性がある。北海道における土師器としては、最も古い様相のひとつと考えられるが、東北地方の編年との対比はなお検討を要する。

（横山英介）



実測図・図 版

文 様 凡 例



1.ハケ目：甕形土器の口縁部に施される。浅いハケ目なので、ヨコナデ風に調整されているようだ。（資料№1-3）



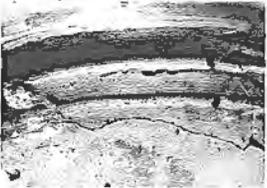
2.ハケ目：甕形土器の内面に施される。間隔が比較的粗く、太いハケ目である。器面に接した工具の幅や方向がよくわかる（資料№2-3：第7図24）。



3.粘土材の接合部とケズリ：甕形土器の口縁部内側の様子。粘土材の接合とケズリの痕跡がよくわかる例（資料№1-2：第7図20）。



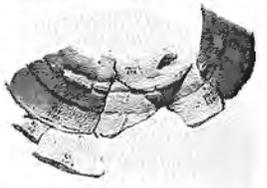
4.ミガキ：甕形土器胴外面のミガキ、棒状工具の一端で縦位に器面をみがいている。その結果、器面の光沢が著しい（資料№3-2：第8図29）。



5.沈線：甕形土器の口縁部に施された2本の沈線。器面が調整された後にヘラ状工具でつけられていることがわかる（資料№1-21：第9図31）。



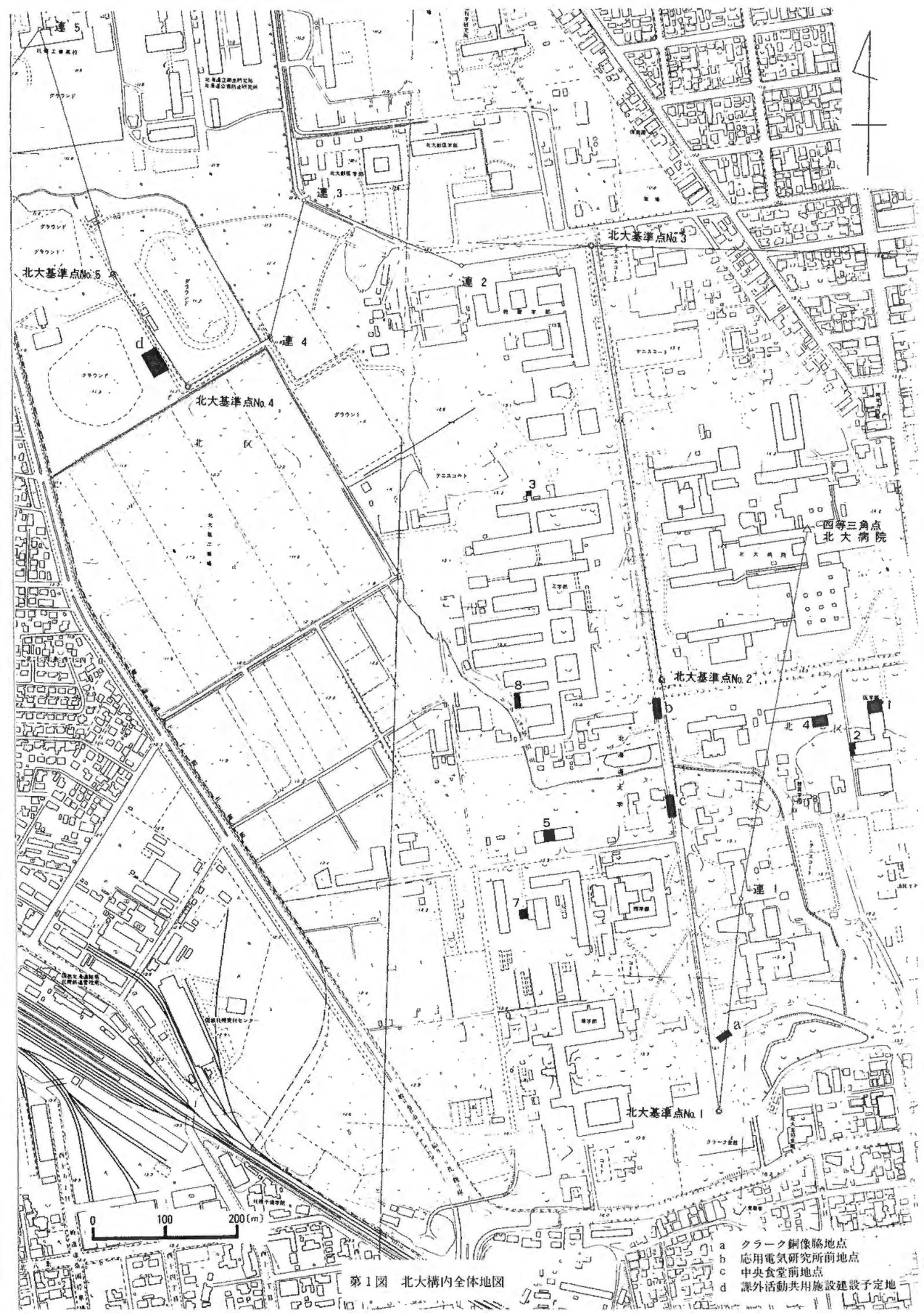
6.沈線：环形土器の体部外面に施された沈線。器面調整後ヘラ状工具により細い沈線が描かれている（資料№1-26：第5図7）。



7.粘土材の接合、甕形土器の肩部内側の様子。幅約1cmの細い粘土の紐をつぎたしながら重ねていく様子がわかる。ハケ目調整が施されているがつなぎ目を消すことができなかったようだ（資料№1-10：第10図40a）。

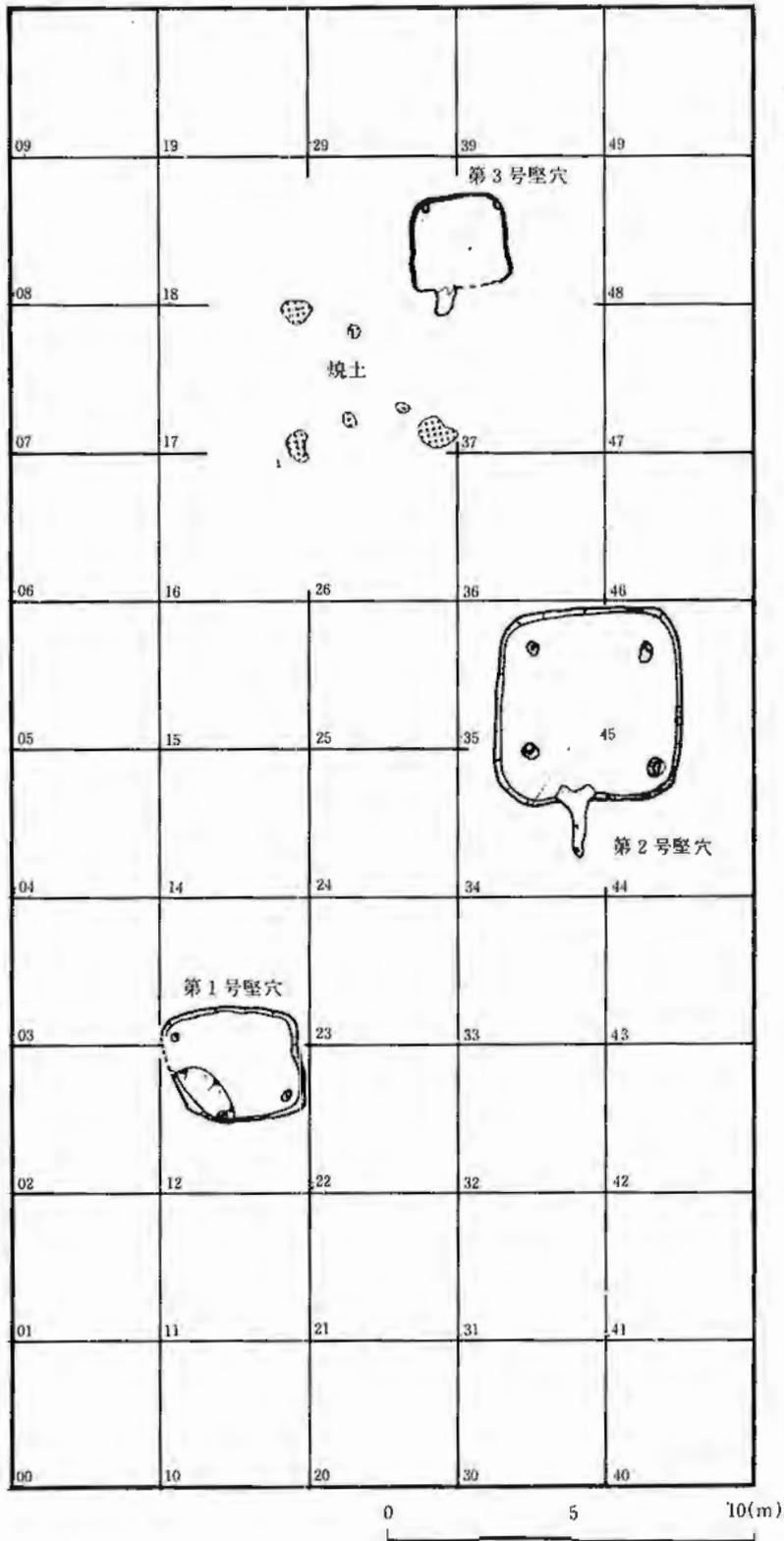


8.ササの葉圧痕：甕形土器の底外面にみられるクマイザサの圧痕、ほぼ中央部には太い中央脈の、その両側には細い葉脈の圧痕がみえる。葉の裏面を器面側にあてていたことになる。同様の圧痕はこの遺跡で8例みられる（資料№2-3：第9図31）。

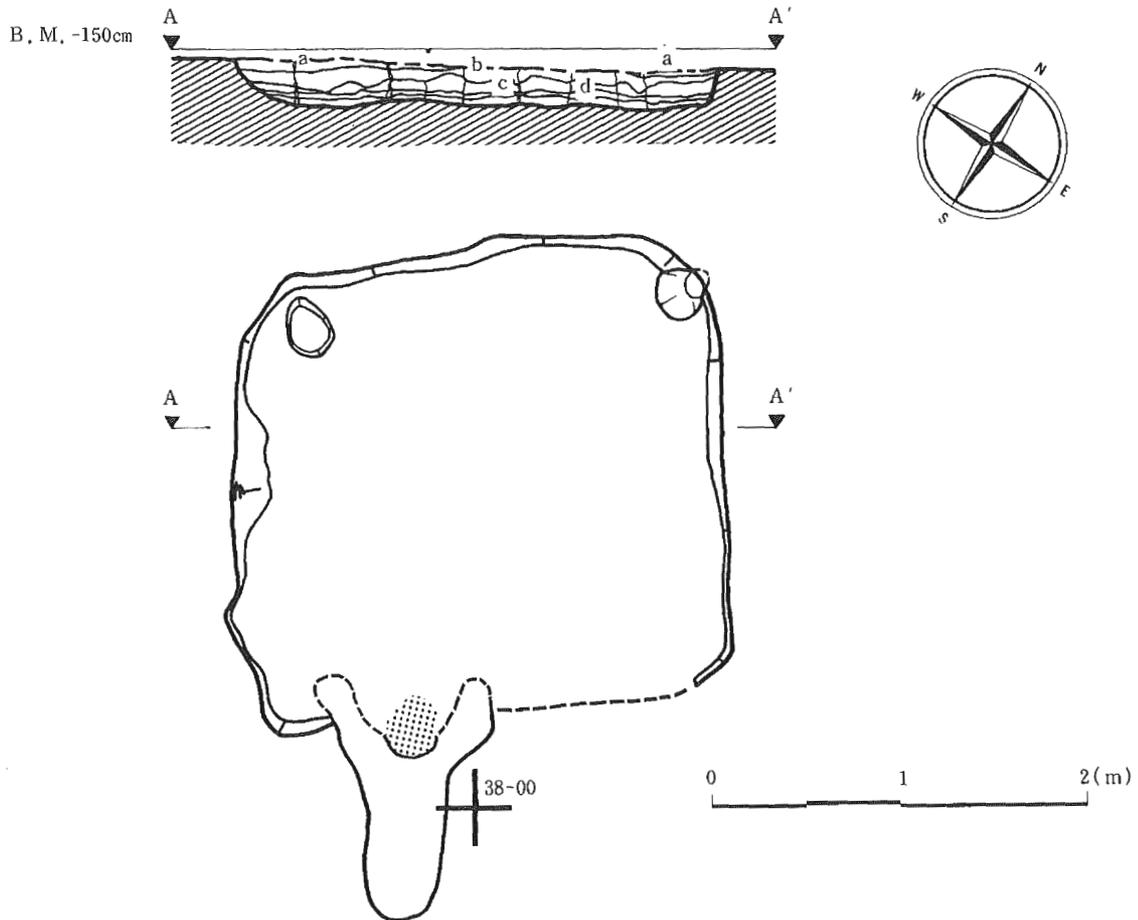
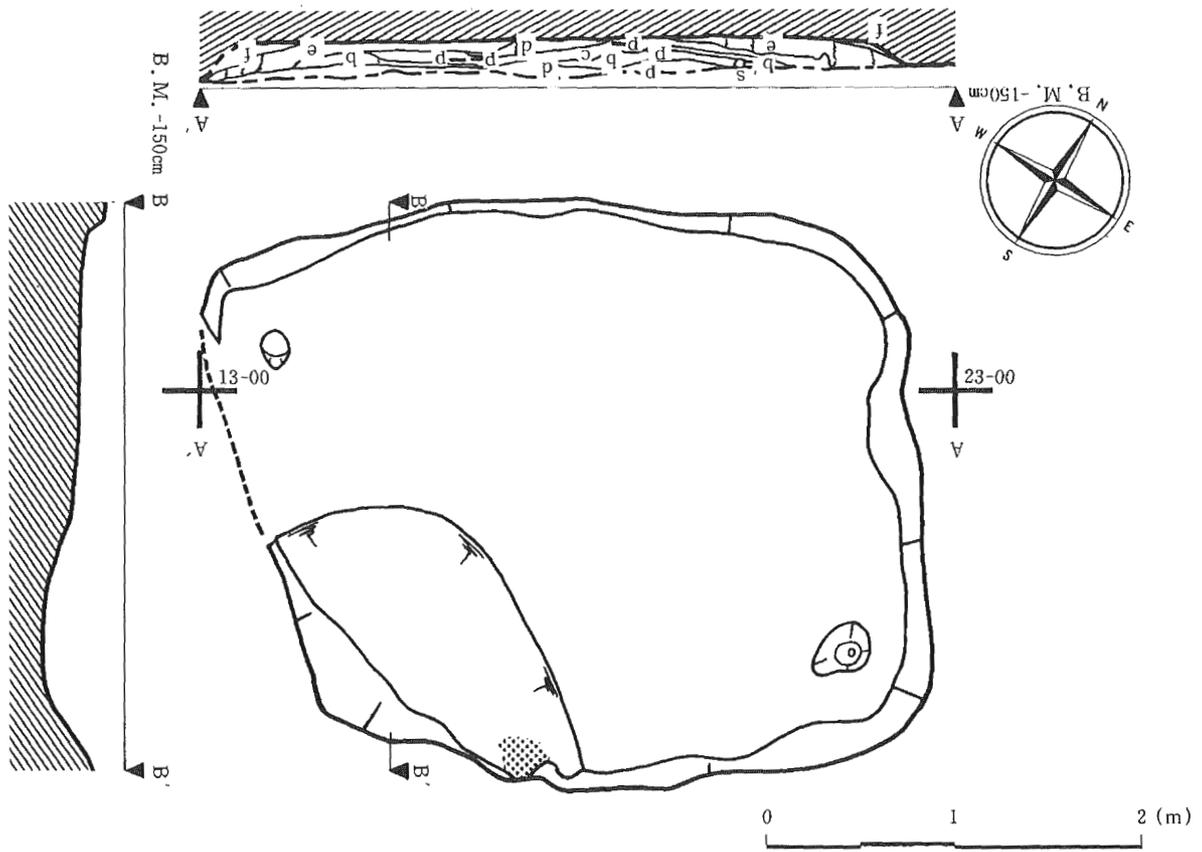


第1図 北大構内全体地図

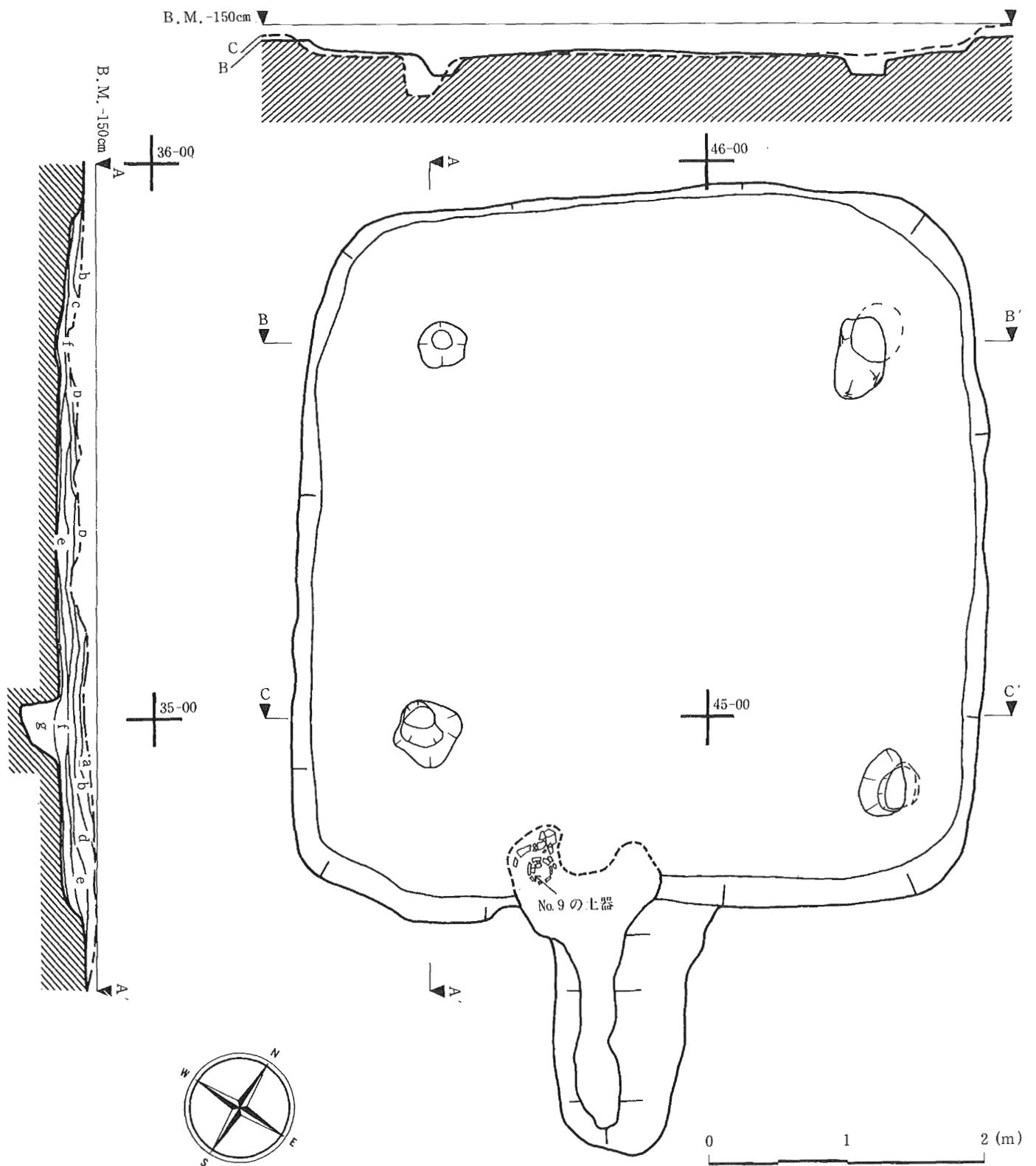
- a クラーク銅像跡地点
- b 応用電気研究所前地点
- c 中央食堂前地点
- d 課外活動共用施設建設予定地



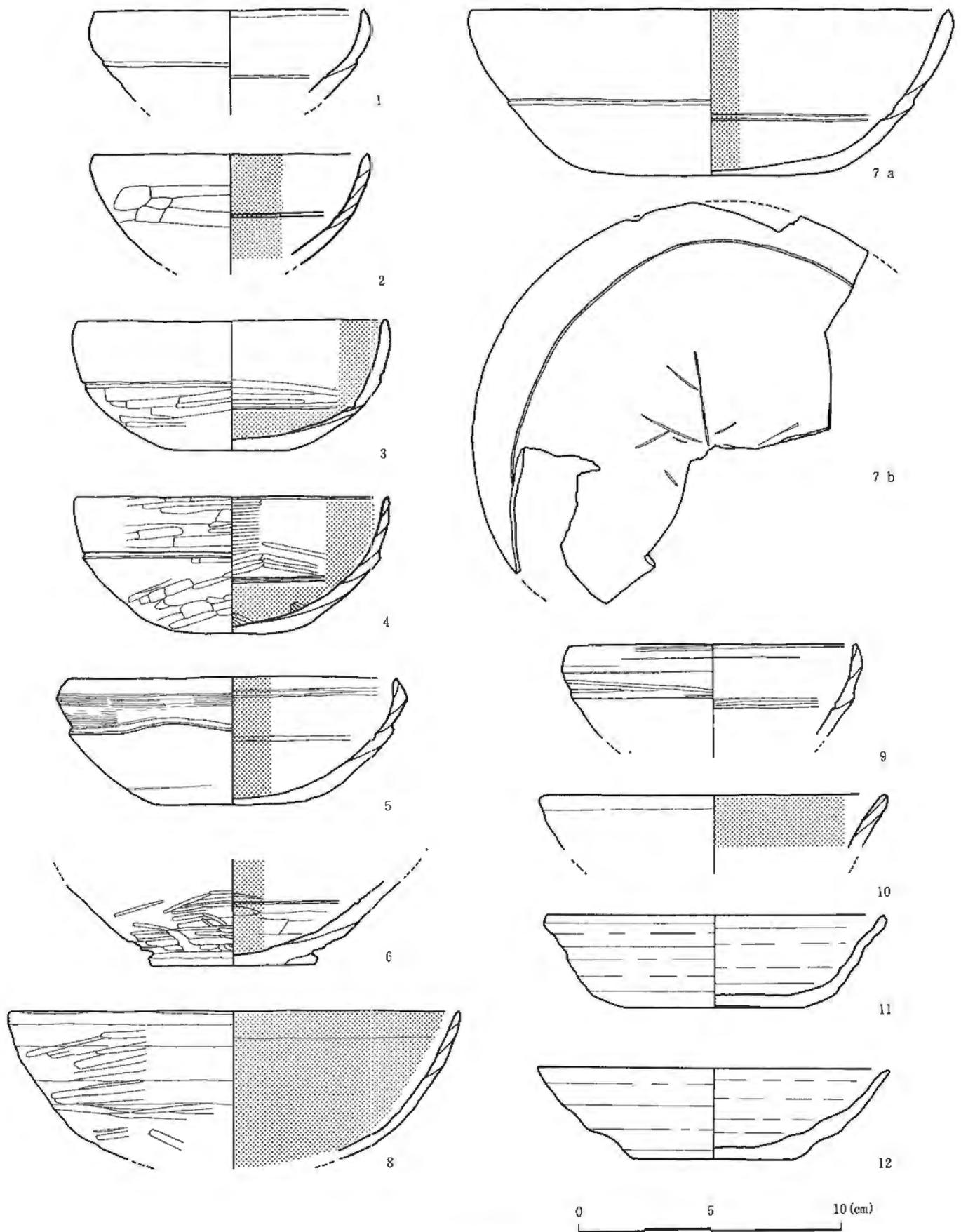
第2図 発掘区の名称と遺構の配置



第3図 第1号竖穴(上)および第3号竖穴(下)の平面、断面そして土層断面図

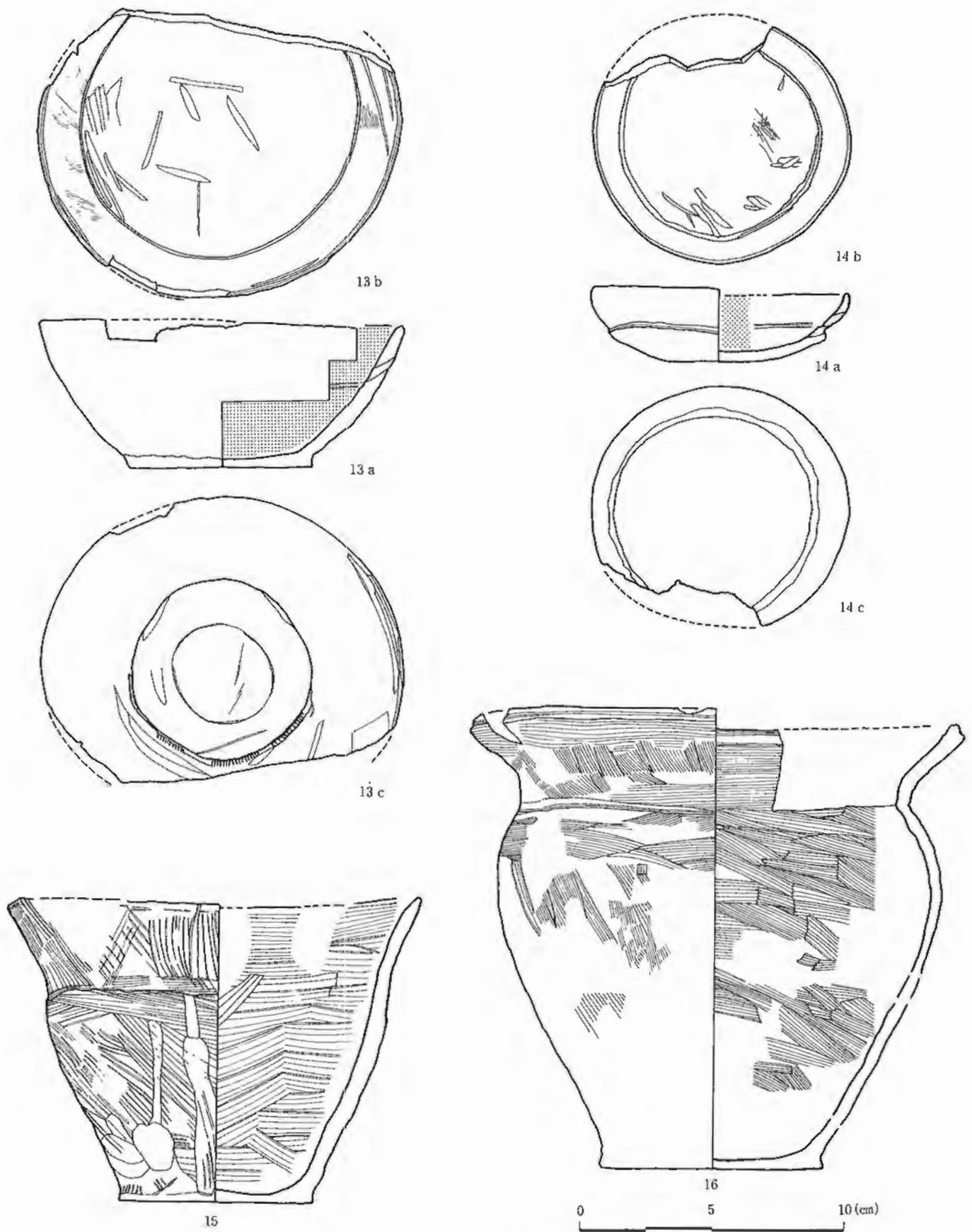


第4図 第2号竖穴の平面、断面そして土層断面図



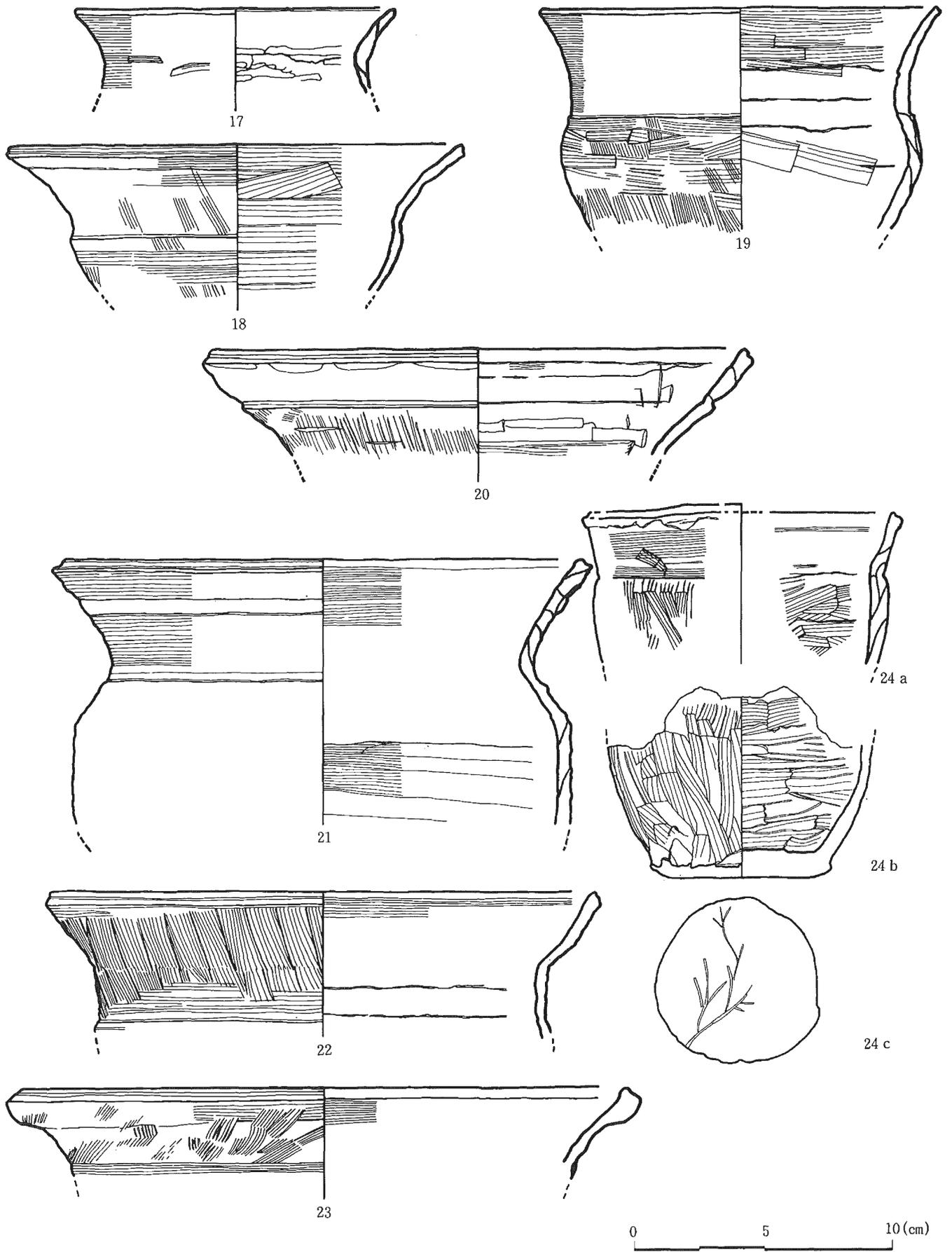
第1号竪穴埋土	1, 3, 4, 6, 7
第2号竪穴埋土	9~11
第1号竪穴埋土と第2号竪穴埋土	2, 5, 8, 12

第5図 环形土器 (11,12は須恵器)

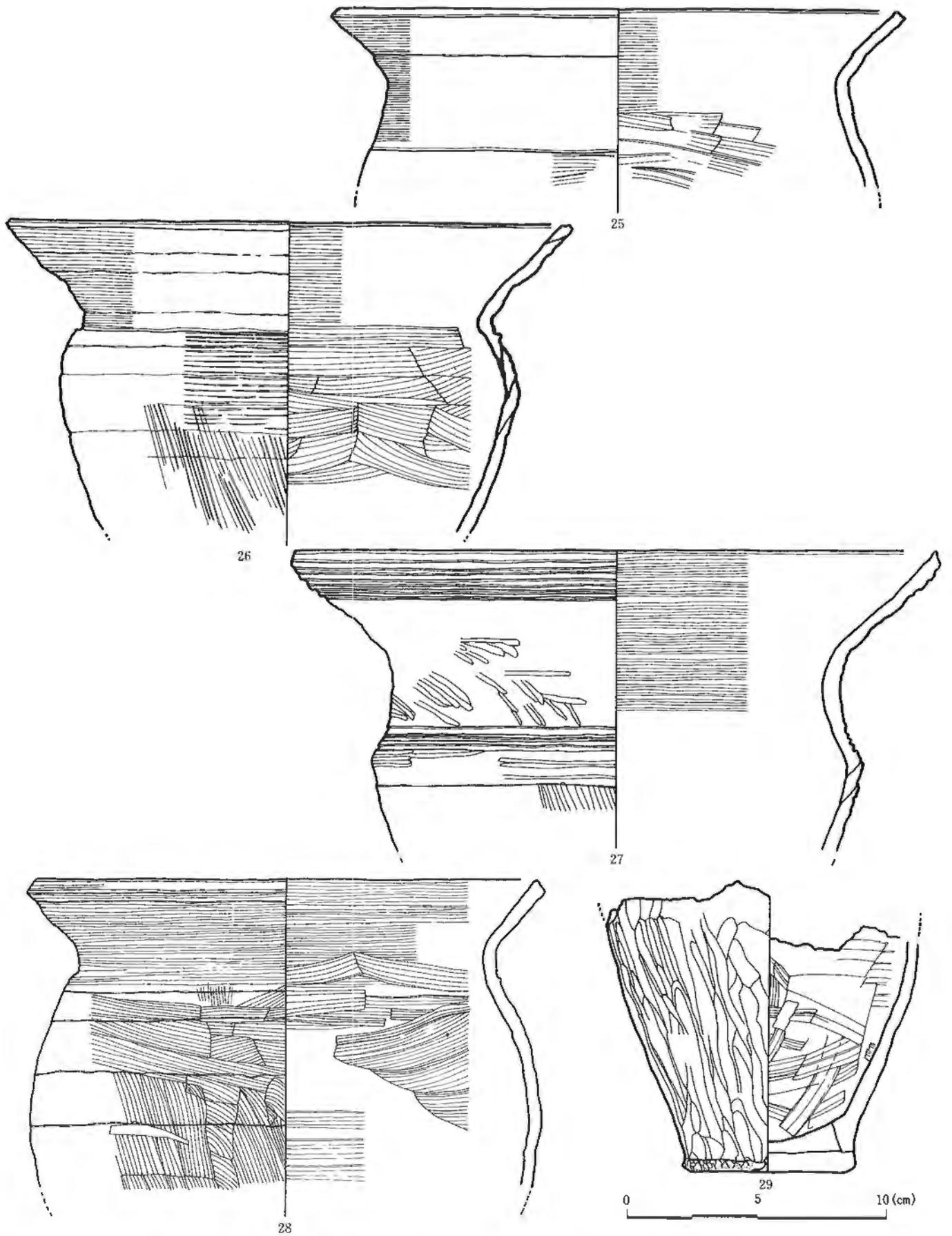


第6図 環形土器 (13,14) と甃形土器 (15,16)

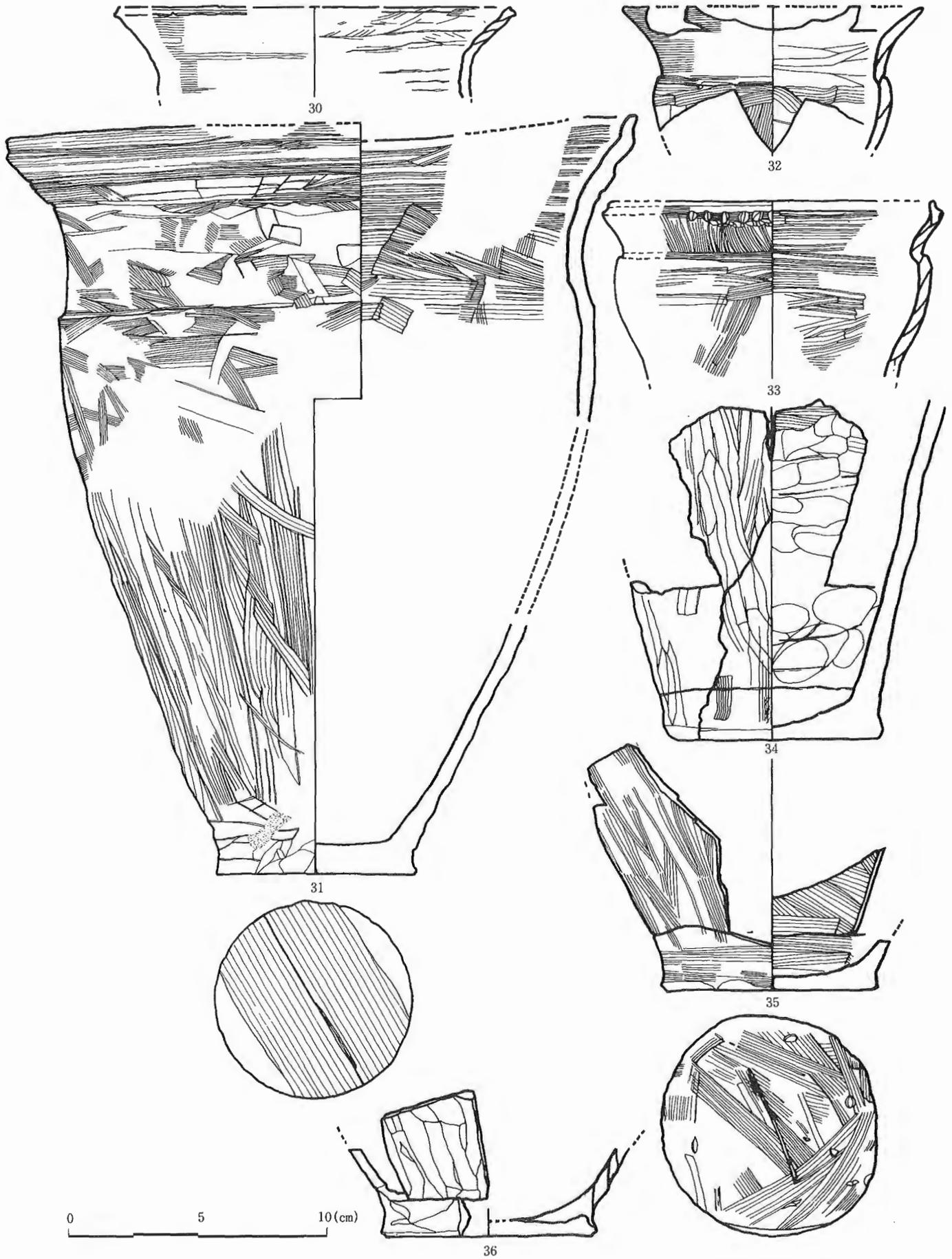
第1号竪穴埋土	13、15
第2号竪穴埋土	14
第2号竪穴カマドのソデ	16



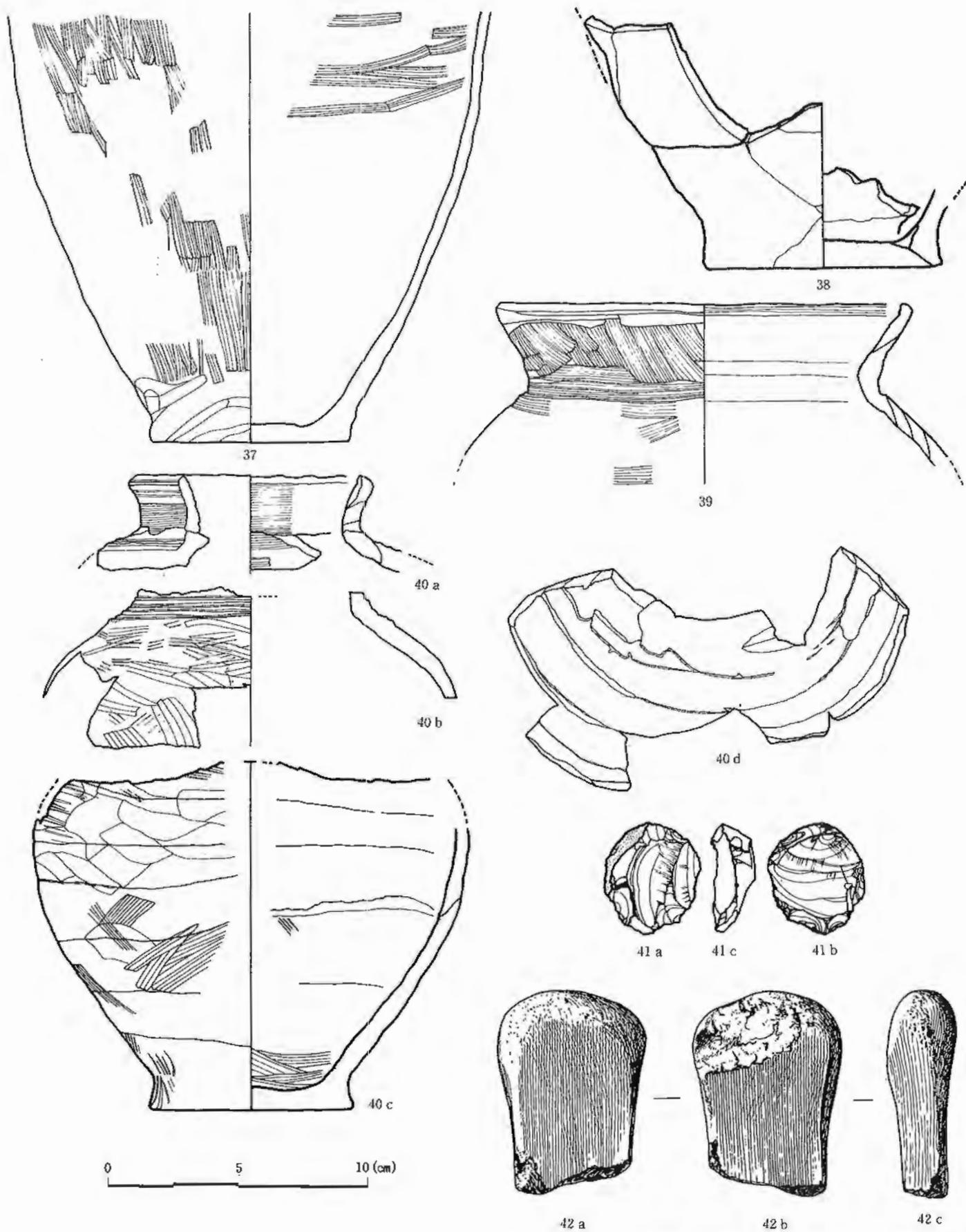
第7图 甗形土器，第1号竖穴埋土：17~23 第2号竖穴埋土：24



第8圖 甗形上器 第1号竖穴埋土：25、26、27 第2号竖穴埋土：28 第3号竖穴埋土：29

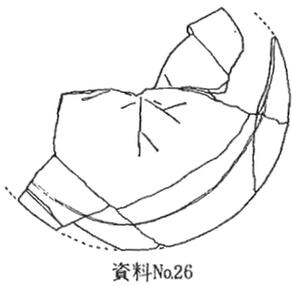
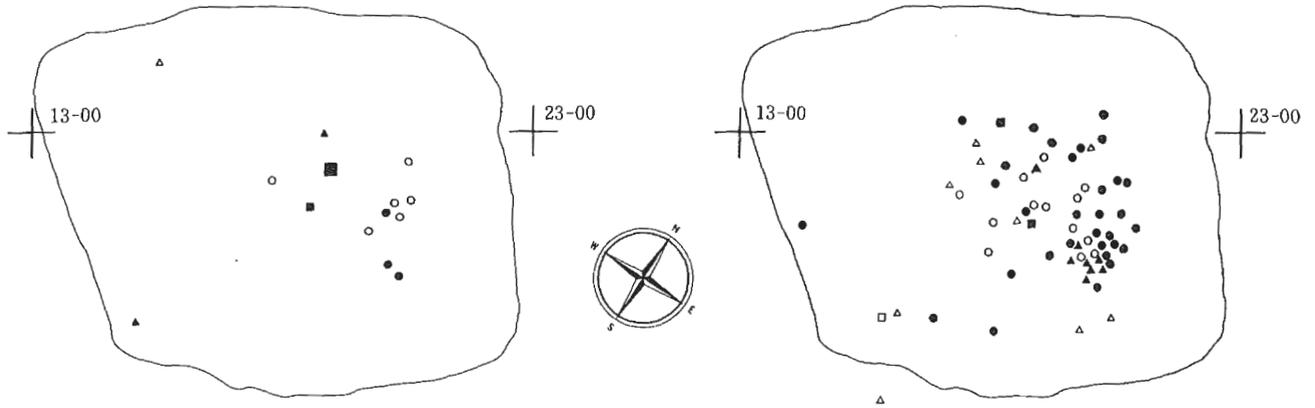
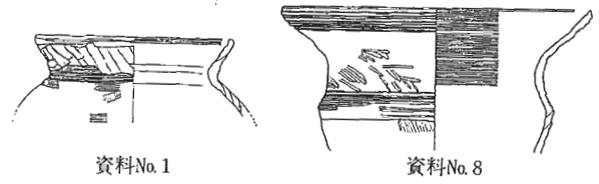


第9図 第1号・第2号竖穴の埋土から出土した甕形土器



第10図 甕形土器 (37)・壺形土器 (38~40)・スクレイパー (41)・砥石 (42)

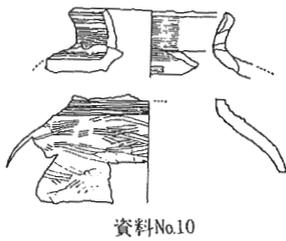
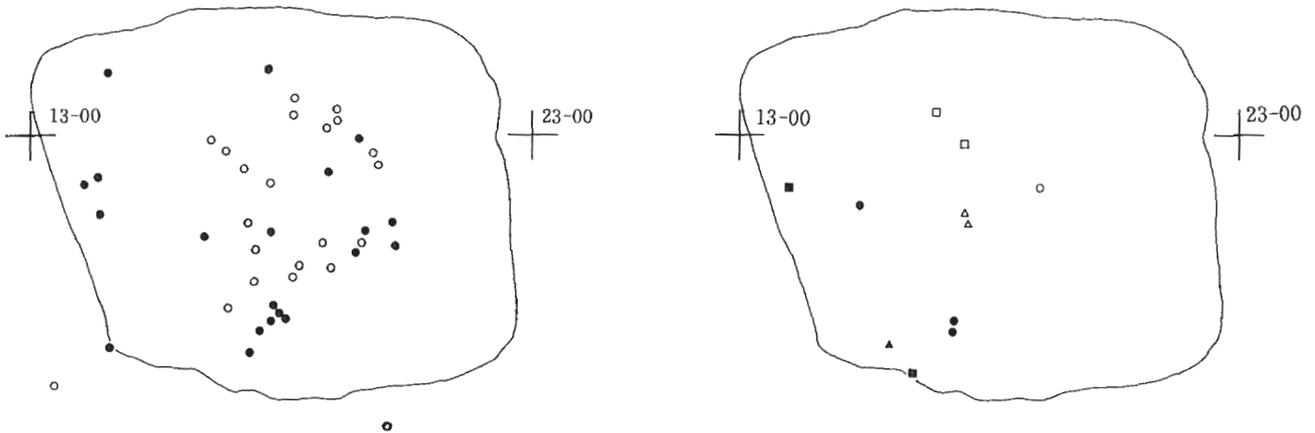
第1号壺穴埋土	39~42
第1号壺穴埋土と第2号壺穴埋土	37 38



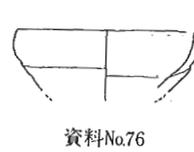
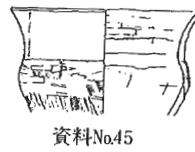
▲	資料No. 12
△	資料No. 22
●	資料No. 23
○	資料No. 26
■	資料No. 42



○	資料No. 1
■	資料No. 2
●	資料No. 3
□	資料No. 7
△	資料No. 8
▲	資料No. 9



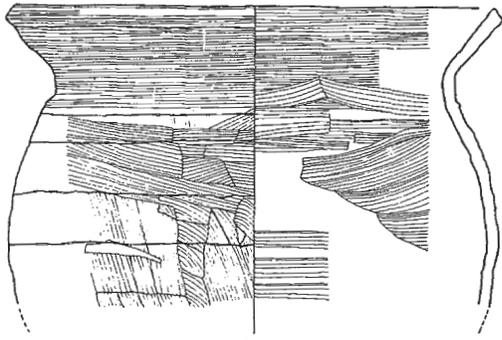
○	資料No. 10
●	資料No. 18



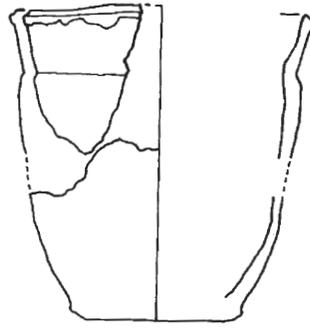
○	資料No. 45
●	資料No. 48
△	資料No. 55
▲	資料No. 82
□	資料No. 77
■	資料No. 76

0 1 2 m

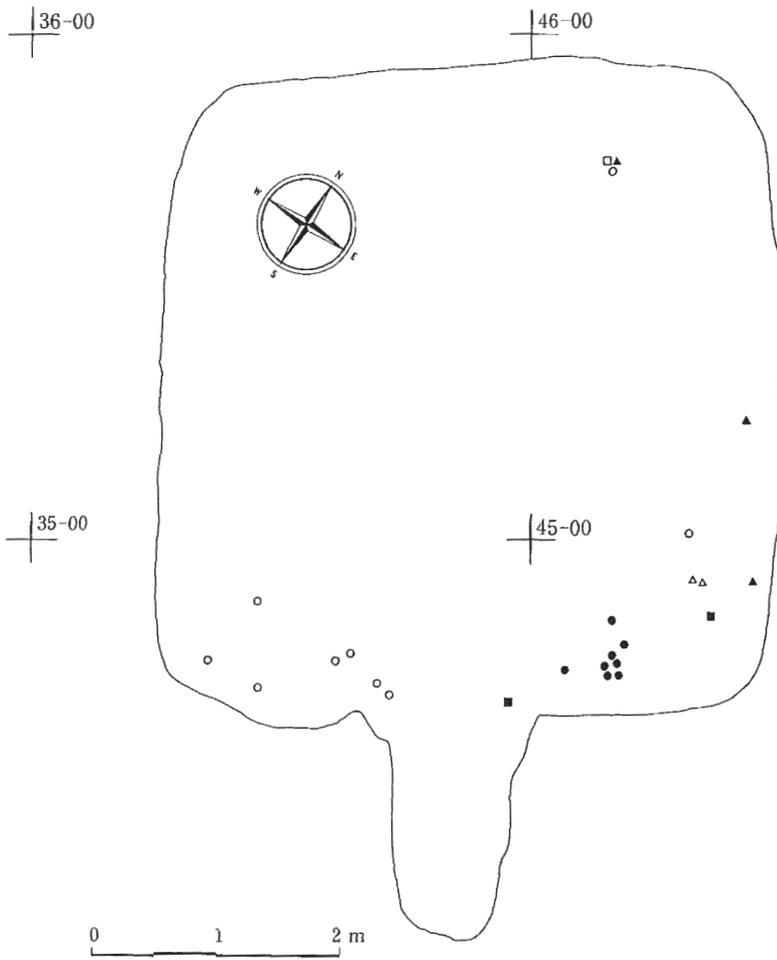
第11図 第1号竖穴埋土における土器片の分布



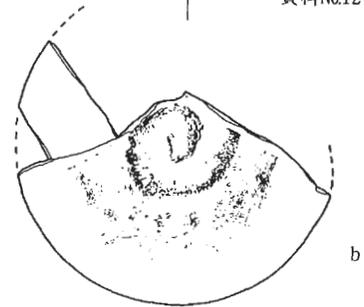
資料No. 4



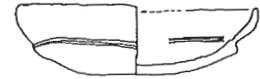
資料No. 6



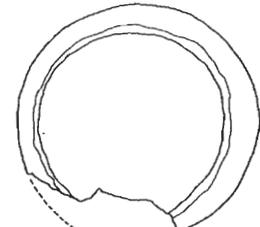
資料No.12 a



b



a

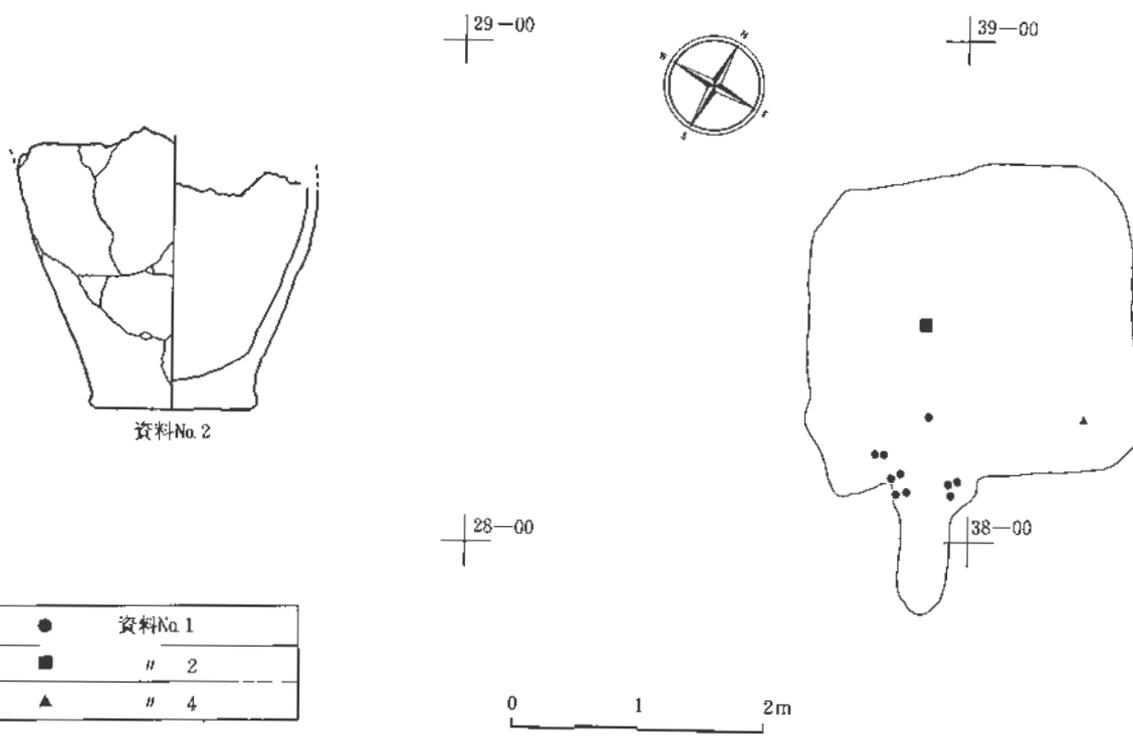


b

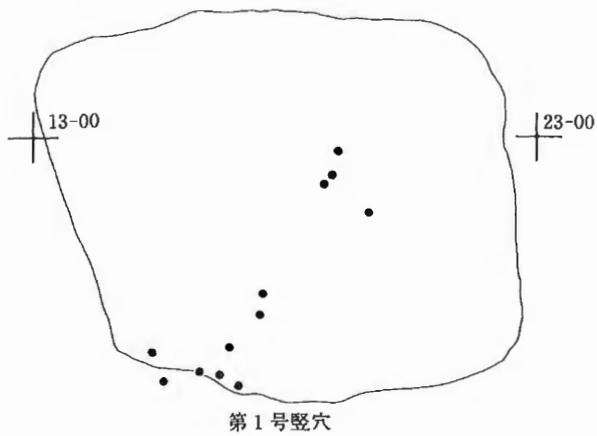
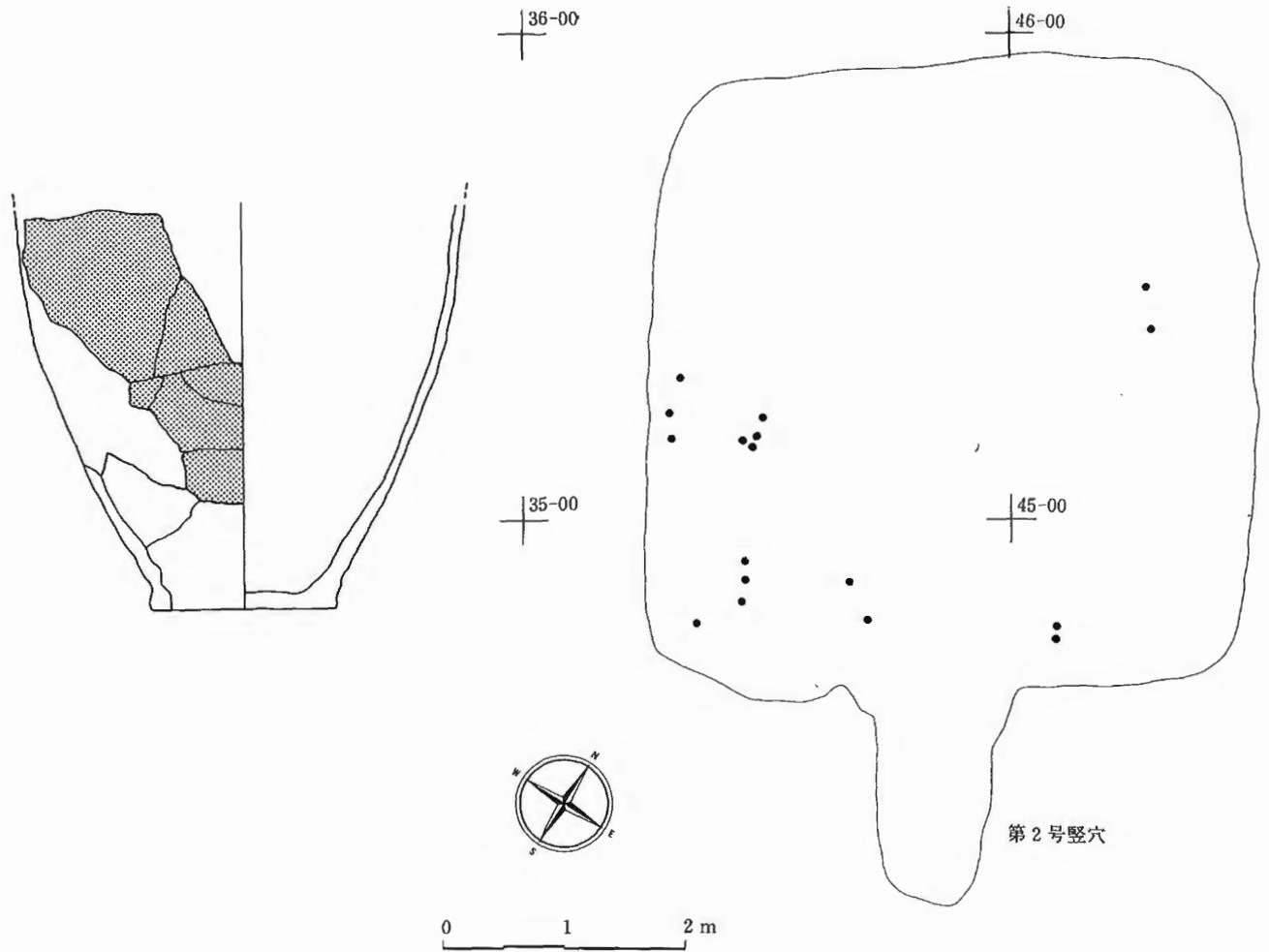
資料No.11

○	資料No. 4
■	資料No. 6
□	資料No.11
▲	資料No.12
△	資料No.32
●	資料No.31

第12図 第2号竖穴埋土における土器片の分布



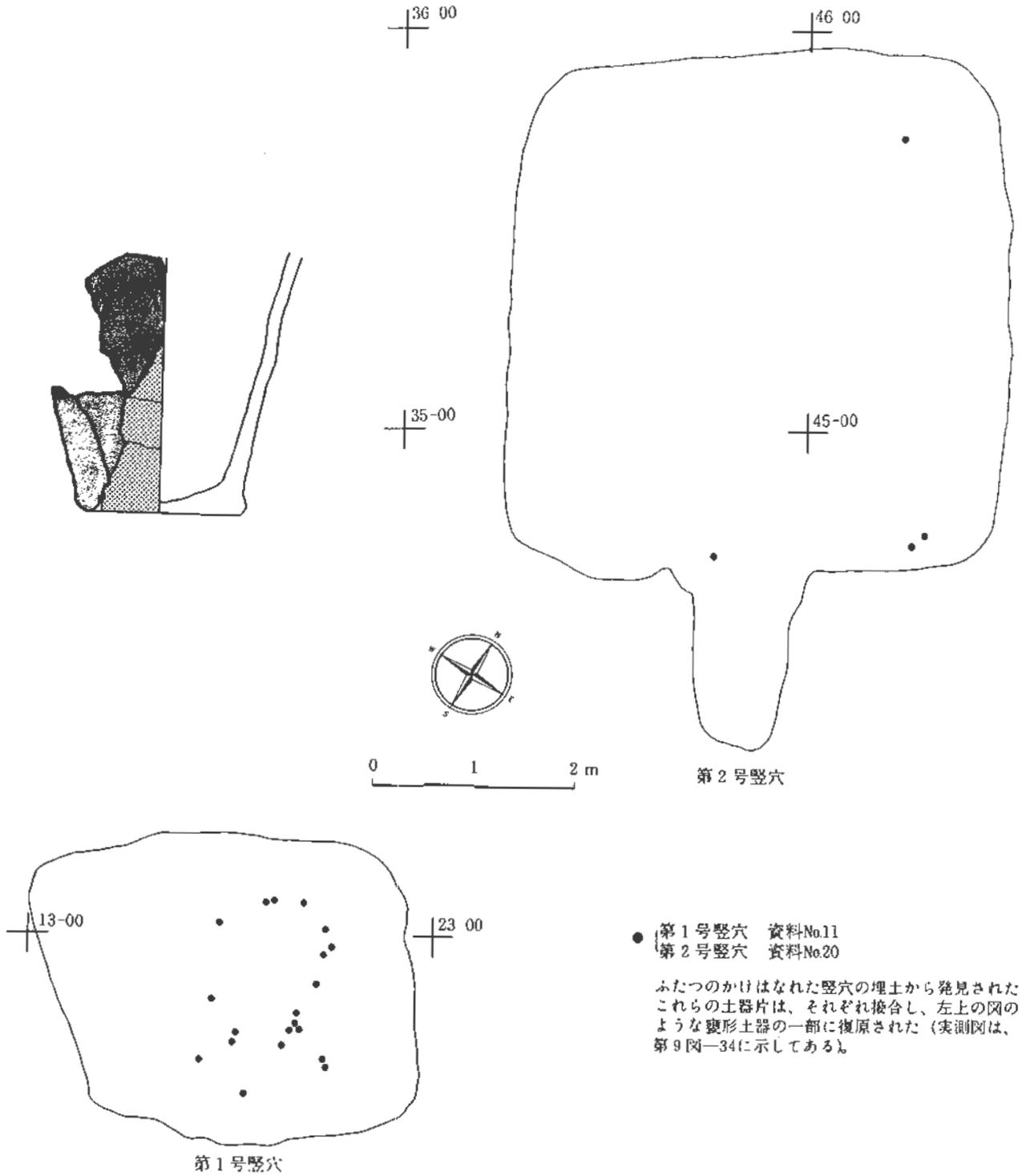
第13図 第3号竖穴埋土における土器片の分布



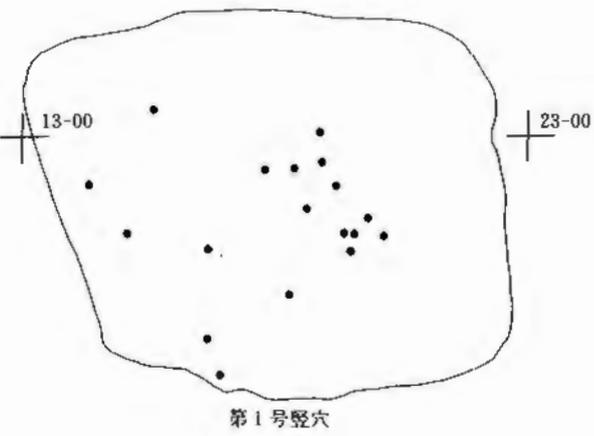
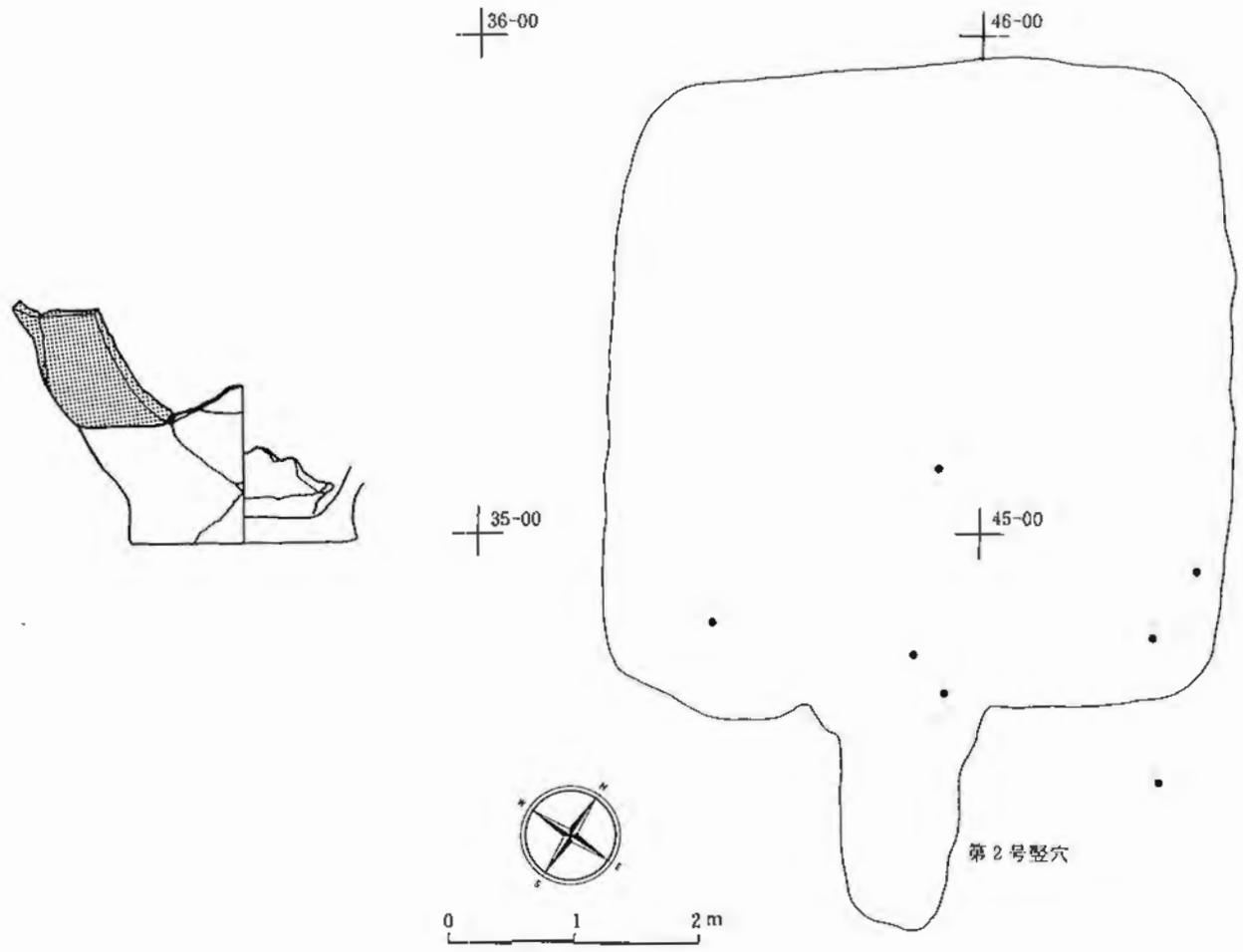
- 第1号竖穴 資料No.4
- 第2号竖穴 資料No.7

ふたつのかけはなれた竖穴の埋土から発見されたこれらの土器片はそれぞれ接合し、左上の図のような甗形土器の一部に復原された(実測図は、第10図-37に示してある)。

第14図 第1号竖穴埋土と第2号竖穴埋土とにおよぶ土器片の分布-1

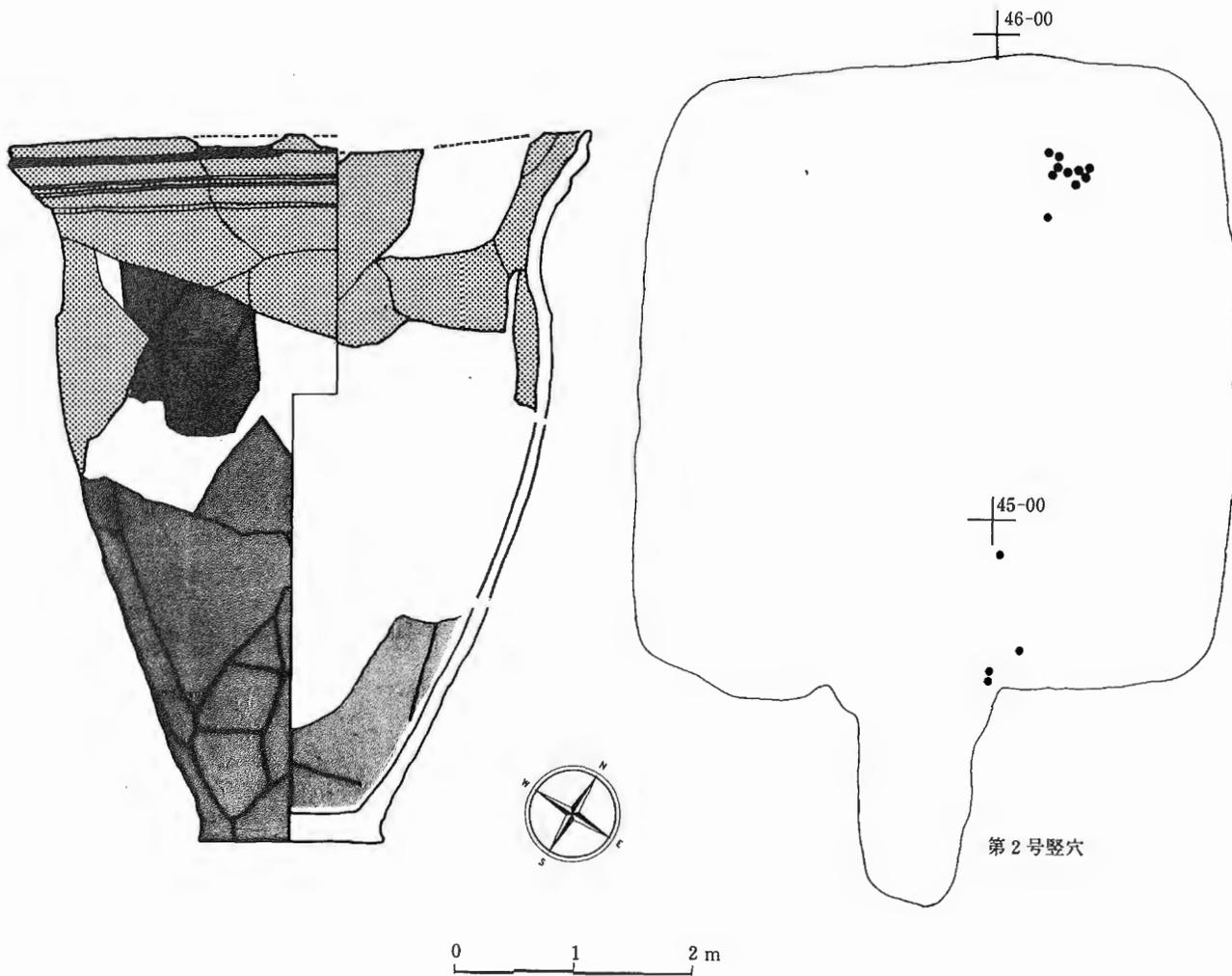


第15図 第1号竖穴埋土と第2号竖穴埋土とにおよぶ土器片の分布—2

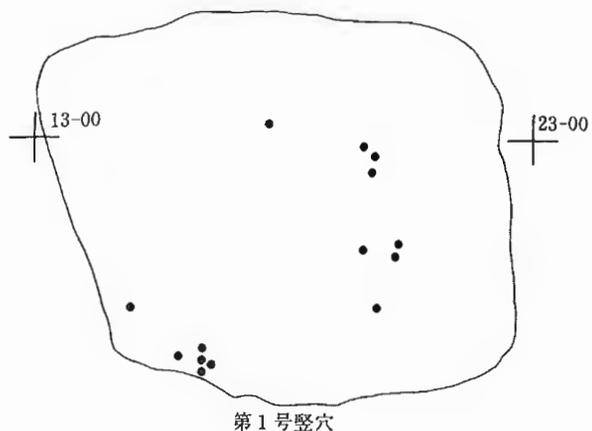


● 第1号竪穴 資料No.15
 ● 第2号竪穴 資料No.5
 ふたつのかけはなれた竪穴の埋土から発見されたこれらの土器片はそれぞれ接合し、左上の図のような形に復原された（実測図は、第10図-38に示してある）

第16図 第1号竪穴埋土と第2号竪穴埋土とにおよぶ土器片の分布-3



第2号竖穴

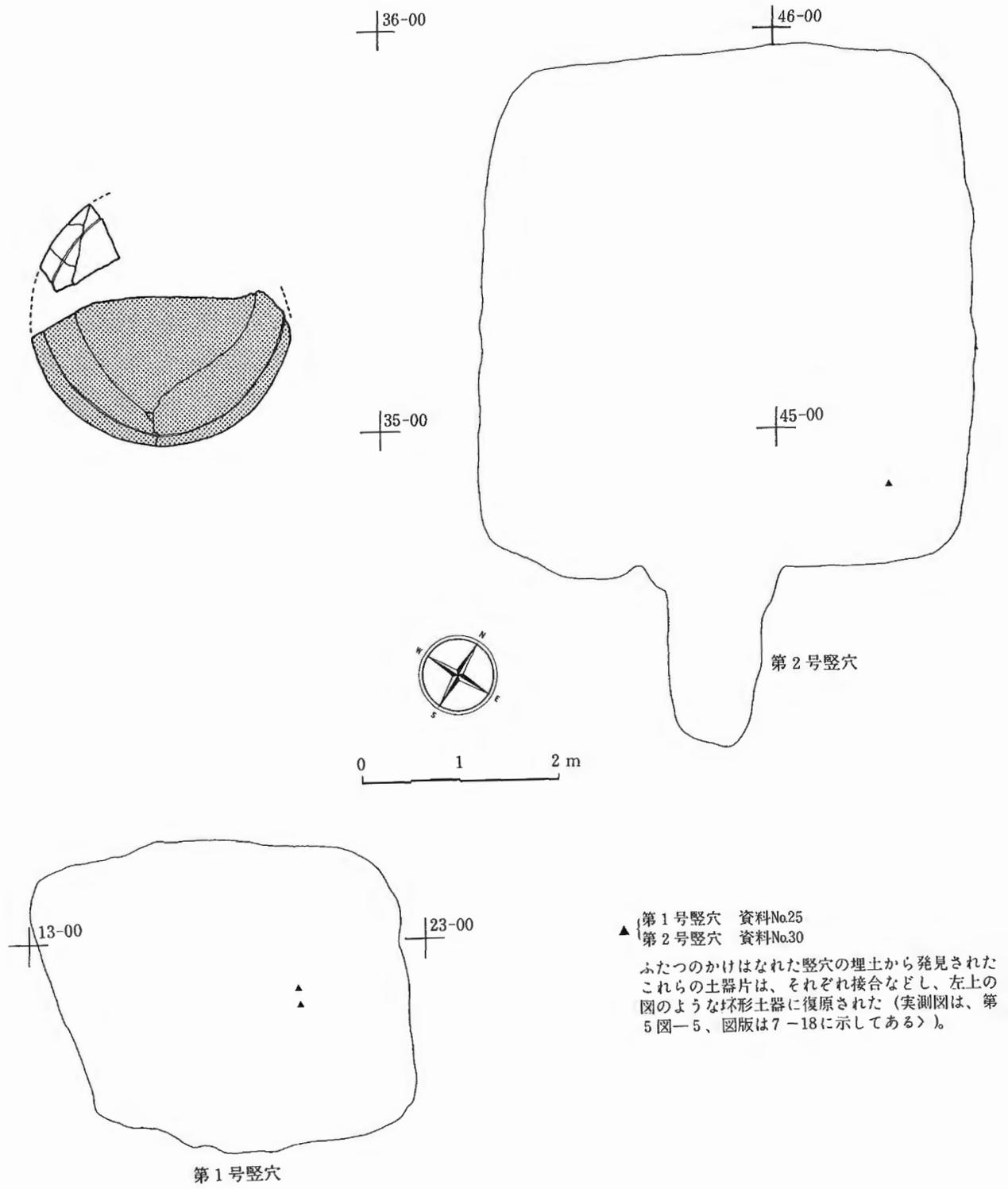


第1号竖穴

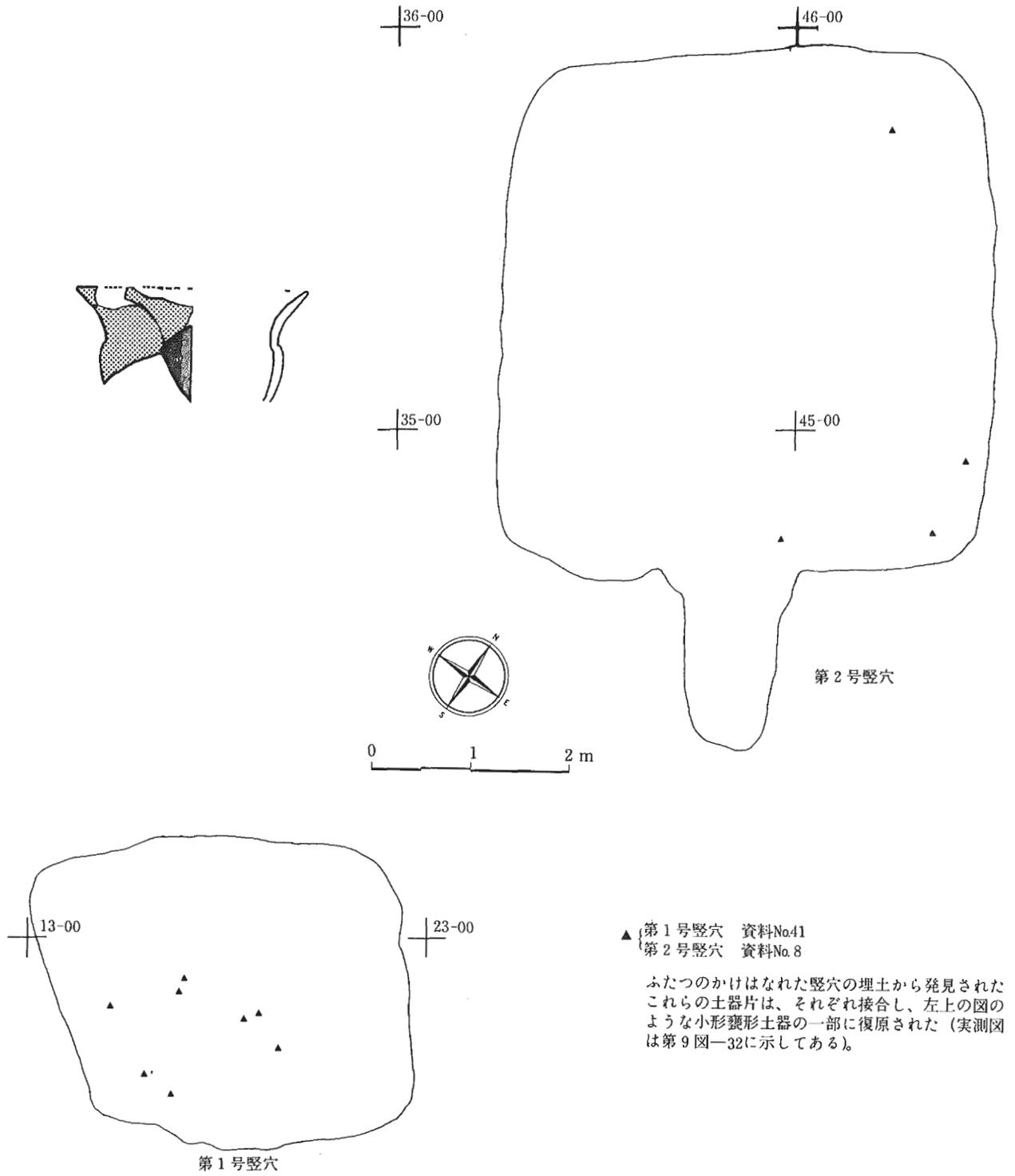
- 第1号竖穴 資料No.21
- 第2号竖穴 資料No.3

ふたつのかけはなれた竖穴の埋土から発見されたこれらの土器片は、それぞれ接合し、左上の図のような大形甕形土器に復原された（実測図は、第9図-31、図版は12-32、33と示してある）。

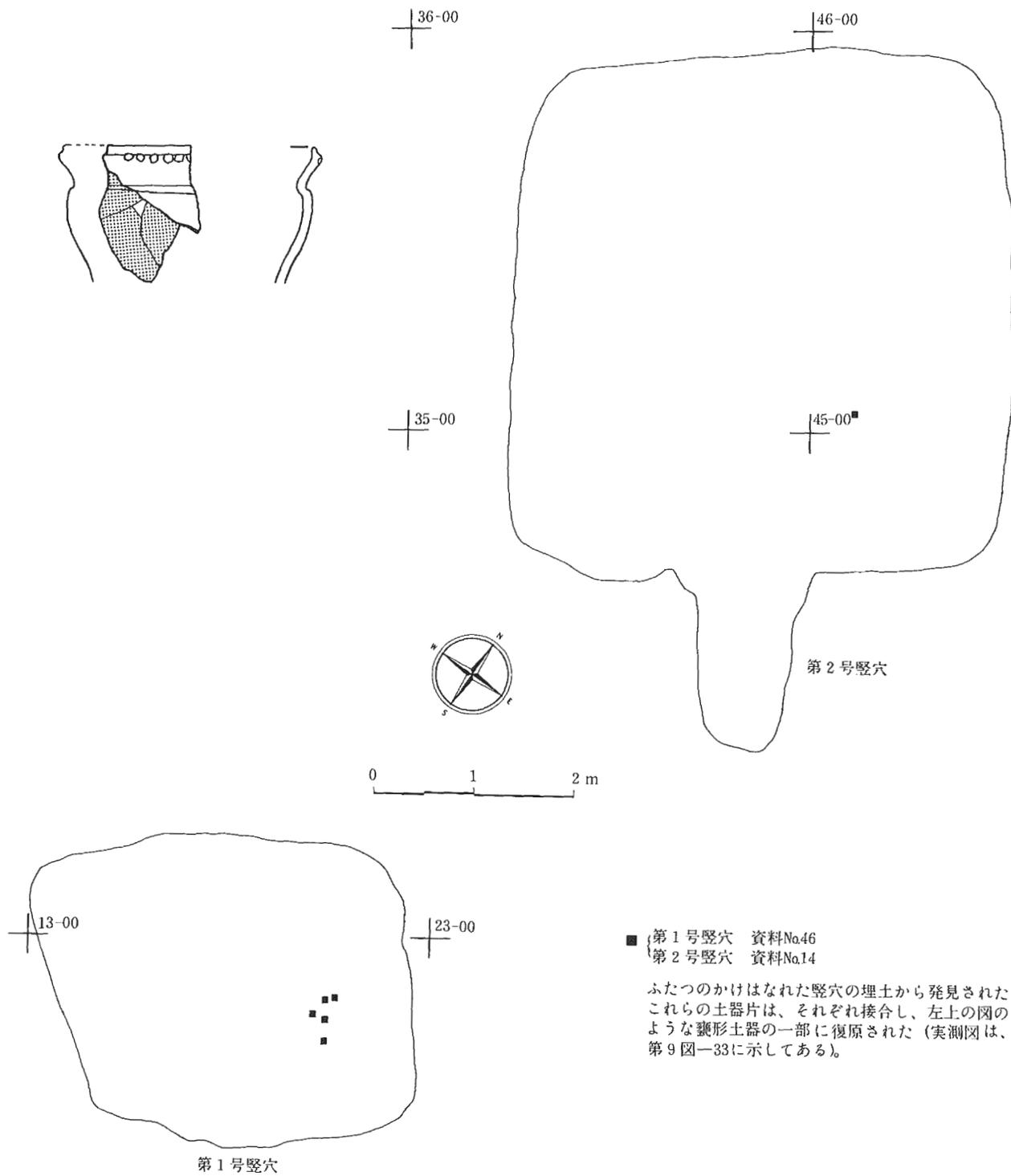
第17図 第1号竖穴埋土 と第2号竖穴埋土とにおよぶ土器片の分布—4



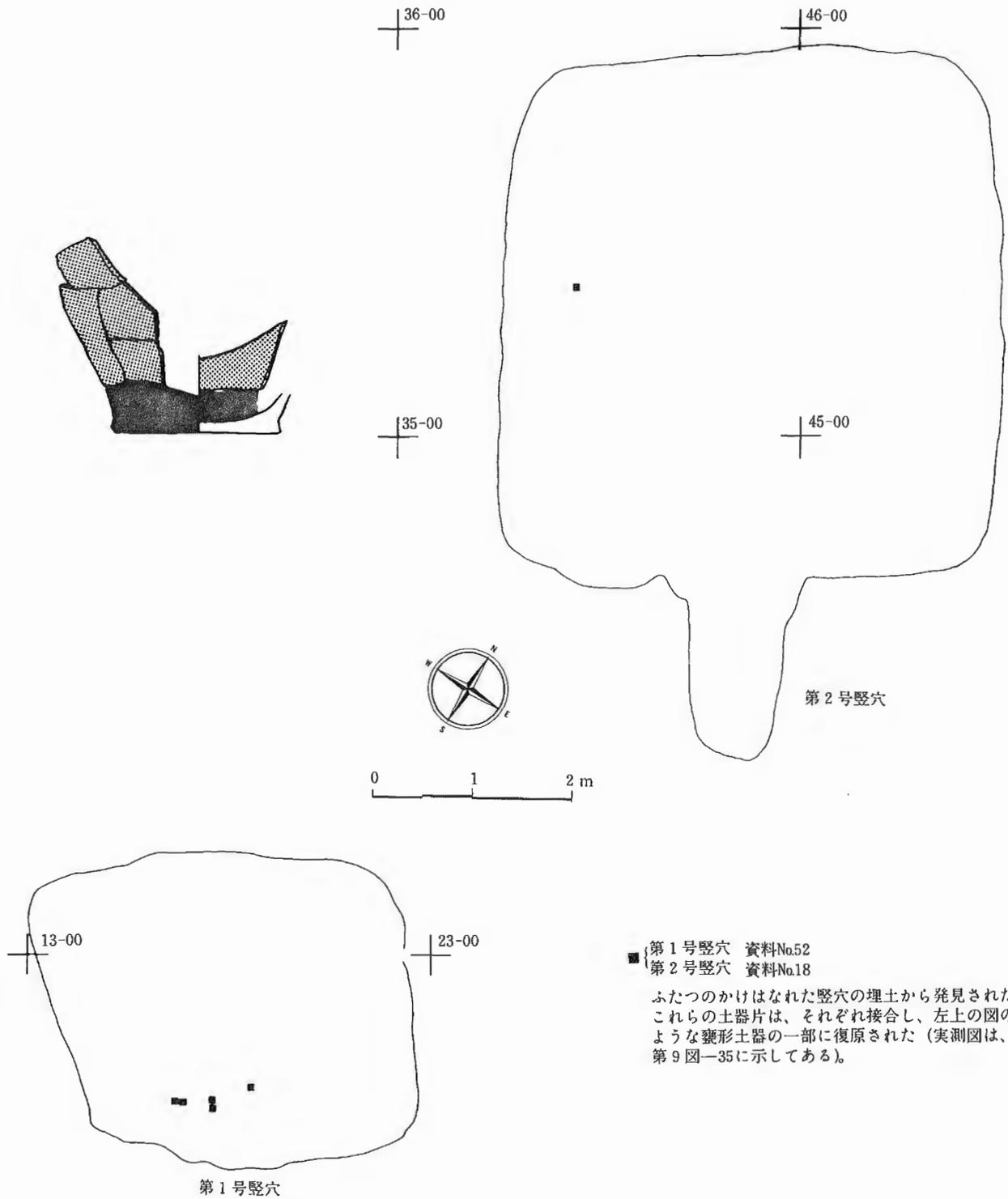
第18図 第1号竖穴埋土と第2号竖穴埋土とにおよぶ土器片の分布-5



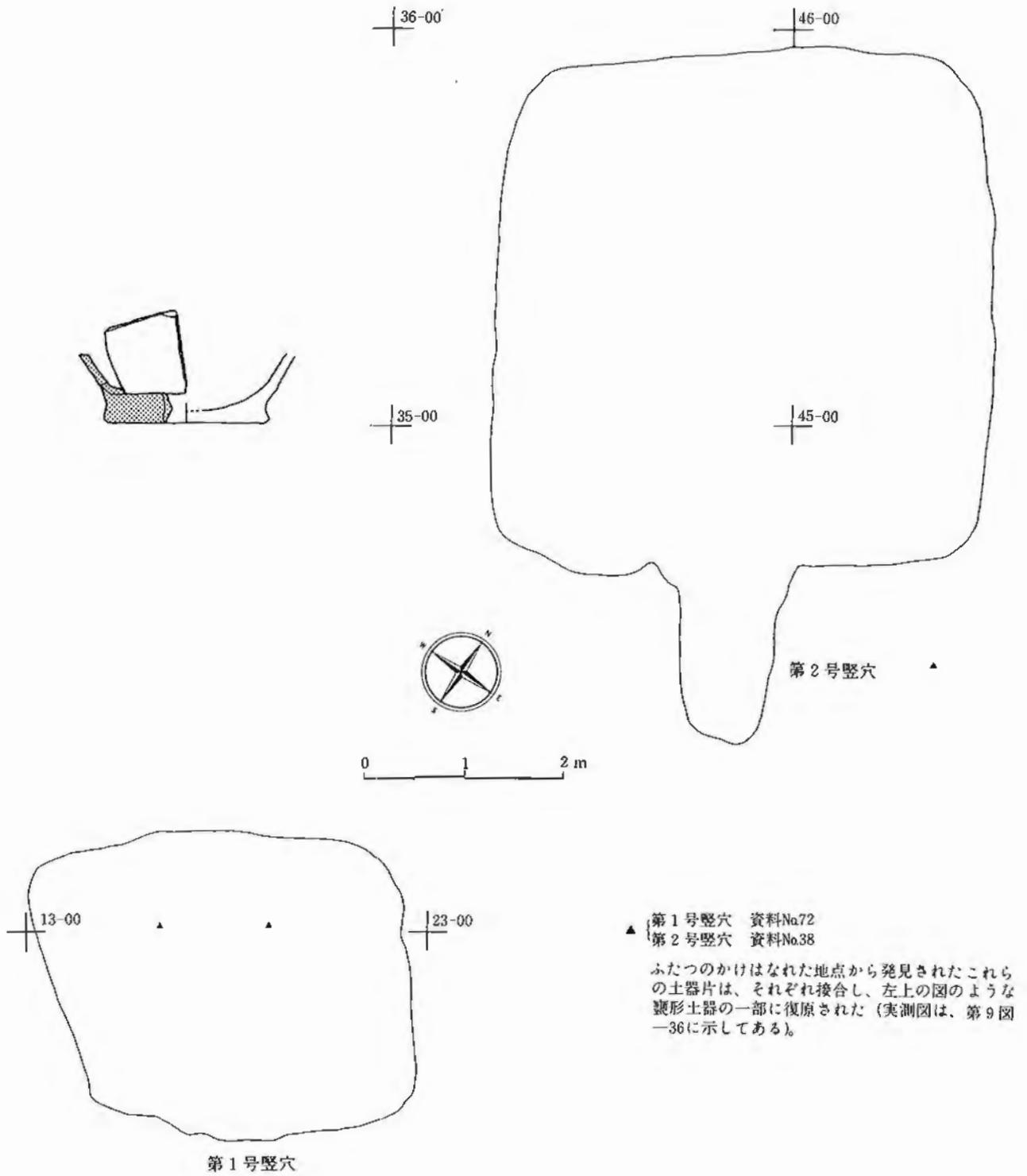
第19図 第1号竖穴埋土と第2号竖穴埋土とにおよぶ土器片の分布-6



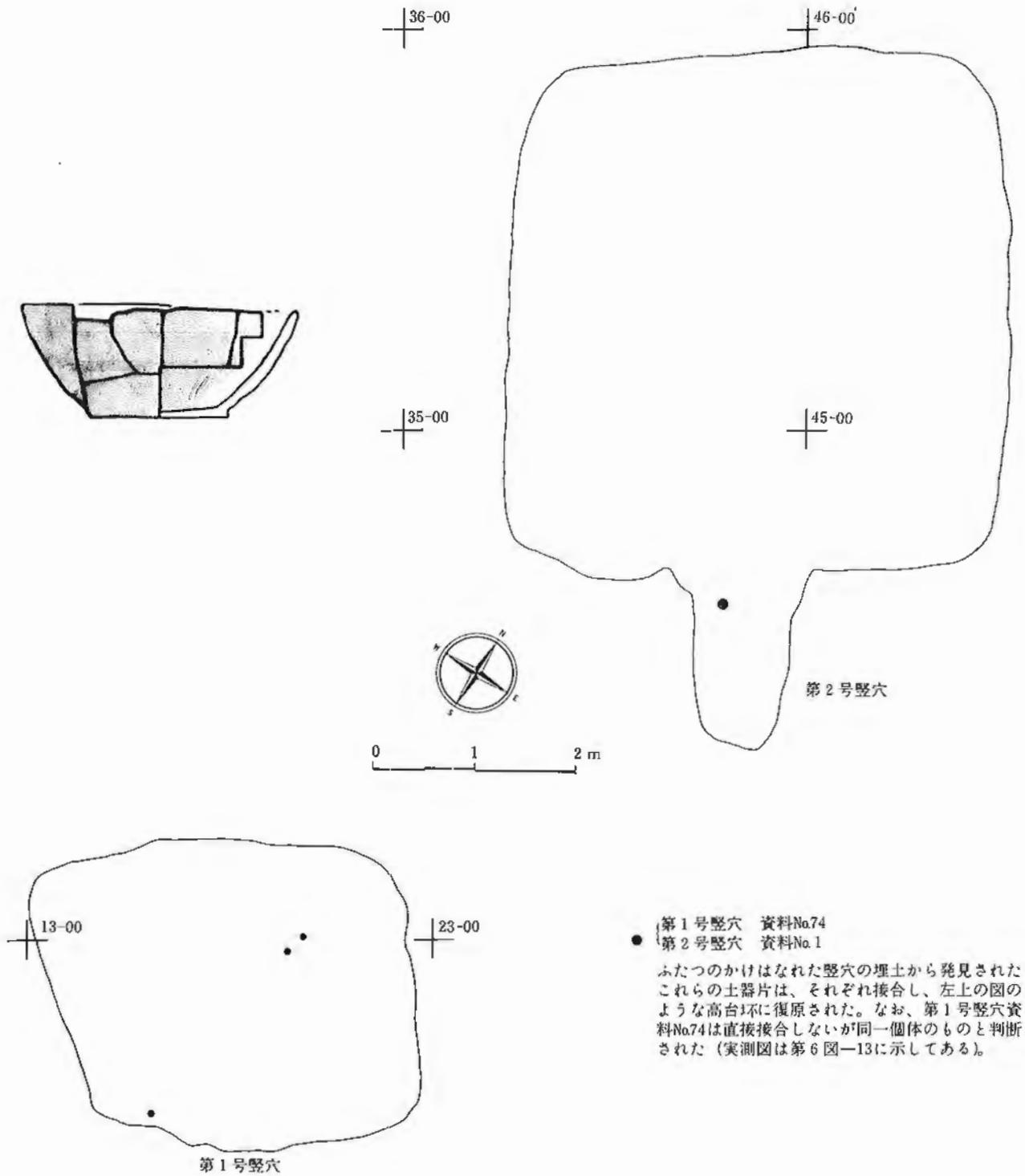
第20図 第1号竖穴埋土と第2号竖穴埋土とにおよぶ土器片の分布一7



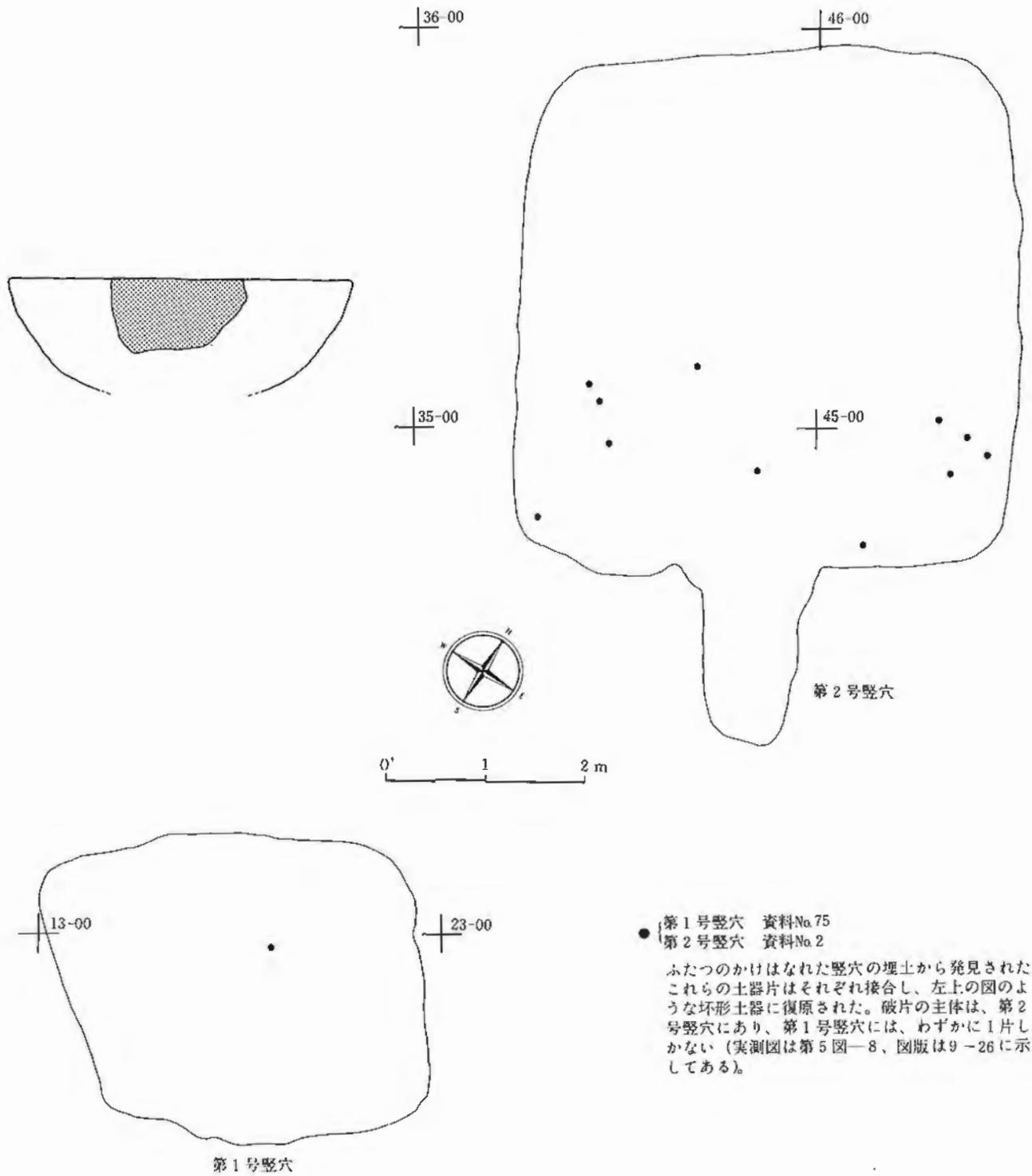
第21図 第1号竖穴埋土と第2号竖穴埋土とにおよぶ土器片の分布一8



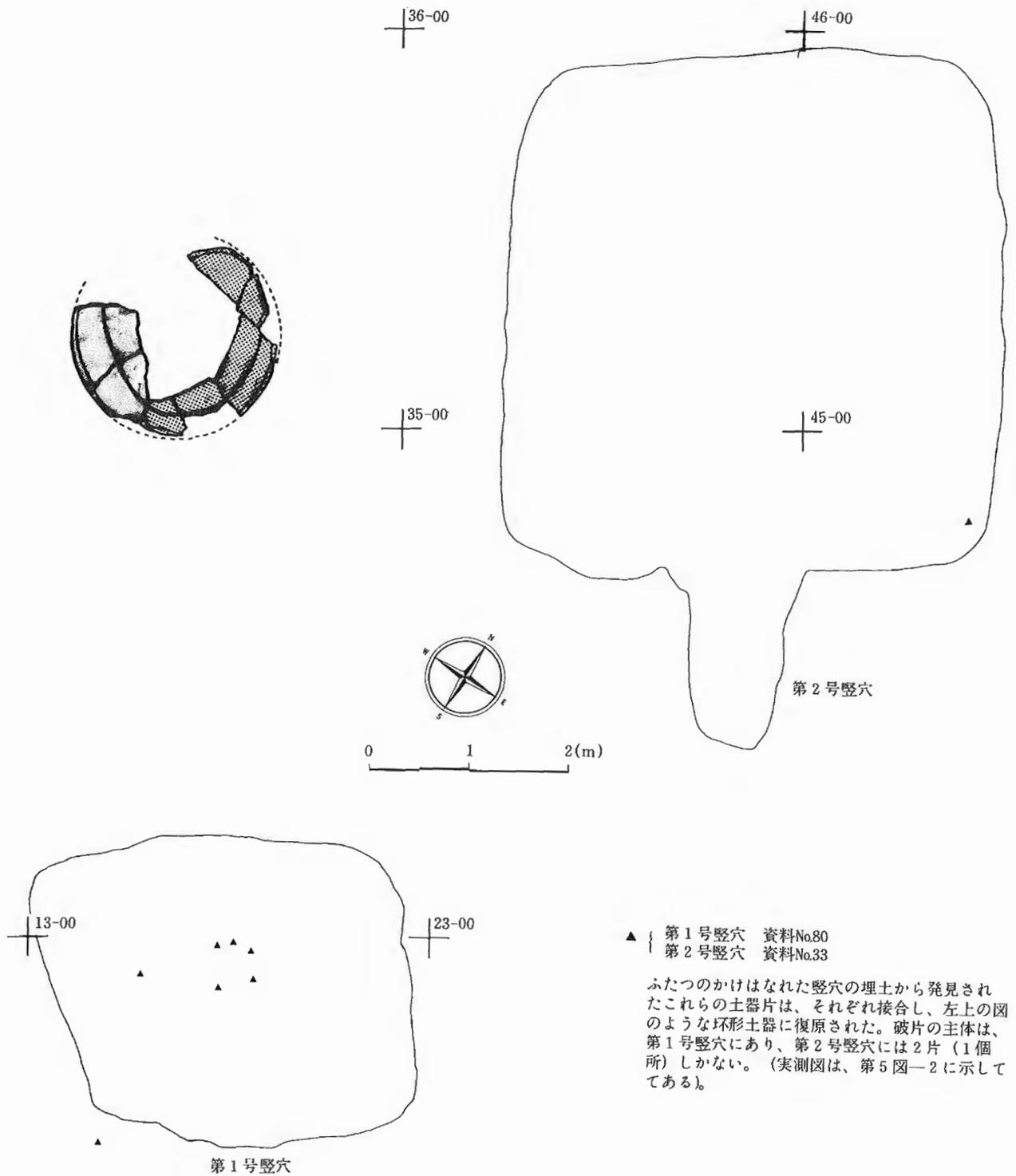
第22図 第1号竖穴埋土と第2号竖穴外におよぶ土器片の分布—9



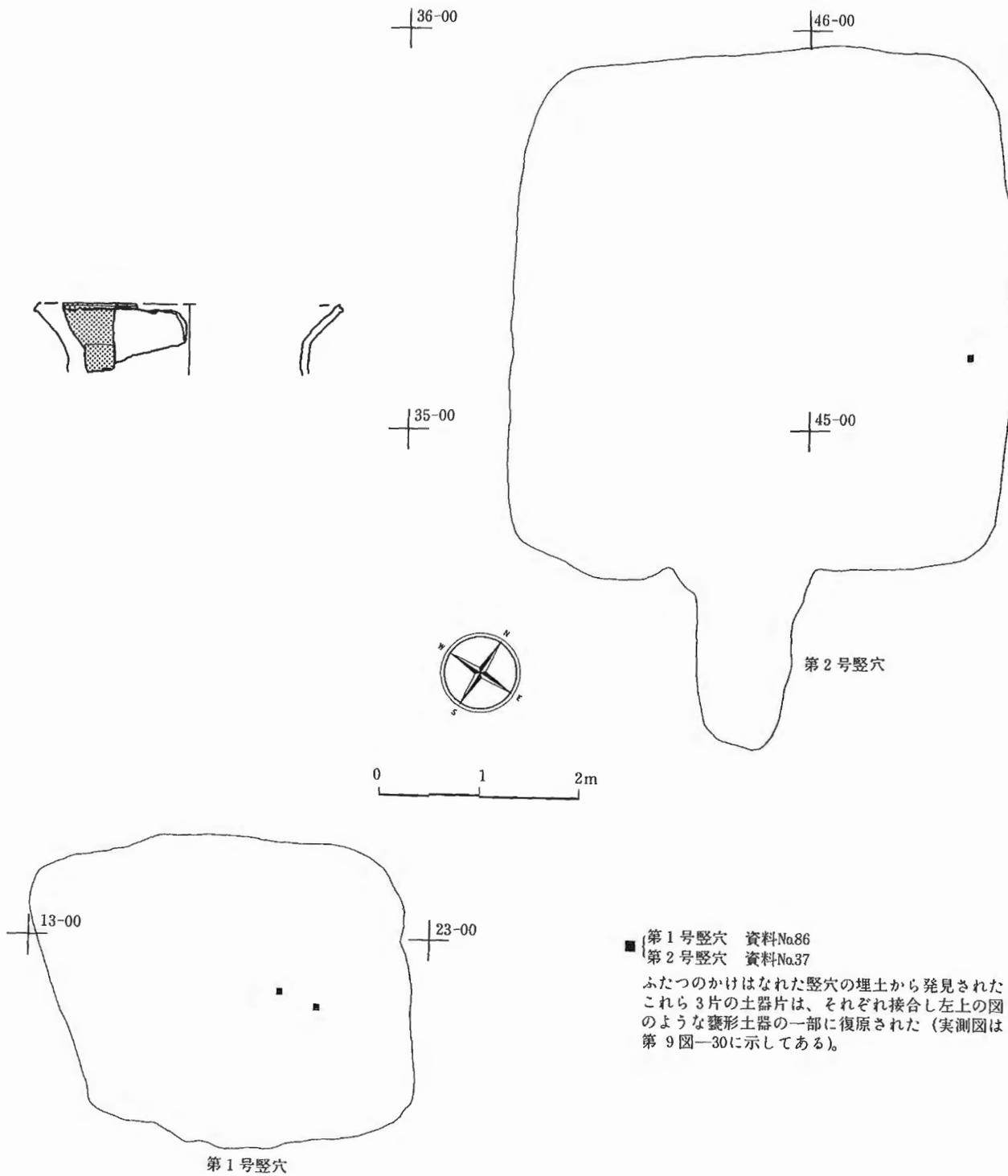
第23図 第1号竖穴埋土と第2号竖穴埋土とにおよぶ土器片の分布—10



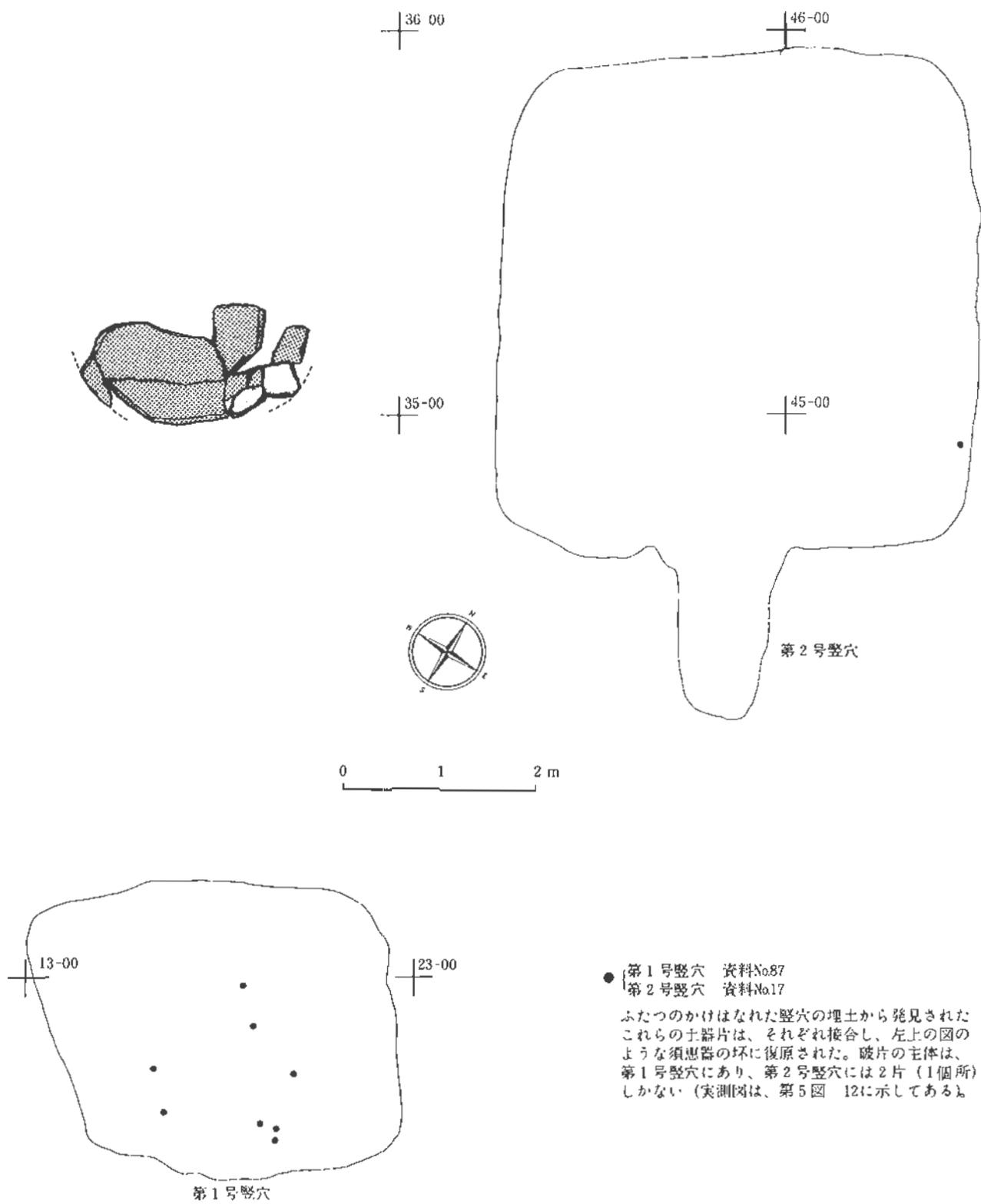
第24図 第1号竖穴埋土と第2号竖穴埋土とにおよぶ土器片の分布—11



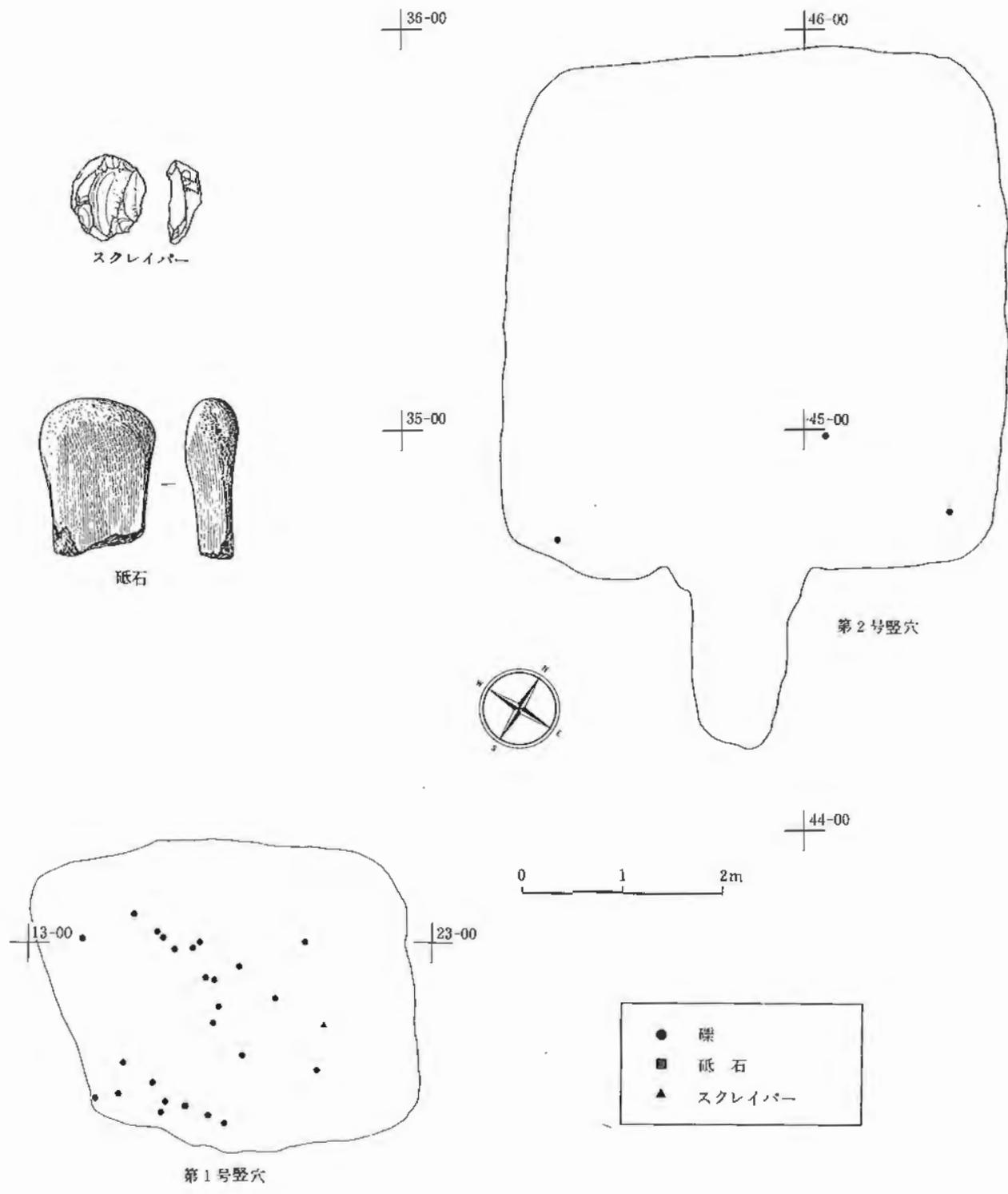
第25図 第1号竖穴埋土と第2号埋穴埋土とにおよぶ土器片の分布—12



第26図 第1号竖穴埋土と第2号竖穴埋土におよぶ土器片の分布—13



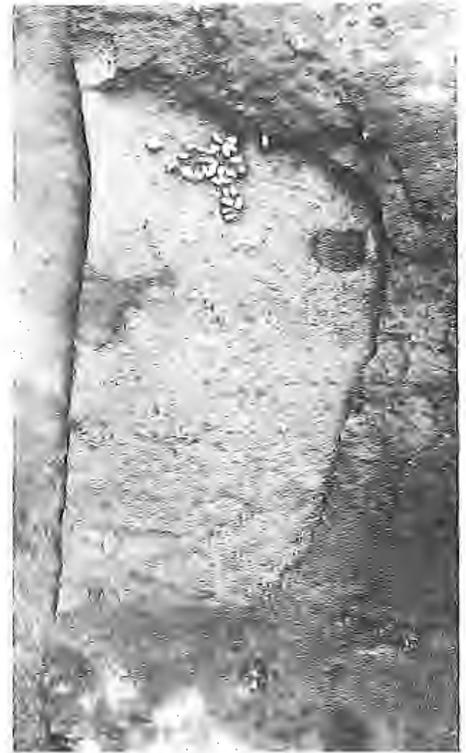
第27図 第1号竪穴埋土と第2号竪穴埋土におよぶ土器片の分布 -14



第28図 第1号竖穴埋土と第2号竖穴埋土における石器、礫の分布



①



②



③

応用電気研究所前住居址

①東からみる

②北からみる

③床上の玉石出土状況

④壁際にみられる土掘工具の痕跡



④

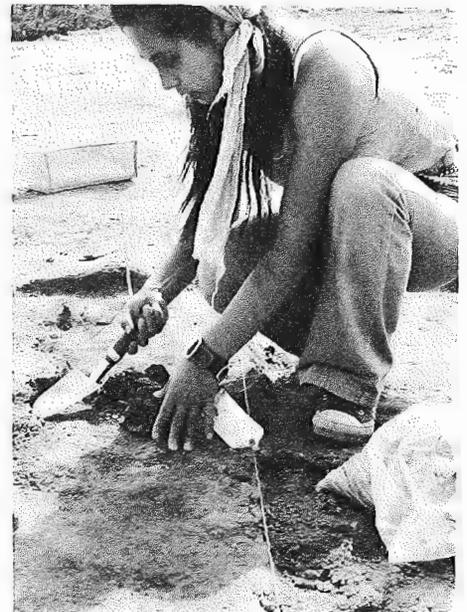


⑤

- ⑤課外活動共用施設建設予定地の
 竪穴の発掘風景（手前第2号竪
 穴、向う側第3号竪穴）
- ⑥課外活動共用施設建設予定地の
 発掘風景（西からみる）
- ⑦発掘中のスタッフ



⑥



⑦



⑧



⑨

⑧第1号竪穴が完掘された状況（西南からみる）
⑨・⑩第1号竪穴の埋土から出土する遺物。土師器が破片となっており重なっている。



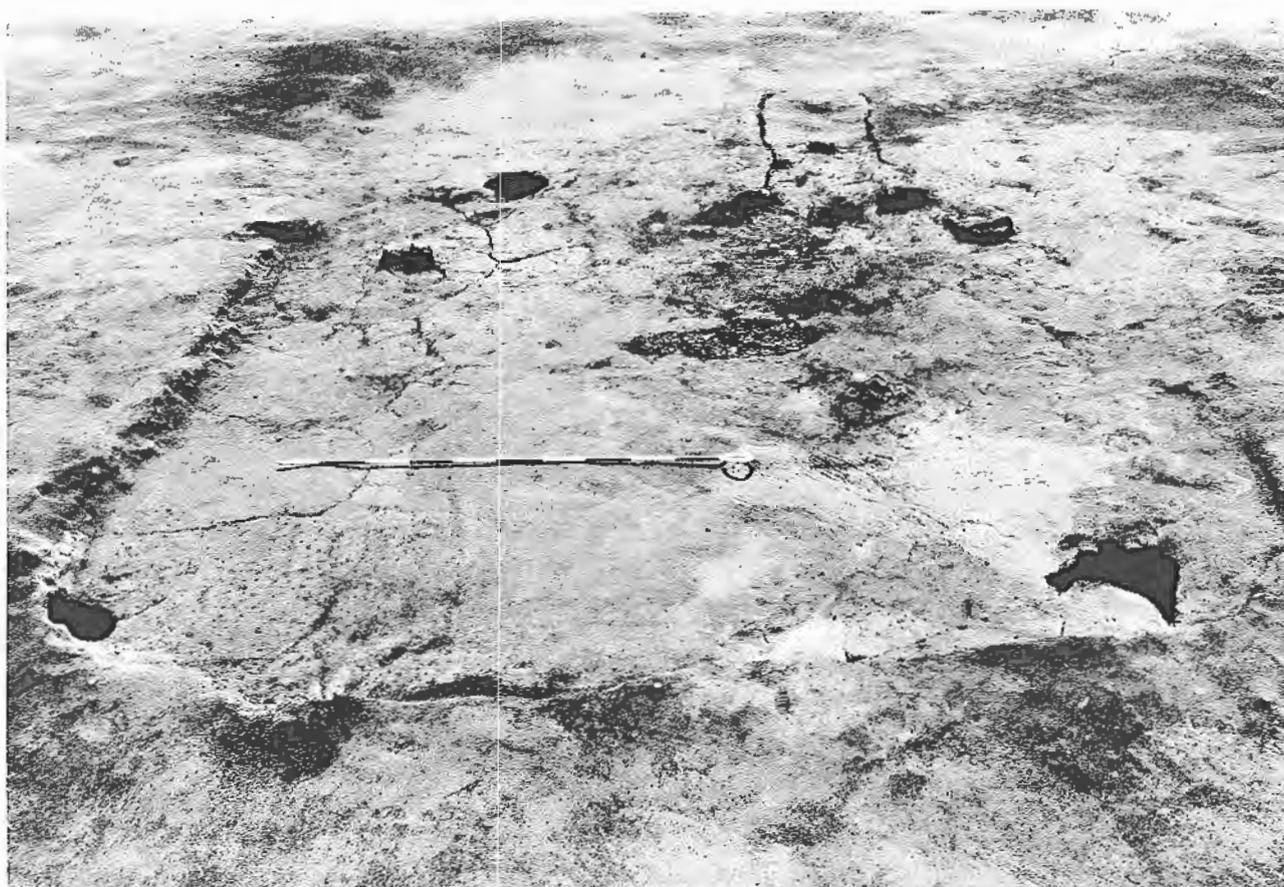
⑩



⑪



⑫



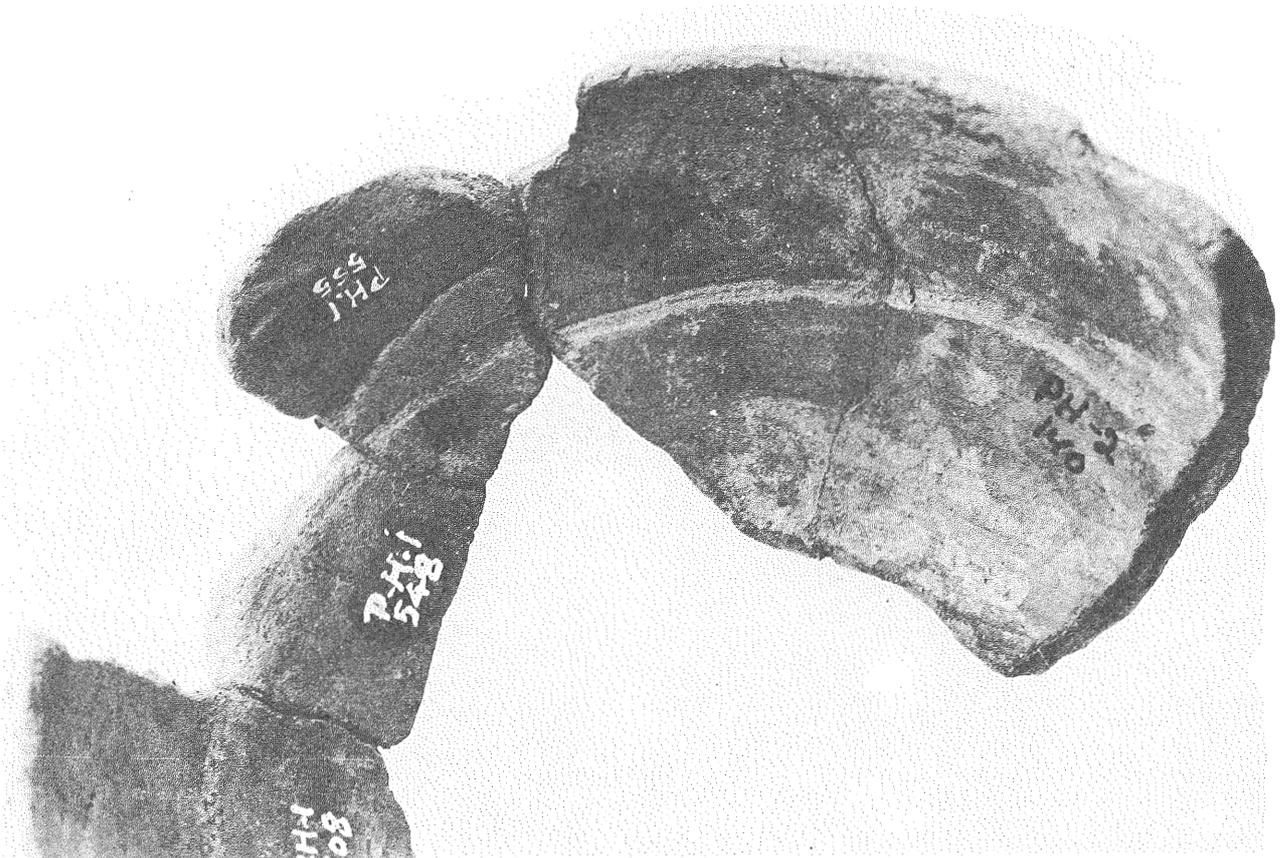
⑬ a

⑬第2号整穴が完掘された状況。向う側にカマド・煙道がみえる。そのア
ップが⑭である。カマドの右ソデにみられる土器片が復原され第6図16、
図版11となる（北側からみる）。

⑬第3号整穴が完掘された状況。向う側にカマド・煙道がみえる。南東(上)、
南西(右側)の壁の一部はくずれてははっきりしない（北側からみる） a
と出土した甕形土器 b

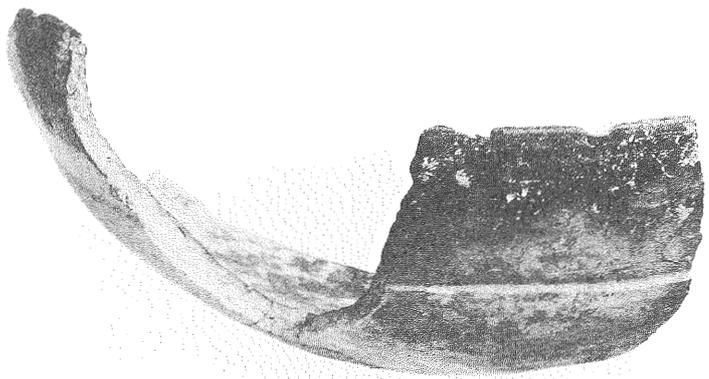


⑬ b



⑭

⑭資料No 1-80と2-33が接合したところ 坏形土器。
⑮～⑰資料No 1-22 坏形土器。⑯は黒色処理、⑰
はミガキをアッブしたもの。



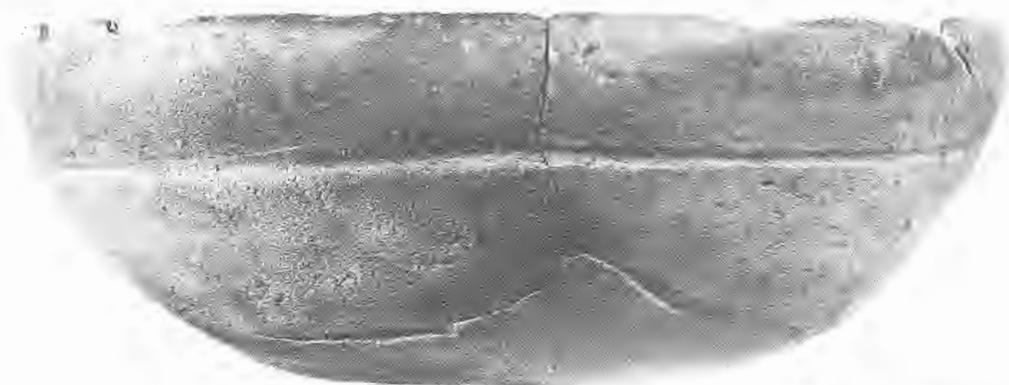
⑮



⑯



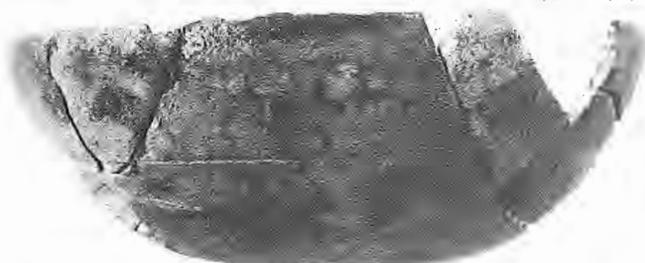
⑰



⑱



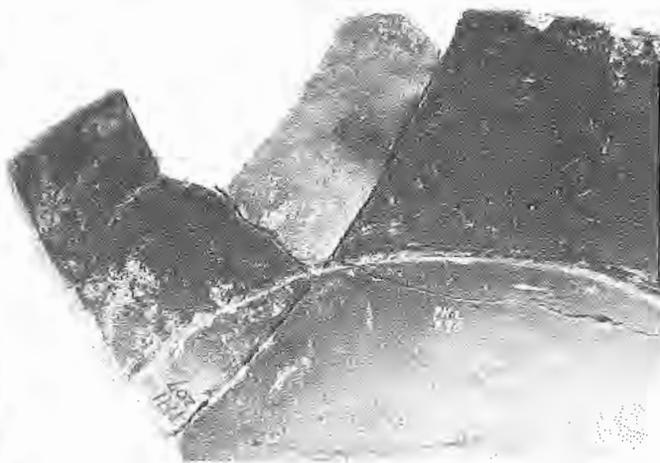
⑲



⑳



㉑

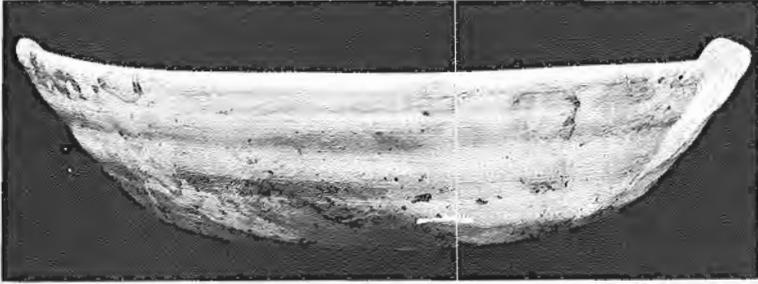


㉒

⑱資料Na 1-25 坏形土器

⑲資料Na 1-77 坏形土器にみられるミガキ

⑳～㉒資料Na 1-26 坏形土器。㉒は内面の
黒色処理とその脱色部分、㉑は底外面
の文様

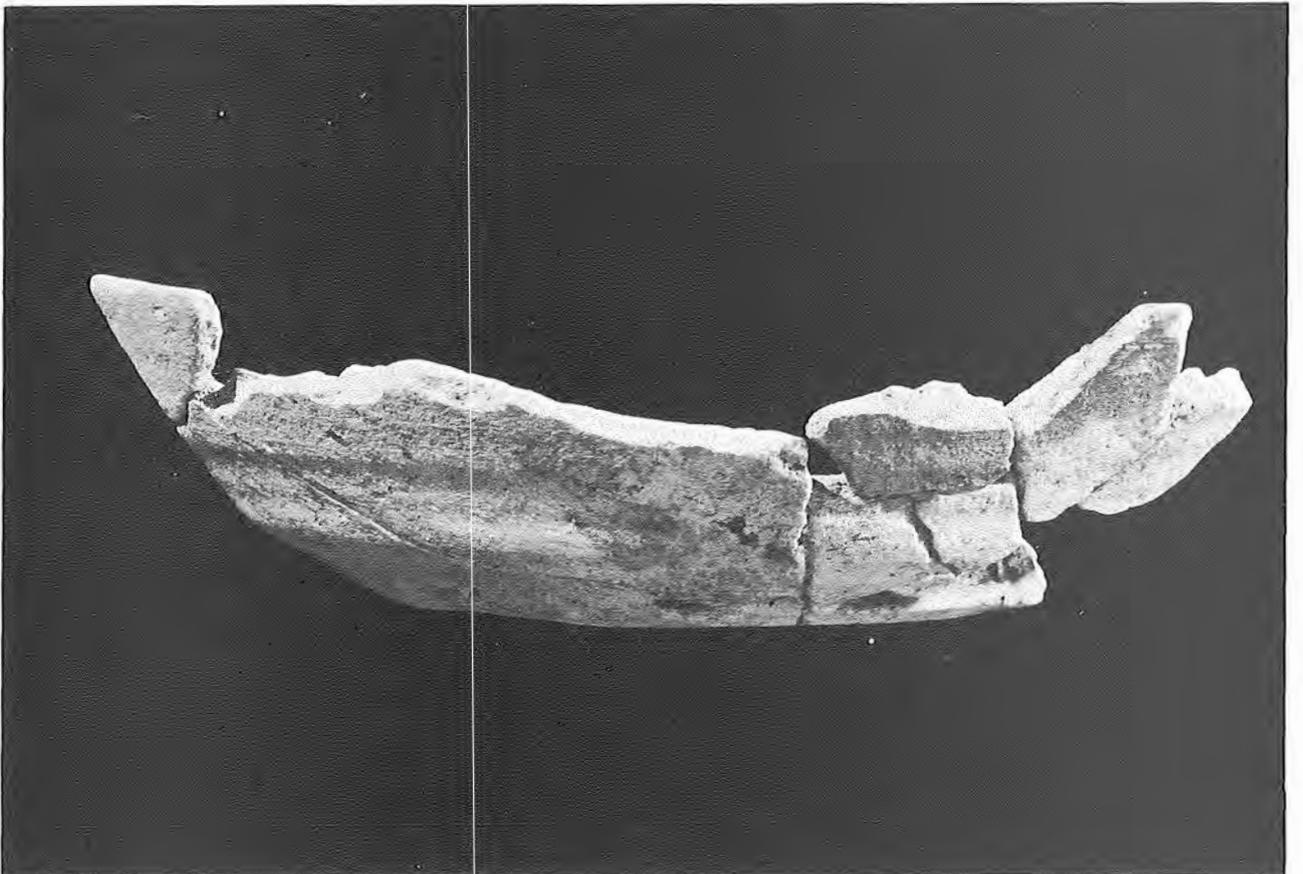


⑬



⑭

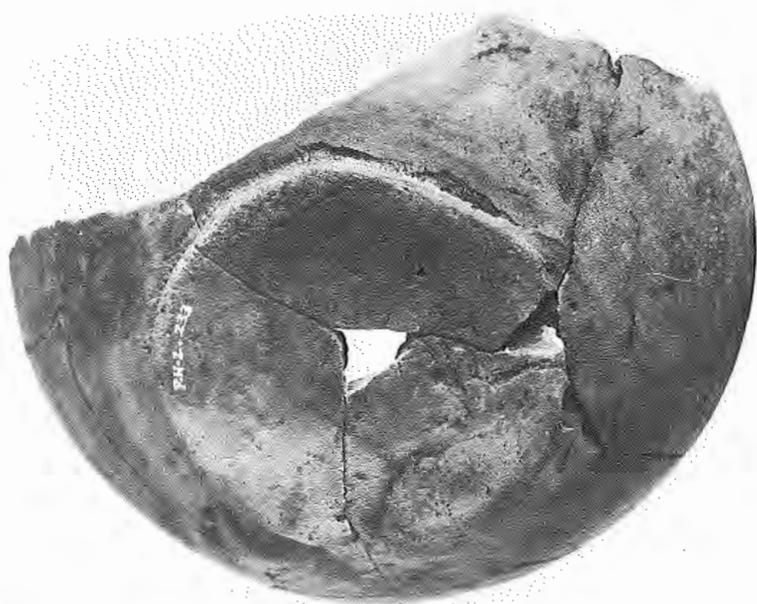
⑬資料No 2-12須恵器の坏、⑭は
底でへら切りの様子がわかる
⑮資料No 1-87 + 資料No 2-17
須恵器の坏。



⑮



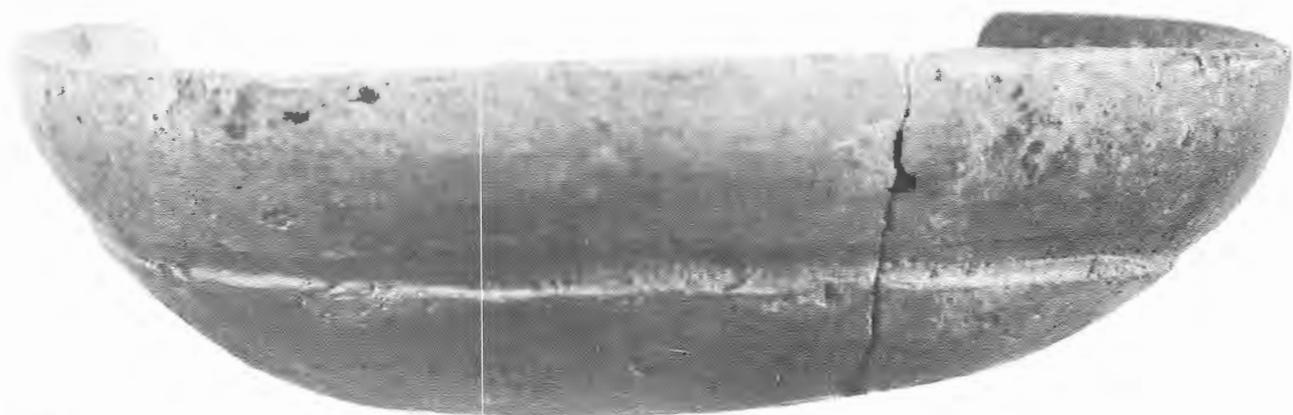
②6



②7

②6資料No 1-75 + 資料No 2-2 坏形土器

②7資料No 1-74 + 資料No 2-1 高台様坏を底から
みたところ



28



29



30

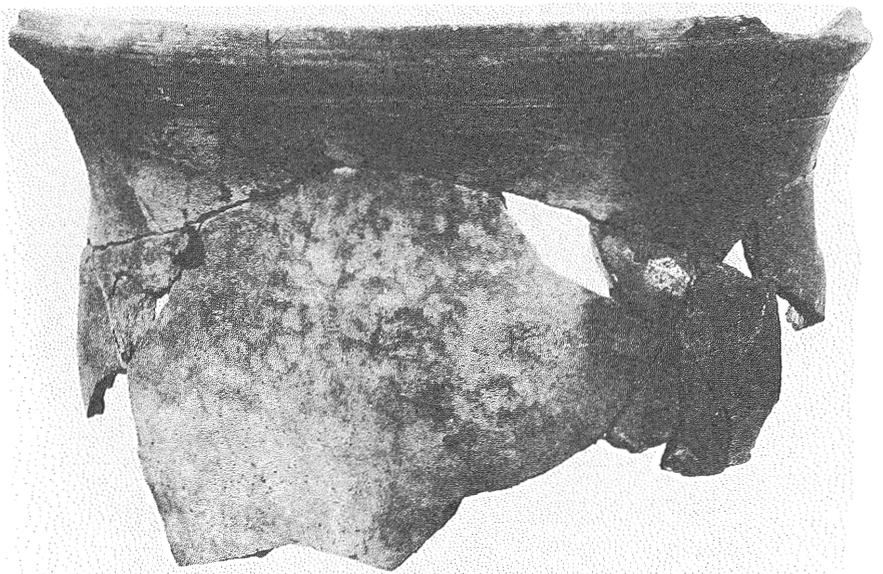
- ㊸資料No 2-11 坏形土器
㊸資料No 1-9 甕形土器。第1号壜穴埋土出土のうち完形に近くまで復原された唯一の例である。
㊸資料No 2-9 甕形土器。第2号壜穴のカマド右ソデの芯にされていたもの。



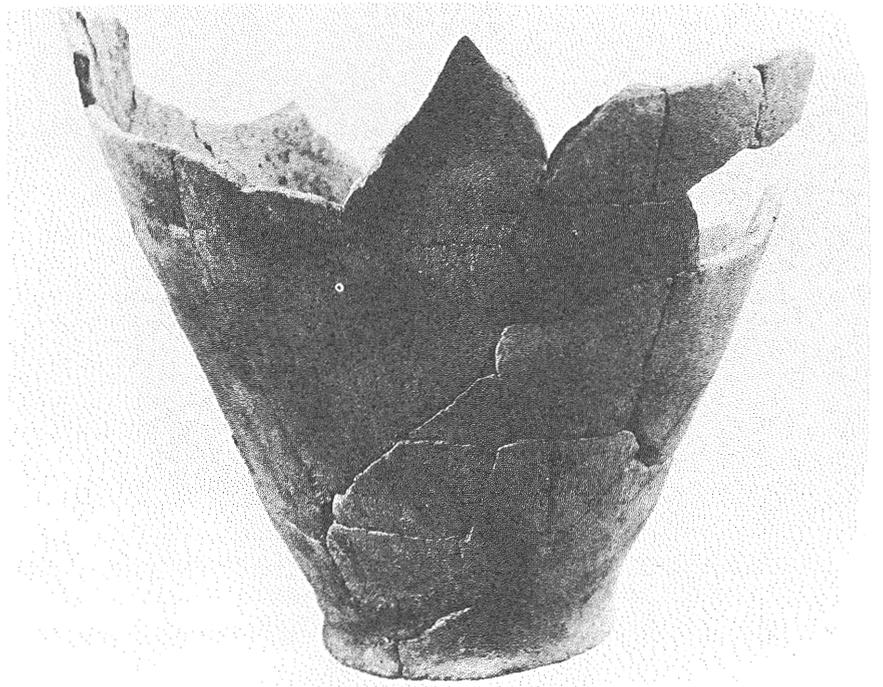
③①

③①資料No. 1-46 + 資料No. 2-4 甕形
土器の口縁部。キザミ目に入る例。

③②、③③資料No. 1-21 + 資料No. 2-3
甕形土器、胴部上半でわずかに接合す
る。



③②



③③



⑭ a



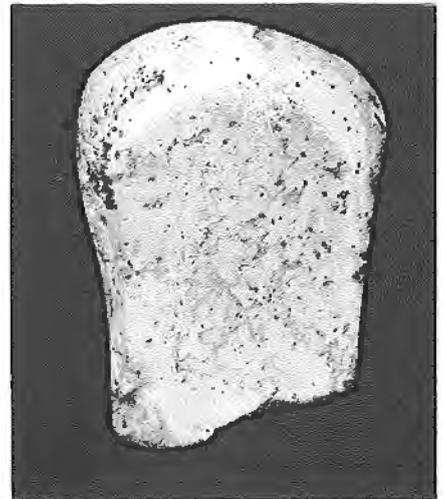
⑭ b



⑮



⑯ a



⑯ b

⑭資料No 1-52 + 資料No. 2-18
 甕形土器の胴下半部。⑭bはその
 底部でほぼ中央部に沈線がある。
 ⑮黒耀石製スクレイパー。
 ⑯泥岩製砥石。

昭和56年6月30日 発行

北大構内の遺跡 昭和55年度〔1〕

発行所 北 海 道 大 学
札幌市北区北8条西5丁目

編集者 吉 崎 昌 一
岡 田 淳 子

印刷所 第一法規出版株式会社
東京都港区南青山2-11-17
北 海 道 支 社
札幌市中央区北4条西6丁目
(毎日札幌会館内)

北海道大学